

---

# Battle Santa

光臣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B a t t l e   S a n t a

### 【Nコード】

N 6 0 6 8 Z

### 【作者名】

光臣

### 【あらすじ】

生まれたばかりの女サンタが成長し、一人前の女サンタになっていく話。数々の出会い、別れを繰り返す…対立する派閥同士の争い、戦争を乗り越えた先に彼女を待っているものとは…

## サンタクロース

今年も時期が来た。1年に一度、子供達が夢を叶える日。そして、家族、恋人、様々な人間が愛情を深める日。逆に去っていく日…。

まだ無知な子供達は「きつと自分の所にもサンタさんがやってきて、プレゼントを届けてくれる」そんな夢を抱き、当日を迎える。徐々に大人になっていくに連れてそんな夢も消え失せ「サンタなんていない。寝たふりをしていたら父親がプレゼントをくれた…」そんな現実を突き付けられ、少しづつ大人へと近づいていく…。

しかし「良い子にしていたらきつとサンタさんがきてくれる」いつまでもサンタの存在を信じている純粋な子供達の所へ『サンタ』は必ず現れるのだ。それは父親でも母親でもなく、恋人でもない紛れもないサンタクロース。老若男女問わず、夢を叶えてくれる魔法使い。

今年もきつと彼女は現れる、人々の夢を叶える為に…。

## 競争により対立、それからの戦争

ここは一年中、雪が降りしきる極寒の大地。

腕に覚えがある冒険家はおろか、強靱な肉体を持つ戦士ですら足を踏み入れないほぼ未開拓の土地。

ほぼ北極圏に近いため、動植物の活動もほぼ見られない。その寒さと過酷な環境に適合できる生物は海洋生物くらいである。

そんな誰も足を踏み入れない秘境とも呼ばれる大地で暮らす、風変わりな種族がいた。

外見上は人間と変わらないが、一切の食事の類は摂らず、空気と水だけで何百年も生き抜けるのだ。

そんな異常な発達をした彼らだが、一年に一度。必ず故郷を離れ、彼らなりの『食事』に出かける事がある。その食事を行わなければ、次の食事の時期までには死んでしまうといふこれまた変わった種族なのである。

食事と言えば通常は何らかの食品、あるいはそれを調理してできた料理を食べる形が一般的である。しかし、彼らの食事とは『人々の夢や希望などの正の心を摂取する事』である。

食事をする為に、彼らは人の心を読みその者の欲する物品を入手、または作成、望む事を極力叶える。対価として対象の満たされた心を食するのだ。

正の心を食すれば、摂取した側も善良な心の持ち主になりまた来年も同じように、食事をする為に一仕事する。

これがX'masという彼らが一年に一度、外界へ唯一出かける事が出来る日。人々がサンタと呼ぶ種族なのである。

この世界のサンタの総人口は意外に少ないと思われがちなのだが、実はかなりの数が存在する。人間、亜人、エルフといった夢や希望を持つ高度な生物の人口を合計し、60億とするならばその半数の30億はいる。

食事の対象はなにも人間だけとは限らず、植物やモンスターといった言葉を持たぬ者からでも摂取する事が可能な為、新たな生物が生まれると同時にサンタの人口も比例して増える。生殖活動や、分裂の類ではなく、前触れなく出現、むしろ発生に近い形でサンタは生まれるのだ。

世界の種族でも1・2位を争うほどの総人口の多さからももちろん食事の競争率も高い。毎年、満足な食事を行う事ができずに絶命してしまうサンタも少なくないのだ。

若いサンタほど仕事の経験が少ない為、要領を得られないので激しい競争に負け、次々に命を落とす。

逆に高齢になったサンタはその分何度も何度も仕事の経験をしている為、若いサンタよりも食事の成功率が高い。故に、人々が運良く見かける事が出来たという赤い服を着たヒゲっ面の爺のような姿のサンタは

間違いなくベテランのサンタでありその目撃例も多い事から、サンタ「ヒゲ爺」という固定概念が生まれたのだ。

食事を摂れば摂るほど彼らは仕事を覚えるのは当然だがそれ以上に、彼ら特有の『魔法』と呼ばれる技術も飛躍的に上昇する。食事の質が良ければ良いほど、魔法技術の質も上がり食事競争に勝てる確立も上がるのだ。

魔法例：

アラーム： 鈴の様な音を鳴らし、人々の期待度を高め、  
食事の確立を飛躍的に上昇させる効果がある。

サーチ： 住居などに侵入可能な出入口がない場合、  
壁や天井などをすり抜ける事ができる。

スルー： 気配を殺し、限りなく目視不可能なレベルにまで  
体を透過させる事が出来る。

食事を争い、抗争や対立するサンタも少なくない。小さな抗争から発展し大規模な戦争が巻き起こる場合もあるのだ。生き残る為とは言え、過酷な生存競争を日夜強いられているサンタだが世界の総人口は毎日約20万という単位で増え続けている為、比例し人口を増やし続けるサンタの人口も減る事はないようだ。

近年、サンタの中でも『正の心』は競争率が高い為、あえて『負の心』を食すサンタが急増し赤い正装ではなく、全身真っ黒の衣装を纏った通称『ブラックサンタ』が急増し始めたのだ。彼らは、『負の心』を栄養としている為か、非常に好戦的であり腹黒く、邪悪な魔法を使う。純粹な『正の心』は非常に希少価値が高いのだが、『負の心』は今までサンタは手を出さなかった為か純粹で尚且つ凶悪な心を手に入れるのは容易い事もあり、質が良ければ魔法の質も上がるという特徴からブラックサンタ勢が優勢なの言うまでもない。現在、サンタの世界では『正の心』を重んじる派閥『サンタクロース』と『負の心』を重んじる派閥『ブラックサンタ』が対立を起こし交戦状態が続いているのだ。

外界に赴く前に必ず一度は大規模な勢力戦が繰り広げられる。その日は食事の日の前日。『イブ』と呼ばれるサンタ達にとっては最

悪な日なのである。

## 名無しのサンタ

自然発生すると言っても過言ではないサンタの生態は彼らに血の繋がりが家族と言った概念を持たせない。生まれた時から一人で生き抜く最低限の力と知恵を持つているのだ。しかし、いくら故郷で生活するとは言え一人の力ではなんともならない場合もある。

最悪な場合、生まれた瞬間に好戦的なサンタから攻撃を受け消滅してしまふケースも少なくはない。まさに運も生き残るには必要不可欠な能力なのである。幸いな事に良心的なサンタの集落の傍で生まれた者は、なんとか食事の時期までは生き残る事を約束されるのだがそれぞれの集落では、やはり生き抜くために厳しい掟が存在するようである。

今日もまたサンタが住む大地、『アークチツク』に新たなサンタが発生した。生まれたときから赤い服を纏い、赤い帽子を被り赤いブーツを履いている姿。最近は輪廻の関係で生まれた時から全身真っ黒の衣装に包んだサンタも発生するらしいが…

このサンタは赤。つまり、発生した時点では『正の心』を栄養にする『サンタクローズ』に該当する派閥である。サンタ達には交配や生殖機能は存在しないのだが、性別はある。食事を摂る場合、大抵は男か女かで対象が2種の性別を持つ為、それに合わせてサンタも性別を分けたのだと思われる。

遠慮という言葉を知らない豪雪。吹雪の中に赤が目立つ。次に特徴的なのは腰ほどまである長い髪。全体的に露出度が高い衣装。傍から見れば物凄く寒そうに見えるが、寒さに対する耐性は生まれつき非常に高い。ぱつと見ただけでこのサンタは『女』である事がわかる。



初めてみる景色、吹雪にも全く動じず平然とどこへ向かうか模索しているようである。親という者はサンタの世界に存在するはずもなく自分の名前はおろか、自分の家族や仲間も知らずただわかるのは、己の目的のみ。

（まずなにをすればいいのか…）

彼女はやや途方にくれたような顔であたりを見渡している。生まれた瞬間から孤独という耐え難い試練を受けてしまった。一人でも生き抜く力を己で身につけなければならぬサンタならではの苦行であつた。

吐いた息に含まれる水分も一瞬で凍りつきまるで宝石の様にキラキラと光沢を帯びる。辺り一面真っ白な白銀の世界。太陽の光は、空を覆う厚い雲の隙間から差し込みはしているものの積雪に反射し、より一層白さを強調する。

方位磁石などもつてはいない彼女は方向感覚も麻痺し一応、まっすぐ進んでいるようではあるが実は同じ場所をぐるぐる回っているのではないかと思われる。もし、彼女がサンタでなければこの全てを凍りつかすような寒さと真横から、真上から、あらゆる方向から吹き付ける吹雪に耐え切れず確実に遭難、もしくは命を落としているであろう。

進む方角も安定しない、かと言って動かなければなにも始まらない。彼女の生存本能は自然と足を前に運ぶ。だが、些細な振動や気温の変化で雪崩が起き易い山の傍は避け偶然発見した木の棒で前方を確認しながらの歩き方。さすがはサンタといったところである。生まれて早々、雪崩やクレバスに巻き込まれ命を落とすわけにはいかないと体が既に生存本能として彼女に教えているようである。

一体どれほどの時間が経ったのかわからないが休憩を挟みつつではあるが確実に体力がすり減らされていく。いくら寒さに強いとは言え長時間、外気に晒されていれば体力も奪われる。一体何キロ歩

いたのか、距離を測る術もあるわけがなく、実は生まれ落ちた場所からそれほど進んでもいないのではないかという不安にも駆られる。一向に天気は安定する気配もなく、容赦ない吹雪がまるで煙のように舞い、視界を奪う。

（まずは集落を探さない…）

なんにしてもまずは、ゆっくり体を休められる場所の確保。これが最優先である。しかし、地図もなにもない状態では視界の3メートル先からは、もはや白一色であるこの大地で集落を見つけるなど、真っ暗な部屋の中で落としたりコンタクトレンズを探すようなものである。まあ…ほぼ無理に等しい行為であることには変わりはない。

運という能力がないサンタは大抵この辺で襲われるか体力がなくなり消滅するかのどちらかでサンタの基礎能力が試される第一の試練のようなものである。辺りを見渡しながら、彼女は休憩を取りながら体力の回復を待っていた。相変わらずの吹雪だが、時間によつては若干視界が空ける時があることを学習したようで、その時を待っているようだ。

（ん…あれは…）

突如、彼女の視線の先にはうつすらと赤い点が見えた。自分が着ている衣服と同じ色の赤。白と赤と灰色…彼女が生まれ落ちて初めてみた色の中で最も安心する色である赤の点。自分の視線の先に何者かがいるという事は瞬時に把握できた。つい先ほど生まれてから今までずっと捜し求めていた色である事に間違いはなかった。

迷わず目先の赤い点に向かって走り出した。目標である赤はいくら視界が悪くても見失うはずもなく真っ直ぐ視界に捉えられる。向こうも近づいてくる彼女に気付いたらしく走るよりも更に早いスピードで近づいてくる。こういう時、人は「おーい！」など叫び声を出して自分の存在をアピールするものだが、彼女はそんな事も知らずただ真っ直ぐ走っているだけである。

「……………おい……………！」

前方の赤い点の方から始めて聴く音が聞こえた。吹雪の音ではなく、なぜか安心できる音。初めて聴いた彼女は少々驚いたが、敵意のよ  
うな物は感じなかった為、更に走る速度を上げる。

「こんなところに一人でいたら危ないよ……？」

合流し、二人は対話できる距離まで近づいた。彼女の視線の先には、自分と似たような衣服を纏い見たことない乗り物に乗り、前方にはやはり見たこともない動物がいた。自分の姿も把握できていない彼女は、おそらくはこの前方にいる動物と一緒に形をしているのだからと理解し始めた。

「あ……もしかして……生まれたばつかなのかな……？」

一方的に目の前の動物は、自分に向かって音を投げかける。その意図や、意味を理解できない彼女はどうしたらいいのかわからない。なにしろ初めて聞く音であり、対処の仕方もわからないからだ。

「大丈夫！始めはみんなそうだったから！とりあえずここは危ないから……」

目の前の動物は自分の隣を空け、ポンポンと手をそこに上下させている。

「集落まで連れてってやるから……ここ乗りな？」

大袈裟なジェスチャーを織り交ぜながら、乗り物に乗るように催促する人物。彼女は首を傾げながら、一体この人物はなにを伝えようとしているかという真意を探るが……敵意や悪意が感じられない事か

ら、信用できると確信した。

おそらくは隣に来てと伝えようとしているのだろうかと、彼女は理解しななとかその乗り物に乗りこんだ。

「しかし…女のサンタとは…珍しいなあ…きっとみんな優しく教えてくれるよ」

一方的に音を発する人物の口元を見ながらももしかしたら自分も同じような音を発する事ができるのではないかと思いついた。自分の足で走るよりも早くしかも快適な乗り心地な乗り物にも驚きを隠せなかったが

どうすれば自分の感情や、思いを伝えられるか彼女は頭をフル回転させ、必死に考えているようだ。

風を切る音がうるさく、先ほどまでやはりわからない音を発していた人物だったが音がかき消されよくわからない。しかし、彼女は食い入るように口元を見つめながらその真似をする事から始めていくようだ。

「一度覚えたらもう忘れないから…焦る事ないよ！」

彼女の気持ちを察してか、この人物は優しい言葉をかける。意味もなにも通じてるはずもないとわかつてはいるようだが、それでも彼女を励ますようにひたすら一方的に言葉を投げつけている。

前方から突風が吹き荒れ油断していた彼女の帽子が宙に舞う。

「……………あ……………」

彼女の口から初めて音が出た瞬間であった。

## 帰れる場所

「ごめんな…僕はまだ『リスニング』の魔法が使えないから…」

魔法：リスニング：相手の思ってる感情や、欲求などを感じ取れる。

言わば読心術のようなもの。

先ほど吹き飛ばされた帽子はすぐに回収され、彼女に戻された。疲れた彼女を気遣ってか、この人物が拾って届けてくれたのだった。孤独から救ってくれた他に自分の印、唯一自分に与えられた品物を届けてくれたこの人物に対して彼女はなにか温かい物を感じた。

こういう時、人は一体なんて言うのだろう。彼女はもじもじしながら、彼が自分にそうしたようになんとかジエスチャーも交えながら何かを訴えようとしている。彼の目を見ながら、帽子を指差し

「……………あ……………あ……………う……………」

言葉にはなっていないが必死になにかを訴えている。そんな彼女の仕草を見て彼はちゃんと、なにを伝えようとしていたのか、なんとなくわかるような気がしたようだ。

「ああ…そういう時はね…『ありがとう』っていうんだよ…」

しっかりと彼の口元を凝視し、形を記憶する彼女。何度も口をパクパクさせ、なんとか音を発しようとして試行錯誤する。

「あ……………い……………あ……………と……………」

なんとか出てきた言葉。しかし、まだ言葉というには粗末でよく耳を傾けなければ、聞き取れないレベルの音であったが彼はしっかりと聞いていたらしく

「どういたしまして!」

屈託のない笑顔でそれに応えてくれた。まだいろんな言葉がわからない。しかし、彼の笑顔は言葉はわからなくてもなんとなく思いが伝わった。

彼女はそんな笑顔を見て自分も無意識のうちに笑顔になっていた。会話とも呼べない代物だが、初めて相手との思いのやりとりが言葉という音で成立した瞬間であり、彼女にとっては大きな一歩となった。

嬉しいという気持ちと同時にもっと意思の疎通を味わいたい。もっと知りたいという気持ちが高まっていった。

サンタはそういった感情の昂りや、純粹な嬉しさ、悲しさ、怒りなどで独自の能力が開花する場合がある。魔法であることには変わらないが、これも彼らなりの生きていくための手段、つまり環境適応力とでも言えるのだ。

彼とのやり取りの中、彼女は始めての感情や、感情の昂りを感じ自分でも知らないうちに一つの魔法を覚えていたのだった。

魔法：トーク：自分の思ってる感情や思いを

相手の心に直接伝える事ができる。

しかし、魔法の使い方もわからないので彼女はその魔法を覚えた事すら気付いていない。だが、彼はすぐに彼女が魔法を覚えた事を察する。魔法が使えるものは、相手の魔力を感じる力に長ける為、魔力の強さの度合いによって、具現化された光などを感じたり見る事が可能なのだ。

「なにか…魔法を使えるようだね…魔法の使い方を教えてあげるよ……………」

言葉などの表現などとは違い、魔法はジェスチャーで簡単に伝える事ができる。集中力がある為、彼は一度乗り物を止めて彼女に自分の真似をするようにジェスチャーで教えていく……………

少1時間ほど粘った甲斐があつて、彼女は自分に宿る魔力を集め、魔法の発動までできるようになった。まだ彼女の魔力は低く、充分な発動とは呼べないが…覚えただけの魔法：トークを使い彼の心に直接気持ちを伝える事ができた。

彼の心に直接伝わった言葉はたった一言『ありがとう』だった。

彼女は魔法：トークを覚えた事により現在、乗り物で彼も暮らしているという集落へ向かう最中で彼は言葉を発し、彼女は心に訴えるという会話を成立させながら移動している。

彼女もあまり魔法：トークばかりに頼っていては、いつまで経っても言葉の発声法などを覚えないと感じていたのとどこどころ発声法の練習を織り交ぜながらそれなりに気を許せる仲になっていたのだ。

「でも驚いたよ！生まれてすぐに魔法を覚えるなんて…」

（それって…珍しい事なの？）

「うんうん！絶対に君は魔法の資質が高いんだよ！僕が保障する！」

（でも…私もよくわからないよ…これが最初で最後のまほー？になるのかもしれないし…）

「あまり悲観的に考えるのはよくないよ…魔法っていうのはきっかけさえあればすぐ覚えるさ！」

「……………ひ……………か……………んて……………き？」

「んーなんて説明すればいいのかな…後ろ向きにならないでってことだよ！」

（わかった…がんばるようにするよ）

そうこうしている内に、二人の視界の先には小さな建物群が出現した。彼が言っていた集落であることには間違いないようだ。遠めでもポツポツと赤い服をきたサンタがなにかをしているのがわかる。

「ほら！あそこだよ！まずは長老のところ連れてってあげる！きつと歓迎されるよ！」

真っ直ぐな笑顔を見せる彼は彼女の肩を叩き、彼女も視界に集落は収めているのだがそれでも集落の方を指差し、嬉しそうに感情を昂らせている。

サンタは、生まれた場所が集落の中という事自体が珍しくかなり



の確立で人里離れた雪原や、険しい山岳地帯で発生する事が多い。数々の説があるが、おそらくは何年、何百年もの昔、そこで命を落としたサンタの魔力により、再び発生しているのだらうと言つのが定説になっている。

大抵のサンタは故郷はない。しかし、運よく最初の集落を発見した場合そこを自分の故郷と決めるサンタが大半である為、実質的にその集落で永住するサンタは多い。

集落に到着した二人は、彼の先導の元この集落の長と呼ばれるサンタの家へと向かった。彼が言ったように、長は快く彼女を受け入れてくれ、この集落での生活を許可してくれた。しかし、この集落でも少々厳しい掟はあるらしく、それに従わない場合は追放される事も覚悟しておけとの事であった。

「生まれたばかりでお疲れじやろう…今日はゆつくりと休むがい…確か空き家が…」

「ありがとう…」

「あまり畏まらなくても良い…この集落はもうそなたの故郷じゃ…」

「ふ……る……さ……と……?」

「そなたがいつでも帰ってこれる場所じゃ…」

「ごめんなさい…わからない……」

「ほっほっほ……今はわからないじやろうが…そのうちわかる…」

「そのうち……でも…私は…知りたい…」

「あまり一日でなんでも知ろうとするのは毒じゃ……簡単なことから少しづつ覚えていけば良い…」

(言葉を発するのは疲れます…)

「ほっほっほ……言葉も今日覚えたてのようじゃからのお……ではもう一っただけ簡単な事を教えよう」

「はい……」

「おかえり、と、ただいま、じゃ……」

（それは2つでは……）

「いいや……この言葉は2つで1つ、どっちか片方だけ覚えても意味がないのじゃ……」

（難しい……）

「いやなに……簡単じゃ……誰かが集落に帰ってきたら『おかえりなさい』と言っ……」

自分が集落に帰ってきたら『ただいま』と言っ…… たったそれだけじゃよ……」

（どんな意味の言葉なの？）

「それも……もう少し長く生きてたらわかるようになる……とりあえず言葉だけは覚えておきなさい……」

「はい……」

彼女は一日で膨大な情報量を記憶したため、そろそろ精神的にも肉体的にも限界を感じ始めるほどに疲労が溜まってきていた。

「では改めて歓迎しよう……おかえり……新たなサンタクロースよ……」

「たっ…… た…… だい…… ま……」

彼女はまだ理解する事は出来ないが、奇跡的に生まれた日と同時に彼女の帰れる場所、つまり故郷が出来た。この嬉しさはまだわからないだろうが……これから先数十年も経てばきっと彼女も理解する事になるであろう。

## 呼び名はクリス

翌朝。彼女はやや騒がしい音で起床した。前日は、長話を聞き終わり、与えられた家についた後かなり疲れが溜まっていたらしくすぐに寝てしまったらしい。

空き家ではあるが内装はしっかりと家具が揃えられ、時計や一日毎に勝手に日付が更新される不思議なカレンダーまで設置してある。まるで彼女がこの村に来るのを知っていたかのような用意周到さであると思わざるを得ない感想だったらしい。だが、彼女はそんな難しい事を考える間もなく、家の外の様子が気になり、すぐに身支度をして家の外へ出た。

「お！起きてきた起きてきた！」

「おー！君が新しいサンタかあ〜！」

「おっ…女だぞおい！女！！！」

（おはようございます……）

言葉を発するのはまだ慣れていないらしく、とりあえず目に留まった全員に魔法：トークによる心への直接的な挨拶を試みたようだ。

「うおー！！トークだぜこれ！」

「うそだろお……生まれたばかりじゃないのかよー！」

「おいおいおい……こりゃあ……すっごい逸材だな……」

自分が唯一使える魔法：トークで挨拶した事により周囲のサンタは驚きを隠せない表情をしている。

（使うべきじゃなかったんだらうか…）

驚かれる事に対してもそうだが、一度に複数の相手と会話をする事は、彼女にとってはもちろん初めての体験である為、非常に困惑し

た表情を浮かばせる。

「くらくらくら！！あまり彼女を困らせちゃだめだよ！」

すぐ近くから聴きなれた声が聞こえた。昨日彼女を拾ってくれた彼が、他のサンタを抑制しに現れたのだ。

「おっ…お…は…よ…う…」

ぎこちないが徐々に聞き取れるレベルにまで言葉の発声は進歩している。

「おはようー！よく眠れたかな？昨日、長から聞いたと思うけどさっそく掟通りに…」

（一度に、2つも話題を変えられると…）

「ごっ…ごめんごめん！今からさっそくこの集落の修練所に来てもらうけど…平気だよね？」

（修練所？）

「サンタとして最低限の魔法を覚える為の場所だよ…掟にもある

…」

「きの…う…村長さ…ん…も…たし…かに…

…言っ…た…」

「うん！その場所を案内するね！着いてきて！」

「はい…」

「はいはい！みんなも修練所にいこうね！」

今日も相変わらず、彼は生き生きとした表情で彼女には爽やかな笑顔を送る。そんな彼の性格や優しさは、今の彼女にとっては非常にありがたいものであり、唯一緊張しなくても良い相手だと断言できるのだ。

(ありがとう)

彼女は彼から教わった『ありがとう』という言葉がすごく気に入ったらしく、彼からなにか教わったりするたびに意識して多用するようになっていく。彼も彼女から『ありがとう』と言われるたびに更に優しく、尚且つ親切で丁寧に事を教えてくれるので、満更でもない様子なのは明らかだ。

修練所は意外とすぐ近くにあった。彼女に与えられた家から歩いてほんの4〜5分の場所にあった。なかなか大きな建物でぱっと見50〜60人は余裕で収容できるほどの規模である。先ほど彼がちらつと言った言葉『サンタとしての最低限の魔法』がすごく気になり始めていた彼女だが、これからいろいろ教えてもらえる事に対してワクワクしている。

「んじゃ…僕は中等教育だから…案内できるのはここまで!」

「ちゅ…う…とー…?」

「生まれたばかりのサンタはまずは初等教育から学ぶんだ!そこで初期魔法や、いろんな言葉を学べてすぐにトークを使わなくても良いくらいに、会話が上達するよ!」

(それは楽しみだ…私も早く、君と言葉でいろいろ会話したい…)

「そう言ってくれると嬉しいよ!大丈夫!君ならすぐに中等までこれるよ!」

「が…んば…る…!」

「初等修練所はこのドアからずっとまっすぐ言ったところだから!迷わないと思うよ!」

「あ…りが…とー…!」

「頑張って!」

彼との会話もそこそこに、彼女はさっそく初等修練所へと赴いた。

彼女の目の前には、『初等』と書かれた立て札がかかっているドアが立っている。躊躇なくドアを開いた。意外と初等に集まっているサンタが多い事にびっくりした。

ここに集まっているサンタはほとんど自分と同様に生後1週間も経っていないサンタばかりだ。なんとなく親近感を持った彼女はとりあえず空いている席へ着席した。

やはりまだ言葉による会話を楽しむというレベルまで発声法が上達していないサンタが多く、教室はどんよりとした静けさを醸し出している。しかし、彼女も魔法は使えるので高い魔力を秘めている者は何名かみつけることができた。彼らも同様に自分が魔法を使える事はすでに確認済みらしく、何回か視線がぶつかる事が多かった。

なにか違和感を覚えた彼女はもう一度あたりを見渡す。先ほど外で自分が『女』という性別だという事に対して驚いていたサンタがいた意味がここでなんとなく理解できた。初等にいるサンタは自分以外全員『男』だからだ。それほど、女のサンタというのは珍しいという事なのだろうかと彼女は眉を潜め、なにか考えを巡らせるが考えても自分にはわからない理があるのだろうと言つ結論に達しこれ以上難しい事を考えるのは止めようと、考える事はストップした。

目の前には大きな黒板、その近くに教壇がありまるで学校のような内装を髣髴させる。しかし、装飾は見事にクリスマスを匂わせるツリーやリースや電飾が施されている。なかなかお洒落な教室だなと彼女は僅かに微笑を見せた。

なんの前触れもなく、一同の目の前に教師らしきサンタが立っていた。教壇の近くには誰もいなかったはずなのだが、気付かれる間もなく一瞬にしてそこにずっといたかのように立っている。明らかにここにいるような若いサンタではなく、ベテランのサンタであると目視でわかる。

「は〜い！みなさんも気付いてるかと思いますが〜今日も新しいサンタが来ています〜」

透き通った聞き取りやすい声で、軽く一同に今日入ったばかりの彼女の紹介を手早く済ませた。

「よ……ろ……しく……おね……が……しま……す……」

振り絞るようになんとか言葉で挨拶をした彼女。やはりまだ発声は慣れていないので非常に聞き取りにくい言葉だったが、それでもなんとか言葉で挨拶を交わした事に一同は賞賛し惜しみない拍手が送られた。

「はい！では新しいサンタに先生からプレゼントです」  
(プレゼント?)

聴き慣れない言葉に彼女は思わずトークで先生に問い返した。

「プレゼントとは…サンタには必須な情報であり一番重要な事柄です。」

相手の気持ちを理解し、相手が今一番なにを欲しているのかを察し

相手を喜ばせる事が出来る贈り物です」

(よくわからないけど…すぐく大事なのね…)

「そのとおり！今貴女が一番ほしいものは…まだプレゼントできませんが…」

「この集落で生きていく以上！貴女には呼び名が必要です！先生がプレゼントしてあげます」

「よ……び……な……?」

「心配いりません、初等の授業内だけで使う呼び名ですから…」  
(呼び名とはなに?)

「固有名詞を表す言葉で…名前のようなものです…まあそれは追々説明します…では…」

言葉とトークで会話をしている二人を不思議そうに見つめる他のサ  
ンタ。なんでこの先生は一人でベラベラと喋っているのだろうと頭  
の中がハテナでいっぱいになっているのが大半のようである。

「はい！決まりました！貴女の呼び名は『クリス』です！

皆さん！彼女をこれから『クリス』と呼んでくださいね」

「く……………りす…」

不思議となぜか知っているような言葉…彼女は少し照れながらも特  
別な気分になり、やや顔を赤く染めていたのだった。

> i 3 7 7 3 9 — 4 7 3 1 <



呼び名はクリス（後書き）

## サンタが鈴を鳴らす理由

初等では、まず魔法よりも言葉による会話を先に教える。スムーズに会話が成立したら合格。その後、やっと魔法を教えるとの事。しかも、初等で教えてもらえる魔法はたった一つ。だが、サンタにとってはその神器とも呼ばれている魔法の一つであるらしい。

黒板に50音全ての文字が書かれ一文字ずつ発声していく、それに慣れば次は、先生が適当に指した文字を発声する。まるでアナウンサーかなにかの学校のように、教室全体に初等の一同の音が響き渡っていた。

中には早々とその授業をクリアし、会話の練習にまで発展しているサンタもいる。クリスはどうも『ラ行、ザ行』が苦手であるらしく、どうしてもまだコツが掴めていないようだ。だが、何度も何度も発声し、先生からの確かな発声法を教えてもらうに連れて、集落に着たばかりの時よりも遥かに言葉を操る術に慣れてきているようだ。2時間授業、30分休憩のサイクルで延々と会話術を学ぶ。授業の中で先生も古代の偉人の言葉や、ためになることわざなども教えてくれるので会話の質や、言葉の意味も自然と覚えてきているようだ。

「クリスー疲れてない？」

「うん…まだへーきだよ…ロキはどう？」

「僕もまだまだへーきだ！お互い頑張ろうな！」

「うん！そうだ…ね」

などと他のサンタとも少しづつ会話しながらクリスは確実に言葉を覚えていった。

「言葉にはコミュニケーションを円滑にする他…実は魔法の習得率にも影響があるのです。」

より高度で繊細な魔法を扱うには、詠唱と言つ言霊を放つ技術も必要になります」

「えい……しよ？」

「言だ…ま？」

先生が聞きなれない単語を使うと途端に一同はポカーンとしてしまふが、それもそのうちきつとわかるようになる自分自身に言い聞かせ、早く魔法の習得に移りたいというサンタが大半のようだ。

初等のサンタ数は約20名。やはりクリスが一番年齢的には低いが、20名中12番目に会話もなんとか合格した。

あとは練習よりも会話を繰り返し、慣れれば問題なく日常会話ができるレベルである。残りの8名もとりあえずは会話の練習には移っているようなので他12名はやっと魔法の授業に入る事が許可されたのだった。

やっとサンタらしい授業が受けれる喜びも感じていたが、クリスは早くこの授業が終わって自分を拾ってくれた彼とおしゃべりを楽しみたいという気持ちでいっぱいのだ。

やっと魔法の授業に移った。先生も話していたようにこれから習う魔法はサンタにとっては3種の神器と呼ばれる魔法でなくてはならない魔法らしい。一体どんな魔法なのか非常に興味深そうにクリスは目を輝かせている。

「では…会話のテストが終わった子達は注目！」

これからかなり重要な魔法を教えます」

いよいよ先生が動き、12名に妙な器具を手渡し始めた。クリスにもそれは渡され、少し揺らしたただけでなんとも耳に優しい金属音が

鳴る物であった。

「はい！魔法の説明をします。これから教えるのは『アラーム』と呼ばれる魔法です」

「今手渡した物の音を覚え、魔力を音に変化させる技術が必要ですが……」

「魔力を変化させるという技術は全ての魔法に応用できる基礎のようなものです」

「焦らずゆっくり身につけていきましょう！これから方法を教えます」

先生は鈴を手に持ち、精神を集中させ魔力を徐々に開放させていく。魔力が少ないものでも、先生の魔力のオーラはすぐに感じ取れたようだ。うつすらと魔力のオーラが見え始めた。

「この鈴の音のイメージが大事です。いきなり音に変化させるのは難しいので」

「まずはこの音の色をイメージします」

先生の魔力のオーラが徐々に色彩を持ち始める。同時に一同の耳に優しい鈴の音が聞こえ始めてきた。初めて聴く音ではあるがなぜか心が落ち着くような、いつまでも聴いていたい感覚に包まれる。クリスも思わず目を瞑りその音に耳を傾けている。かなりリラックスした表情で聴き入っているようだ。

「はい！では皆さんやってみましょう！」

鈴の音が止まり、いよいよ練習の時間となった。

まずは渡された鈴の音を覚える事。これが先決であり、一同は一齐に鈴を鳴らす。覚えやすいように耳元で鳴らすサンタもいれば目

を瞑り、ゆつくりと音を拾うサンタもいる。

「とか言われてもなあ…僕は魔力の使い方もわからないのに…」

「じゃあ私が教えてあげようか？サタン」

「本当かい？頼むよクリス」

重要なのは何度も何度も練習して、無意識に魔力を集中させる事。互いに教えあい、魔力を扱う技術を身につけ共に喜び、達成感を味わう事。

人々に喜びを運ぶという仕事をこなすサンタには必須とも言える感情である。どうすれば相手が喜ぶか、相手の喜びも自分も喜びとして自然に受け入れるのが非常に大事である。

サンタが鈴を鳴らす理由は人々の期待度を高め、食事の確立を上昇させるためだけではなく初めてアラームを教わった時の授業を思い出し初心に戻り、喜びを共感する為という意味も含まれているのかもしれない。

魔法：アラーム：鈴の様な音を鳴らし、人々の期待度を高め、食事の確立を飛躍的に上昇させる効果がある。

サンタクロースが最初に教わる魔法。

応用すれば全ての魔法を習得する事も可能。

サンタの魔法の基礎とも呼べる魔法である。

## 才能の片鱗

まだ魔力の使い方がわからない同級生に片っ端から魔力の使い方を教えていくクリス。彼から教わった方法は個人差はあるものの、万人共通してわかりやすく尚且つ、扱いやすい方法であつたらしくすぐに魔力を開放できる者が増え始めていた。積極的に教えようとするクリスを見ながら先生も顔を緩ませ、『うんうん』とご満悦の様子である。

同級生に教えるたびクリスの潜在的な魔力も飛躍的伸び始める。喜びを共感するという事は自分自身の進歩にも繋がる、クリス自身も嬉しそうな顔をしている。肝心な会話もまだぎこちなさは残ってはいるものの徐々に円滑で聞き取りやすいものになっている。

満遍なく、魔力の使い方を教えたところでクリスもやっと魔力変化の練習に移った。他の8名の同級生もなんとか会話のテストはクリアしたようで、その8名には先生が自ら魔力の使い方を教授している。

先生が教えてくれたようにまずは鈴の音を覚える。そしてその音のイメージを膨らませ色を連想させる。しかし、クリスは生まれたばかりでありそもそも色事態、それほど数多くは知らない。見たこともない色を連想するのは不可能なのだ。

「困ったなあ……」

愚痴もこぼせるほど、会話術は進歩しているが、アラームの習得はかなり難しいらしい。

耳にこびり付くほど鈴の音は聞いた。何度聴いても色なんてイメージできずただ魔力の質が上がって行くだけである。進展がない事にクリスは少々苛立ちを感じ始めているようだ。周りを見渡すと各

々が魔力のオーラに色を加え始めているのがわかる。

ある者は、先生のオーラのように緑、

ある者は、太陽の光に似ている色

ある者は、日が暮れ始めたときの色

ある者は、あらゆる光を飲み込めるような暗い色

だいが進展しているのがわかる。クリスはそのいろんな色を見ながら自分もどれに該当するのかイメージを膨らませる。彼から教わった通り精神を集中させ体の周りに魔力が漂っているようなイメージを沸かせる。

シャン……………

僅かになにかが聞こえた気がした。自分で鈴を鳴らしたわけではないがその鈴の音は確かにクリスの方から聞こえた。先生はいち早くその音に気が付いた。

「ま…まさか…」

表情からも窺えるようにかなり動揺している様子である。先生の表情の変化に同級生も気が付き練習を一度止める。

先生の視線の先にはクリスが映っている。一同もなにかあったのかとクリスの方を凝視する。色のついたオーラは出ていないが力強い魔力の鼓動を感じる。まるで脈動するかのようにクリスの周りの魔力が震えているのがわかる。例えるなら心臓のように、ドクンドクンと脈打っている。

……………シャン……………

また鈴の音が聞こえた。今度はすごくハッキリとその鈴の音は耳に残った。

……シャン……シャン……

クリスの魔力の脈動に合わせるように鈴の音は鳴り響く。心臓の鼓動と連動しているためかその音は心の奥まで響き渡りなんととも言えぬ安心感と快感を予感させている。

「クリス……できてるよな……？」

「すごい……」

なにかコツを掴んだのだろうか……教室にはクリスが放った魔法：アラームによる鈴の音が響き渡っていた。

あっけなく、魔法：アラームを習得してしまったクリスに先生も含めた一同は驚愕、同時に賞賛の声を浴びせた。まさか自分でもすぐに音を鳴らせるとは思わなかったクリスも自分自身にびっくりしている様子だ。

確認するように何度も何度もアラームを発動させてみる。力強く優しい鈴の音が鳴る。しかし、色をイメージしたわけではないのでクリスの魔力のオーラの色に変化は見られない。

「これは……驚きました！まさか鼓動と連動させるとは……」

クリスの魔法の才能は素晴らしいですね！」

「でも色が……色がわからなくて……」

「大丈夫です！鳴らせられるだけでアラームは充分！素晴らしい音色です！」

クリスと少し喋るようになった同級生、サタンとロキも称えるように言葉を投げかける。

「すごいよ……クリス！今日きたばっかでもう卒業じゃないか……」



「もつとクリスに魔力の基礎を教えてもらいたかったけど…」  
「え…もう私はここにはいちゃいけないの…？」

アラムを習得したことでもう自分は初等教育にいちゃいけないのかと不安に駆られているクリス。

「そんなことはありませんよ！納得いくまで初等にいていいですよ！」

「そう…じゃあまだいるよ…みんなにコツとか教えたい…」

「とりあえず、クリス！初等教育で教える事はもうないので…卒業とします」

「ありがとう」

「おめでとー！クリス」

褒められる、そして称えられる。なんとも言えぬ感情がクリスに沸き起こる。こういうときはどんな言葉で返せばいいのだろうか…なんだか照れくさそうにもじもじしている。

「さっそく僕にも教えてくれよ！」

「頼むよお〜クリス〜」

「うん…」

すかさず、ロキとサタンが教えを乞うように駆け寄る。クリスは満更でもないように自分がイメージしたものを伝え、コツのようなものを教えていく。

全員に教えるつもりなのだろうか…クリスはその2人以外にもアドバイスしていく。先生の目には、そのクリスの姿はまったく別のものに見えていた。

(まるでこの子は…聖女…ルチア様そのものだな…)



クリスは早く、自分を拾ってくれた彼と会話がしたくてたまらず中等教育の授業が終わるまで修練所の近くで彼を待つことに決めたのだ。

「クリス…なにをしてるんだい？」

「人を待つてるんだ…」

「人…？知り合いでもいるのかな？」

「うん…私をこの村に運んでくれた大事な人…」

「それは大事な人だね…」

「真っ直ぐ帰りなよ…もうじき日が暮れる…」

「そうだね…明日から中等だけど…一緒にがんばろうね！また明日！」

ロキとの軽い別れの挨拶も済ませ、クリスは彼がくるまで習得したばかりのアラームを発動させ鈴の音を聞きながら空から舞い降りてくる粉雪を眺めていた。

## 魔力の高いサンタの夢は予知能力の一種らしい

厚い雲で覆われてはいるが、徐々に辺りは暗くなり始めた。もうじき日が暮れ、あたり一帯を漆黒の闇で包まれようとしている時刻。修練所からポツポツと教育を終えたサンタが出てくる。仲のいいサンタ同士でおしゃべりを楽しみながら出てくるので、おそらくは中等教育以上のサンタであろうと思われる。

クリスは彼が出てくるのをずっと待っていた。それまでに何度もアラームの練習をしていた為、既にアラームはトーク並みに自在に扱えるレベルまでに達していた。魔法は使えば使うほど精度と質が上昇するがクリスの魔法の資質は異常とも呼べるほどそれ以上に進歩している。しかし、やはりまだオーラに色を加える事ができずその事で若干、嬉しさが半減しているようである。

「あ……」

クリスの目の前に、彼が現れた。

「あ！こんなところでなにしてるんだい？」

彼はクリスがずっと待っていた事など知らず、愛想良く声をかけた。  
きた。

「君がくるのを待ってた」

「え…僕を？なんで…」

「初等教育…卒業しちゃって…」

「ええ！もう卒業しちゃ……あれ？言葉が……」

「やっぱりまだ…聞き取り辛いかな…？」

「そんな事ないよ！完璧じゃないか！」

「そう…かな…」

「うんうん！これでトークなしでもおしゃべりできるね！」

「少し疲れるけどね…」

「少しづつ慣れていけばいいんだよ！というか良く聴くと…君の  
声は美しいな…」

「美しい…？」

「僕ちよつと声フェチな部分があつてね…うんうん！ストライク  
だよ！」

（どういう意味？）

「え？なんでトーク…」

（なんか喋りづらくて…）

「ああ…ごめんごめん！気にしないでね…とりあえずここじゃあ  
れだから…」

彼の言うまま、2人は場所を移動し始めた。クリスは彼と普通にお  
しゃべり出来ている喜びに浸っている。彼もクリスと言葉で会話  
成立した事に満足そうな笑みを浮かべ出会った時以上に喜びを感じ  
ているようだ。

「君は…なんて呼び名なの…？」

「ああ…まだ言つてなかつたね！僕はクラウドだよ」

「クラウド…か…クラウド…」

クリスは何度も呟き、忘れないように記憶しているようだ。

「君はなんて呼び名をもらったの？」

「クリス…」

「クリスか…良い呼び名だね…うん！似合ってるよ」

「クラウドも似合ってる…」

「そうかな？よく顔と名前が合っていないって言われるけどね！」

「顔…確かに…クラウドスじゃないかも…」

「えええ！そこ認めちゃうのか…」

「ふふ…冗談だよ…クラウドス…」

「なんだ冗談か…一瞬ほんとに凹むところだったよ…あはは…」

移動しながら冗談も交え、仲良くおしゃべりを楽しんでいるようだ。クラウドスはアラムに関して、クラウドスに聴きたい事があったようだがそんな事も忘れて会話に夢中になっている。クラウドスはそんなクリスの心情はわかるはずもなく純粹に会話を楽しんでいる。

「明日から中等教育だって…」

「自信ないとか？」

「自信なんてあるわけない…でも…楽しみ」

「大丈夫！クリスならすぐ卒業できるさ！」

「クラウドスと一緒に…？」

「タイミングがちょっと悪かったかも…僕は今日中等は卒業しちゃって…」

「そう…」

「でもさ！上等教育は…すごくハードルが上がるから！そこで一緒にやるよきつと！」

「うん…でもクラウドスは…私よりも上にいて欲しかったから…」

「それはそれでプレッシャーだなあ…」

そうこうしているうちに、2人はクリスの家の前まで来ていた。

「明日もまた同じ時間から授業あるから…今日はゆっくり休んで！」

「そうする…クラウドスもゆっくり休んでね」

「あはは…言われなくても家に帰ったら、死ぬように寝ちゃおうよ」

「クラウドス…死なないで…」

「冗談だつて！そんな顔しないで…ね？んじゃ！おやすみークラウドス」

「うん…おやすみ…クラウドス」

クラウドスは踵を返し、元着た道を戻り始めた。クリスはクラウドスが見えなくなるまで彼の後ろ姿を見つめていた。

「クラウドスか…ふふ…やっぱり…似合っていないかも…」

軽い笑みをこぼしながらクリスは早々に寢床についた。

目が覚めたクリスは目の前の光景に驚愕していた。昨日は絶対に自分の家で寝たはずなのだが、今いる場所は見たことない場所だったからだ。大勢のサンタが集まり、クリスの知らない魔法を発動させている。見たことない顔ばかりだ。集落のサンタの顔も碌に覚えていないがそれとは関係なく知らないサンタばかり…

彼らの視線の先には自分らとは打って変わり、全身黒い衣装を纏った集団。向こうも魔力のオーラが肉眼で見えるほどに魔力を開放させ、なにかの魔法を発動させている。

一体、なにが起きているのか…クリスは必死に考えているが…どうしてこのような場所にいるのかもまったく見当が付かず、困惑している。

先頭のサンタが雄たけびのような声を上げると同時に周辺のサンタが一気に、黒い衣装の集団に向かって走り出した。なにか只ならぬ事態になっていることだけはすぐに理解できた。

向こうも嵐のような雄たけびを上げながらこちらに向かって走り

出てきた。表情は見えないが：悪意や殺意のようなものは感じられる。魔力の質も明らかに人を喜ばせるようなものではなく、ただ『殺してやる』と言いたげに、邪悪な質感を持っている。

「殺される……」

クリスは恐怖を感じ、視線は黒い集団を見ながら思わず後退りしてしまう。視界の端に見慣れた顔が現れた。

「クラウド…！」

それは昨日やっとおしゃべりを楽しむ事が出来た彼、クラウドその人だ。

目の前のクラウドは今までクリスに見せた事もない表情で、走り出している。

「待つて…クラウド…クラウド…！」

クリスは必死になってクラウドの元へ向かおうとするが他のサンタが邪魔で思うように前には進めない。

「だめ……死んじゃう…殺されちゃう…！」

明らかに黒い集団の魔力はまだ魔力が弱いクリスにもその強さの質は理解できる。クラウドの今の魔力では、全く勝ち目がない事もすぐに理解できた。

黒い集団の先陣がこちらのサンタに向かってなにかを発動させた。黒い霧のようで…嫌な質感をもった煙。瞬時にこれはやばい！と悟ったクリスは息を止める。案の定、その黒い霧を吸ってしまった他のサンタはバタバタとその場に倒れていく。おそらく、致死性の猛



毒であるとすぐに判断できた。

黒い霧でほぼ視界を奪われた為走っていくクラウドの影も見失ってしまった。

（無事なんだろうか…この霧を吸ってしまったてないだろうか…）  
やはり頭に過ぎるのはクラウドの安否ばかり…しかし、自分にはこの霧をなんとかする力も前に進む勇氣もなくただその場で棒立ちになるしかできない…

「うおおおおおおおお！」

昨日寝る直前まで聞いていた、クラウドの声が聞こえた。

その刹那！場面が一転し、黒い霧が晴れた。

クラウドの目の前には顔見知った2人。しかし、その2人が着ている服は赤ではなく全身真っ黒で邪悪な衣装。表情も、昨日見せた柔らかな表情でなく明らかに殺意を剥き出しにした凶悪な表情だ。

「ロキ……？サタン……？」

思わずその名前を呟く。

「久しぶりだな…クリスマス…」

その言葉には昨日までの温もりはなく思わず耳を塞ぎたくなるような、嫌らしい感じの粘り気が混ざっているような声。

「クリスマス…なんでお前はまだ赤い衣装なんて着てるんだ…」

「早く俺らの仲間になれよ…」

意味がわからない言葉を投げつける2人。

「クリス！逃げる！！」

真後ろからクラウドスの叫び声が聞こえた。

「クラ……」

その名前を最後まで言う間もなくクリスの目の前にクラウドスが現れた。

一体なんでこんな状況になっているのか把握できず、とりあえずあの黒い霧は吸っていなかったのだとそこだけは理解できたが…

「ロキ…サタン…貴様ら…絶対にゆるさねえ！」

クラウドスは怒りを露にさせ、殺意を持った魔力を開放させている。

「これはこれは…クラウドスの旦那じゃないですか…」

「敵陣のエースがこんな場所にいるとは…くくく…」

しっとりした嫌らしい笑みを浮かべながらも2人の表情には余裕すら感じられる。

「だが…負の心を食った俺らの敵じゃない…」

「サタンの出る幕はないな…俺一人で充分だ…」

ゆっくりとロキが前に出る。同時にクラウドスは構える。

「クリス…僕が合図したら迷わず逃げるんだ…」

どこか懐かしさすら感じる優しい声でクラウドスは注意を促す。

「なんで…こんな…」

目の前の状況に混乱しているクリスはクラウドの言葉も碌に理解できていないようだ。

「いけ！逃げるクリス！」

後ろを振り返る事なく、クラウドはロキに向かって走り出す。昨日最後に見た後ろ姿とだぶる。しかし、ロキは既にクラウドの視界から消えている。

「雑魚が…」

ロキはクラウドの真後ろに平然と立っていた。そして、左手に持っている良く切れそうな剣を振り上げる。

「やつ…やめ…」

鮮血が迸る。積雪に夥しい量の血の雨が着色されていく。自分もつとも安心できる色だと感じていた赤。しかし、今のクリスの目には恐怖、憎悪、混乱、あらゆる負の感情が合成された色にしか見えない。

「いや…いやあ…！」

その場に崩れ落ちるようにクリスは尻餅をついた。

「弱い者の宿命だ…悲しむ事はない…クリス」

サタンが意味のわからない言葉を投げかけてくる。

「弱者は命を落とし、強者が生き残る…これが道理…お前はどっちだ？クリス…」

はっ…っと目が覚めた。目の前には木造の屋根が見える。見慣れてはいないがここは村長に与えられた自分の家である事はわかった。カレンダーは自動で更新され、日付は11月21日と表示されている。

「夢…か…」

クリスはホッと胸を撫で下ろし、朝食代わりにお茶を入れた。

一体今の夢はなんだったのか…ただの夢であって欲しいと祈るしもなくクリスは身支度を整え、自宅を後にした。

修練所へ向かう最中、クリスはクラウドと合流した。クラウドはクリスが見た悪夢など知るわけもなく、なんら変わらない笑顔を見せてくる。クリスはやはり先ほど見た夢が心に引っかかりうまく笑顔を作れないでいる。

「どうしたんだい？今日は元気なさそうだけど…」

「ん…そんな事ないよ…元気」

所詮ただの夢だと自分自身に言い聞かせ、何事もなかったかのようにいつもどおりに接しようとするがなかなか気持ち切り替える事ができなかった。

「なにか…よくない事でもあった？」

「大丈夫だよ？」

クラウドはクリスを心配し、気遣っているように今日の会話は少ない。

「ちよつと変な夢見ちゃって…でも夢だから…」

「夢…」

クラウドは途端に深刻そうな顔になる。クリスはその表情の変化は見逃さなかった。

「クラウド…？」

「外れるといいね…」

「外れる…？」

「魔力が高いサンタの夢ってさ…予知能力の一種なんだ…」

「予知…？」

「これから起こるかもしれない事を夢で見れる能力だよ…」

「え…」

「大丈夫だよ！クリスはまだ魔力が弱いから！きつと外れるって！」

「それって励ましてる？」

「あ…うん！そうだよ！クリスはこれから魔力を育てるんだからさ！」

「なんか…複雑…でもありがとう」

まだ魔力が弱いと言われるのは少々癪に障ったらしいが、クリスは元氣を取り戻したようだ。

「おはよー！クリス」

「おはようー」

後方から元気なロキとサタンの声が聞こえた。

「あ…おはよ〜」

「お！クリス！友達が出来たんだね！おはよ〜」

「あー！クリスが昨日言ってた大事な人さんおはよー！」

「ロキ…それは名前ではないと思うぞ…」

軽く自己紹介を済ませ、そのまま4人で修練所まで向かうことになった。クリスはまだ夢が引つかかっていたが、4人で楽しく会話をしながら歩いていくうちにこんな明るい2人が黒く染まり、しかもクラウドを殺すなどありえない！と確信にも似た考えに変わりやっといつもどおりの明るさを取り戻したようだ。

「中等修練所は2階だから…僕はここで！」

「あ…クラウドさんはこの上なのか…」

「さすが…クリスの大事な人はランクが違うなあ…」

「もお〜！結構恥ずかしいから大事な人とか…連呼しないでよロキ！」

クリスはロキの腕を引っ張り、引きずるように中等と書かれたドアを開いた。サタンも苦笑いをしながら2人の後に続いた。

「大事な人…か…」

クラウドはニヤニヤとしながら3階へ向かっていった。

## 黒い歴史

中等教育の修練所に付いた3人は空いてる席に着席した。中の作りは初等修練所とそう変わらず、黒板や教壇、電飾などの配置もほぼ一緒だった。昨日一緒に卒業したシモンとヤコブは既に着席し、先生を待っているようだ。他にも目視で約30名ほどのサンタが各々の席に座っている。しかし、初等とは違い各自仲の良いサンタ同士で雑談をされていて賑やかな雰囲気である。やはり、中等でも女はクリスマス一人だけのようである。

前触れもなく定刻になると教壇のあたりに先生が立っていた。

「はーい！雑談をやめてー！これから授業をしますよ」

初老どころかもう老年に達しようとしている外見のいかにもサンタと呼べる先生が一同を制した。

「今日は初等から5人の新しいサンタがきましたので、皆さん仲良くしてあげて下さい」

最初はまず自己紹介から始まるのが修練所の流儀らしくクリスマス達は手早く挨拶を済ませた。

「ではさっそく始めます。今日もまずは歴史の授業から…」

各々の机の上にはいつのまにか教科書が置いてあった。しかし、教科書にしては非常に薄く、まるで絵本を思わせるような絵である。この教材にそって歴史の授業をするようである。

「いいですか…この授業の後にどこまで理解できたのかテストを

しますので…

それに合格した人は魔法の授業に移ります。  
できなかつた人は教科書を暗記するまで読んで下さい」

サンタの歴史を知る事、それもサンタにとっては非常に大事な事であり先人のサンタの功績を知る事で自身のサンタのあり方も考える事が出来るようだ。

まずは自分が何者なのか知るといふ点では歴史の授業は非常に効率の良い手段と言えよう。

### —————サンタのお話

昔々、まだサンタがいなかった時代。北の大地に4名の男女がいました。彼らは非常に寒さに強く、水と空気だけで何百年も生きていける変わった種族に属していました。

1人は他の3人を非常に大事に扱い、4人の中ではリーダー的存在でなにか行動をする際には絶対に、彼の判断が必要不可欠でした。1人は4人の中では唯一性別が異なり、女でした。彼女はとても優しく、暴力の類には真っ向から否定するほどに非暴力主義な人物です。

1人は4人の中でも非常に身体能力に優れ、一番足が速く力持ちでした。彼の考え方はどうすればもっと強くなれるのかと強さを重視する性格です。

1人は力こそないものの、4人の中では断トツに魔力に優れ様々な奇跡を呼ぶ不思議な魔法を扱えます。

そんな4人でそれはそれは幸せに暮らしていました。決して争う事はせず、喧嘩もなく、毎日遊んでいたそうです。

そんな彼らの前にある日、1人の神様が現れこう言いました。



「君達はあらゆる種族の中でも非常に完成度の高い種族だ。

そんな君達に1つお願い事があるのだが、きいてくれないだろうか？」

もちろん返事はOKでした。

毎日遊んで暮らしていたとはいえ、なにか目的が出来ると言う事は彼らにとっては最大の喜びだったからです。神様のお願い事は…  
『他の種族に幸せに運んでもらいたい、4人で知恵を出し合って見てはくれないか』

これは難題です。4人はさっそく知恵を振り絞り、様々な意見を出し合いました。

1人はその種族が望む事を我らが率先して手助けしてあげたらどうか？

1人はきつと我らが望む事こそ全ての種族が望む事であるのではないか？

1人は望む事を叶えるのではなく、その種族を喜ばせてあげる事こそ幸せなのではないか？

1人はその種族に害を与える種族を滅ぼす事こそ、平和に繋がりに幸せなのではないか？

4人の意見はバラバラでまるで噛み合いませんでした。

それから何十年も同じ話題でよく考えた結果4人の中のリーダー的存在の1人が結論を出しました。

「では各々の考えをそれぞれ、まずは実践してみてもどうか？」  
その意見に全員が賛成、さっそく4人は行動に移りました：

結果。

2人は聖と呼ばれ

2人は魔と呼ばれるようになりました。

各々の意見の違いから仲が良かった4人で喧嘩が起こる事もしばし

ば…

そして… 2人は北の大地に残り  
2人は南の大地に移りました。

北の大地に残った2人は結果的に神様が言った願い事を完遂できませんでした。

南の大地に移った2人は結果的に人々に幸せを運ぶどころか逆の行いをしてしまい神様に封印されてしまいました。

しかし、北の大地に残った2人はそんな2人をどうにか許して欲しいと神様に頼みました。神様は2人に条件を与えます。

『では… 今まで通り人々に幸せを運ぶ仕事を続けなさい』

1年に一度で結構だが、もしできなかった場合は封印する』  
かなり厳しい条件ですが2人はそれで、封印されてしまった2人を許してもらえるのならばと条件を飲みました。

それがサンタの始まりとされています。

北に残った2人の名前は

4人の中のリーダー： ニコラウス

4人の中で唯一の女： ルチア

南に移った2人の名前は

4人の中で一番力が強い男： クランプス

4人の中で魔力が一番強い男： シャープ

――――  
ンタのお話・完

――――  
サ

各々が先生の話を聴きながら、絵本を読みサンタの歴史を学んでいた。おそらく、歴史として学んでいるということは史実に基づいた事実であると各々が理解を深めていった。頃合を計り、さっそく

先生はテストを始めた…

先生が問う。生徒はそれに答えると言った簡単なテストだった。しつかりと先生の話と絵本を読んでいれば答えられる問いばかりだった。

『君ならどの意見に賛同しますか？』

『もし、クランプスとシャープが復活した場合どうなると思いますか？』

などと、よく考えなければならぬ問いもあった。

文章を読み、理解し、考えるという会話術よりもより高度な言語力が試されるのでなかなかクリアできるサンタがいない。

クリスも必死に絵本を読み、内容と自分なりの考えを深めるがなかなか先生の問いに答える事ができずに悪戦苦闘していた。

数名、おそらくは中等に長くいる生徒が歴史の授業をクリア。各々、先生に許可されて魔法の特訓に励んでいる。さすがは先輩といったところである。

何度も何度もテストに挑むがその都度、問いの内容も変わり前回の問いの答えを考えてもまるで無駄になる。すごく高度な授業だとクリスは痛感していた。

ロキ・サタン・ヤコブ・シモンもこのテストにはやはり悪戦苦闘しておりなかなか合格がもらえない。どうすれば合格がもらえるのだろうか…ではなくもつとこの絵本についてよく考えなければと思いを巡らせるクリス。サタンとロキの意見も聞いてみた。

「サタンは…どの意見に賛同する？私は…3番目だけ…」

「そうだね…僕は…一番下だね…平和を望む心は賛同できる…」

「やっぱみんな違うんだね…僕は断然2番目だね！一番優れている種族なんだからさ…」

それぞれの見解で理解している為、1人で考えるよりもなにかが掴

めそうな予感がしていた。

もう何度目のテストなのか数えるのも止めてしまったがクリス・サタン・ロキの3人はなんとか歴史のテストに合格をもらった。これで全員が合格となり魔法の授業に移る事になった。

## 模倣して想像して創造する

「みなさん！話を止めてください！これから魔法の授業を開始します」

いよいよ、中等教育での魔法の授業。一体どんな魔法を教えてもらえるのかクリスは胸を高鳴らせている。

「適材適所という言葉があります。この言葉は人に対して使うものですが…本来は…」

例えば、豊富な森林があればその木々を利用し、建築するといったその場にあつた材料を

有効に利用すると言つた意味が込められています

我々、サンタの世界でもそれは同様ですが、そこで魔法を応用するのがサンタです。

物を1から作って…限りある時間を浪費してしまい、チャンス逃してしまう

…では、どうするか…簡単な事です！具現化すればいい

そこで皆さんには魔力を具現化する魔法『エンボディ』を伝授します」

魔法：エンボディ その場に合わせる必要なものを具現化し、利用する事ができる魔法

数多くのサンタは移動する為に

動力が付いたソリや、浮遊能力が付いたソリを

具現化する時に

この魔法を使う場合が多い。

更に、リスニングとエンボディを応用し  
相手の望むプレゼントを具現化させ、  
人々に喜びを与える場合にも使用する。

「すごく…便利な魔法…」

「もし…習得したら…移動が楽になるな…」

「これはなにがなんでも習得しなきゃな！」

仲良し3人組は食い入るように先生の魔法の説明を聴いている。発動方法や、アラームの応用の仕方、コツなどの講義も始まった。

音とは違い、質量を持ったものを形にして存在させるためアラームやトークよりも膨大な魔力が必要になる。説明を聴いた限りではとても一日で習得できるレベルの魔法ではない事は理解できた。

「まずは基礎の魔力を高める事が先決です。」

皆さんは既にアラームを習得していると思いますので、その魔法を使って

魔力の絶対値を上げていきましょう」

教室中にアラームによる鈴の音が響き始めた。

リンリンリン……………

シャンシャンシャン……………

ドンヒャララ〜…………… (笑)

人によって鈴の音は異なり、まるでオーケストラのように聴いているだけで心地の良い旋律を醸し出している。

クリスは既にアラームは必要最低限の魔力で発動できるまでに至

っている為このままでは魔力は上がらない。全員がアラームを発動している中どうすればいいのかわからないでいた。

（素晴らしい才能ですね…クリスさん…1つアドバイスをしておきます）

先生がトークで話しかけてきた。

（必要以上の魔力でアラームを発動させてみなさい。それで魔力が上昇していきますよ）

（ありがとう…コントロールが難しそうだけど…やってみるよ）

助け舟のようなアドバイスをもらい、やっとクリスもアラームを発動させ魔力の上昇訓練を開始させた。

しばらく魔力を高める訓練を続けている。各々の魔力の最大値を先生が判断し、魔法：エンボディを使用可能か判断しているようだ。

サンタの魔力上昇指数は高く、たった数分で今までの倍以上まで伸びる者もいれば桁単位で著しく伸びる者もいる。サンタは自然に発生する種族なので血筋というものは存在しないが、魔力の根本的な部分『魔筋』というものは存在する。

サンタの原点となっている4人の先祖。サンタは発生する場合、必ずとも言っていないほどこの4人のうちの誰かの魔力を元にして生成されるらしいのだ。それも証明はされていないが長くその考え方で定着しているのだ。

魔法が得意、または魔法の資質が高いサンタはルチアかシャープの魔筋。

魔法は得意ではないが肉体的な強さや、独創性に富んだ発想や、

カリスマ性が高いサントはニコラウスかクランプスの魔筋であると判断されている。しかし、魔法が苦手といってもそれは同族と比べの話であり魔法が使える他の種族（人間やエルフ）と比べればサントの持つ魔力は比較にならないほど高いと呼べる。

中等に編入したクリス・サタン・ロキは確実に魔法が得意な魔筋に当たると思われ他の生徒と比べても群を抜いて魔力の上昇度が高いようだ。その伸び方を見て、先生も「未恐ろしい…」とやや恐怖を感じるほどであった。

十分なほど魔力を高めた生徒には先生からトークで知らせがあり、本格的なエンボディの習得の練習に入る。既に先輩の何名かはその練習に入っているようだ。

先にサタンにトークが届き、そのまま別の練習になった。続いてクリスとヤコブ、少し時間をおいてロキが、その次にシモンが続いた。予めトークでエンボディの練習法は聞かされていたが生徒が大半、魔力を伸ばしエンボディの使用可能なレベルに達したと先生は判断したらしく口頭でもう一度、エンボディの練習法の説明を始めた。

「みなさんの魔力はもうエンボディを使用できるほどまでに上昇したと思いますので

もう一度、練習法の説明をします」

先生の言葉に全員が耳を傾ける。

「まずは模倣、今まで見たことがあるものを思い出し、ゆっくりと魔力を開放します。

そして想像、そのイメージを頭の中で定着します。その時にイメージした物はどんなものなのか…その物の使用方法を決めます。



そこからは一気に魔力を開放していきます。

最後に創造、ここでアラームの感覚を思い出し、オーラを変化させます。

ここは教室ですので、小さな物がいいでしょう。

このクリスマスリースを具現化してみてください」

実際に見たことがあるものしか具現化できない仕様らしいがそれはあくまでエンボディを単発で使う場合である。これに魔法：リスニングを加えれば、まだ見たことがない物でも既にリスニングを使った相手はイメージが出来ているため実際に見たことがない物でも具現化できるのだ。

クリスは、クリスマスリースを凝視し、そして形を完璧に記憶し魔力をゆっくりと開放していく。しかし、ここで問題になるのはあのクリスマスリースは一体、なにをする為の物なのかという疑問である。その想像が固定できなければ創造には至らず、エンボディは失敗となる。

（あれは一体なんの目的で飾られているんだろう…）

ここで余計な考えが混ざってしまい、魔力のオーラが途切れてしまった。他の生徒達もそこで行き詰まっているらしくエンボディを発動させた生徒はまだいない。

（もしかして…私を拾ったときにクラウドが乗ってた乗り物はこの魔法を使って具現化したものだったのかな…）

少なくともクラウドはエンボディを使える。使いこなしているレベルなのかどうかは疑問だがこんなに難しい授業をクリアした。そう思うだけで少し誇らしく思えた。

考えが脱線しまくりでクリスは中々リースの使用法が頭に浮かばない。ちらつとサタンとロキを見た。なんと2人は既に想像の問題をクリアし、魔力を一気に開放しようとしていた。

「うそっ…」

決して自分より劣っているとは思っていないのだが2人もここで苦戦しているものだと思っていた為、クリスは驚いた表情を見せた。

「もう少し…もう少しでなにかが出てきそうなんだけど…」

ため息を漏らしながら魔力のオーラを解いたサタン。

「想像が弱いのかなあ…もうちょっと練習して見よう…」

なにかコツのようなものを掴んだらしいロキ。

自分よりも一歩先を進んでいる2人を見てクリスは「今はエンボデイの習得に専念しよう!」と今の課題に全力で取り組む意気込みを見せた。

(きつとあれは…帽子だ!頭に被る物だ!お洒落を楽しむ物なんだ!)

クリスはリースの用途を想像し、再び魔力を開放し始めた。

(あれは帽子…頭に被ってお洒落を楽しむ物…)

クリスの魔力が更に加速し上昇していく。彼女を魔力のオーラが包み込んだ。

次の段階は創造。アラームの発動の要領で、オーラを物体に変化させる。

(帽子…出てきて…今すぐく必要だから…)

想像を固定し、出したい場所に手を翳す。強い念を込め、開放した魔力を一点に放出する。

「でっ…できた…」

クリスの机の上にはエンボデイにより具現化されたサンタ特有の三

角帽子が出現していた。

「あ…あれ…？」

クリスは強い光に包まれていた為、教室の全員がクリスに注目していた。もちろん今クリスがエンボディにより出現させた三角帽子も確認していた。

「クリス…すげえ…」

「さすがだね…まさに脱帽だよ…」

先生が提示した物ではないがしっかりとエンボディを習得した証だった。

「クリスさん…素晴らしい…エンボディ習得おめでとう！」

一斉に拍手が送られた。

## 予兆

「いや…それは帽子だろう？先生が言ったのはリースじゃないか！」

1人の生徒が立ち上がり、イチャモンをつけてきた。

「うん…イメージを間違えちゃったみたいで…」

クリスマス課題とは違う物を出してしまった為、納得のいかない様子である。

「でも…習得だろう？これは…お前！帽子出せるのかよ！」

ロキがイチャモンをつけてきた生徒に詰め寄る。

「ロキ…やめなよ！リース出すまでは習得だなんて思っていないから…ね？」

クリスマスがすぐにロキを止め、イチャモンを付けた生徒に本心を話した。

「たまたま帽子が出たからって…いい気になるんじゃないぞ…」

ボソツと嫌な言葉を吐き、イチャモンを付けた生徒は元の席へ戻った。

「クリスマス…気にすることないよ…きつとクリスマスの魔力に嫉妬してるだけだ…」

サタンが優しくフロローに入るが、最後の一言にクリスはすっかり落ち込んでしまったようだ。

「あの野郎…」

ロキは怒りを露にさせ、一点を睨み付けている。

その表情はクリスが夢で見たロキの表情とだぶった。すっかり忘れていた夢だったが今のロキの表情ですぐにフラッシュバックしてしまったのだ。

「ロキ…怒らないで…私が失敗したのが悪いんだから…さ…」

「でもよお…」

「全然気にしてないから！練習を続けよう！次は頑張つてリリースすから…」

「う…うん…」

サタンもゆつくりと頷き、3人は練習を再開した。しかし、ロキの表情は変わる事はなくイチャモンをつけてきた生徒を睨み付けていたのだった…

案の定、クリスは一度エンボディを発動してしまった為もう一度エンボディを使えるだけの魔力は残ってはいなかった。何度もイメージし、魔力を放出しようとするがうまくいかない。むしろ、想像した後に開放する魔力のオーラにも力強さがなく彼女の表情からわかるように疲労している事がわかる。

それでも彼女は、リリースを出さなければロキの表情が元に戻る事はないのでないか…この嫌な雰囲気解消できないのではないかと自分が悪いのだと思い込み、必死にエンボディを試みている。

サタンもロキの表情の変化には気付いていたがこれ以上なにも言う事もなく、彼もエンボデイの練習に勤しんでいるようだ。少し遠くで揉め事の一部始終を見ていたヤコブもサタン同様に、すぐに気持ちを切り替えて練習を再開している。

やはりロキの表情は怒りのまま元に戻る事はなく、エンボデイの練習はしているようだ。だが彼の魔力のオーラは安定するどころが酷く歪みまるで渦のように彼の周りでトグロを巻くようにうねっている。

極端に魔力を消費してしまったクリスを見かねて先生は彼女にトークで話しかけてきた。

（本当はみんながエンボデイを習得してから教える予定でしたが…クリスさんはもう習得済みですので教えますね…）

一体なにを教えようと言うのだろうか。クリスは沈んだ表情のまま先生のトークに聴き入る。

（すごく簡単な魔法です。コレクトという魔法で、エンボデイで作りに出した物体を再び

自分の魔力として回収する魔法です）

魔法：コレクト エンボデイ等で物質化した魔力を再び己の魔力として回収する魔法

回収された物質は消滅する。

応用すれば他人がエンボデイで作りに出した物質も自分の魔力として変換し、吸収する事ができる。

(この魔法はそれほど魔力は使いません。)

トークやアラームができるほどの魔力が残っていれば

誰でも簡単に使える事ができるので、安心してください。では方法を教えます…)

先生の言われた通りに、クリスはエンボディで作り出した帽子に手の平を翳し、この帽子は体の一部であるとイメージし始める。ゆっくりと自分の魔力のオーラを、作り出した帽子に移動させる。

帽子を覆うようにオーラで包み込み、今度はこの帽子は自分の魔力の一部であるというイメージを固める。言われた通りに順序よく丁寧に事を進めた。瞬間的に帽子は消失し、再びクリスの魔力がエンボディを使う前の状態まで回復したのだ。

(すごい！こんなに簡単だなんて思わなかったよ！先生ありがとう！)

(どういたしまして…)

(これでまたエンボディの練習ができる)

クリスは沈んでいた表情に若干明るさが戻っていた。今度は間違えないように、リースのイメージを考える事から始めた。

まだロキは怒りの表情が変わらない。だが、ロキの魔力のオーラが強い光を放ったと同時にロキの机の前には具現化されたリースが出現していたのだった。

「え…！ロキ！エンボディできてるよ！」

「ロキーおめでとおー！」

「おお！ロキ君も習得おめでとー！」

周りから一斉に賞賛の声と拍手が沸き起こる。ロキの表情は少し、

はにかんだように照れているのようだが

「先生…ごめん…ちょっと気分が優れないから…今日はここまでにしていいかな？」

「ええ…いいですよ…その前に…」

先生はおそらくロキにもトークでコレクトの魔法を教えているようだ。瞬時にロキが作り出したリースが消えた事から一瞬にしてロキもコレクトを習得した事がわかった。

「では…お大事に…」

「クリス…サタン…ごめんね…先に帰る…」

「うん…無理しないで…ゆっくり休んでね…」

「ロキ…休みながら…少しは頭冷やせよ…」

ロキはそのまま教室を出て行った。

結局その日の授業では、リースを完璧に具現化できたのはたったの4名。ロキ、シモン、サマエル（元々中等教育にいた生徒）、アソデレ（サマエルと同様）の4人だけだった。クリスはやはりリースのイメージが膨らまず、具現化はできなかったようだ。サタンはロキの事が気かりでそれどころではなかったようだ。

しかし、クリスはリース以外の帽子やコップや、まるで模型のようなサイズのソリなどは何度が具現化させていた。自分が知っている物ならば、エンボディで作り出せる領域まで成長しているようだ。日も暮れ始めてきたので中等教育の今日の授業は終わった。クリスはサタンと話をしながら修練所を後にした。やはり、門の前でクリスは、今日の授業の内容や一応エンボディは使えるようになった事をクラウドに報告する為、彼が出てくるのを待つようだ。サタンは「全く…恋する乙女のようなよ…」と茶化しながら帰路へ向かっ



ていった。

昨日と同じ場所でクリスは座りながらクラウドを待つ。ここから見えるのは集落の外の景色。辺り一面の雪原だが樹氷が点在し、見ようによっては感慨深い景色である。昨日と違う点をあげるとすればその樹氷の1つが、風かなにかの影響で折れているところだ。

クリスは気にする事なく、暇を持て余しながら今日覚えたばかりのエンボディでなにか手ごろの物品を出し、それをコレクトで回収という繰り返しで忘れないように復習に夢中になっているようだ…

## 黒いサンタ

修練所の門から、授業を終えた生徒が次々に出てくる。魔力の質から、その生徒達は明らかに上高等教育以上の生徒であるとわかる。初等や中等教育までの魔力とは違いいくらか才能があるクリスの魔力でも到底、足元にも及ばないほど膨大な魔力である事が感じられた。何人かのサンタがクラウドを待っているクリスを気遣い

「ここは寒いから…中で待つてたほうがいいんじゃないか？」

「女の子は腰を冷やすといかんらしいぞ…」

などと心配してくれたがそれでもクリスは

「大丈夫…心配してくれてありがとう」

にこやかな笑顔を見せ、その場を離れようとはしなかった。なぜ、彼女がその場に拘るのか、理解し難く声をかけてくれたサンタ達はそれ以上なにも言う事はなく帰路へ向かっていった。

もうじき日が暮れるというのに外は明るい。今日は珍しく雪が降っておらず雲も晴れている。空には大きな光の塊が徐々に山の方へ降りていくのがわかった。

（あの光はなんだろう）

クリスは大きな光の塊を凝視している。

白に近いその光は徐々に赤に近い光へと変わっていく。その光を浴びた雪もその色に染まっていく。初等の授業で習ってはいたが、これが夕焼けというものなのだろうか…とクリスは始めてみる景色に目を奪われていた。

「綺麗…」

出来る事ならばいつまでもこの景色を眺めていたい。そう思うに値する美しさだった。

「クラウド…遅いな…」

今きてくれれば、一緒にこの素晴らしい景色が見えるのに…一緒に感動を分かち合い、共感し、笑う。その嬉しさもクリスマスは授業を通して理解している為できればクラウドと共感したい…といつのまにか彼の事ばかり考えるようになっていた。

1人の世界に浸っていたクリスマスだったがなにやら辺りが騒がしい事に気付いた。集落の広場のほうから大勢のサンタの声がしている。

「なんだろう…」

クリスマスはいても経ってもいられず、その場を離れ、広場の方へ向かっていった。

広場に近づくに連れて、サンタが叫んでいる言葉もはっきりと聞こえてくる。

「バツ…バルドル!!!」

「しっかりしろ！」

「なにがあつたんだ!!!」

（バルドル？）

どこかで聞いたような名前。

（確か、中等教育での同級生だったような…）

この魔力はごく最近、身近で感じたものであり顔見知りのレベルで

あると判断できた。

人を掻き分け、騒ぎの中心に辿りついたクリスは驚愕する。思わず目を背けたくなるような光景であった。数人のサンタが倒れているサンタをなんか治療しようと試みている。

しかし、倒れているサンタの傷は深く、呼吸すらままならないように風前の灯火と言った様子である。鋭利な刃物で全身を切り刻まれたような傷口が体中についており、その傷口からは、まるで滝のように血液が滴り落ちている。

クリスはやはりその重症を負ったサンタの事は知っていた。今日の授業中に、リースではなく帽子を出してしまったクリスにイチヤモンをつけてきた生徒、バルドルだとすぐにわかった。

「酷い…誰がこんな事を…」

クリスの代わりに、近くのサンタがクリスの気持ちを代弁するかのようにはそつ…と呟いた。

微量の風が吹き、生臭い血の匂いがあたりに立ち込める。へなへなと力なく、クリスはその場にしゃがみ込む。同時に、先日、夢でみた光景がまたフラッシュバックしてしまった。

（そんな…まさか…）

重症を負ったバルドルの体の近くからやはり、クリスが知っている魔力の切れ端のようなものを感じる。

おそらくこの集落ではクラウドに次ぐ、クリスにとっては友人とも呼べる存在の魔力。

大雑把だが、無邪気でいつもクリスを笑わせてくれる彼…その魔力は、ロキのものであるとクリスはすぐにわかった。

（ロキがこんな事するわけがない…）

自分に言い聞かせるように、クリスは少しでも疑ってしまった自分を叱咤する。だが、クリス以外にもその魔力を感じ取ったらしく

「この魔痕は…ロキの物だ！」

「ロキを探せ!!！」

「これは明らかに掟に反している！追放するべし!!！」

熟練のサンタ達が一斉に散らばり、ロキを探し始めた。

「ロキは…こんな事する人じゃない…」

力なく、クリスはなんとか説得しようとするがその声は小さく、誰の耳にも届いてはいないようだ。

「なっ…なにがあっただ！」

遠くから誰かの声が聞こえる。クリスもよく知っている声だ。藁にも縋るようにクリスはその声の方へ思わず走り出していた。

「クリス？ちょうどよかった…一体ここでなにが…って！ちょっとあぶな…」

減速をしないまま、クリスはそのまますらウスに体当たりをかました。

「いたた…クリス？一体ここでなにが…」

クリスは体を震わせ、ひどく怯えているようだ。

「クリス…？」

きつとクリスはなにかを知っている、それでこんなに酷く怯えてい

るのだろう。

（今はクリスを休ませてあげる事が先決だな…）

クラウドは優しくクリスの頭を撫でてみた。体当たりの衝撃で、クリスの三角帽子は落ちてしまっているが本人はその事にも気付いていない様子でまるで現実から目を背けるかのようにクラウドの体にしっかりとしがみ付いている。

毎日クリスと楽しくしゃべったり、一緒に歩いたりしているがこんなにも至近距離で、しかも彼女に触れるなどという事はこれが初めての経験であり髪が以外とサラサラだったり、肩がこんなに小さいと感じたり、女特有の花のような甘い匂いを感じたり…クラウドは改めて、クリスは自分とは違う性別で少し力を加えれば、すぐ壊れてしまいそう…脆い生き物であると実感した。だが、やはりクラウドはここで一体なにがあったのか真実を知りたいという衝動にも駆られる。

幸いな事にクラウドの胸の中にはその事を知っているクリスがいる。少し罪悪感を感じながらもクラウドは、魔法：リスニングを発動させクリスの心の声を感じ取った…

（怖い…信じられない…でも…信じたい…）

ロキがこんな事するわけがない…でも…わからない…）

クリスは酷く混乱しているらしく、心の声も支離滅裂な言葉を発している。断片的に読み取り、なんとか解釈を試みるクラウド。

（黒い衣装…黒いサンタ…血…たくさんの血…クラウド…）

殺される……夢と一緒だ……死なないで……）

一体なんの事だろうか…クラウドはクリスとの会話を思い出してみ

る。  
（確か、悪い夢を見て気分が落ちていたときがあった…）

その夢と関係があるのではないか…これ以上、苦しそうにしている  
クリスの心の声を聴くのは辛いと感じた為クラウドはここでリスニ  
ングを解除した。

「いたぞおおおおお！あそこだあ！！」

「ロキ！！！貴様あ！！」

場にそぐわない叫び声上がる。

「ロキ…？まつ…まさか…」

「なんと…という事だ…その色は……………」

どよめきが起こり、落胆の言葉と恐怖を感じる声も聞こえる。クラ  
ウスはその体制のまま、他のサンタが見上げている方へ顔を向けた。

「…」

クラウドの表情からもわかるように、驚愕している事がわかる。夕  
日に照らし出され、逆光を浴び、表情までは見えないが明らかに家  
屋の屋根の上に、誰かが立っているのが目視できた。

そのシルエットとその者が発している魔力から正体はロキである  
事もすぐにわかった。

「ロ…キ…………？」

クリスマスもなんとか頭を上げ、クラウドの目線の先を辿る。

「あ…………あ…………同じだ…………夢と…同じ…」

太陽が一瞬雲に隠れ、ロキの全身が露になる。彼は、サンタ特有の

赤い服などきていない。まるで、あらゆる負の感情を合成して作られたような漆黒の黒い衣装を身に纏っていた。

片手には、夢で見た物と同じ鋭利で良く切れそうな剣を持ちその刃からはどす黒い液体が滴り落ちている。

「クリス……俺は……」

ロキは呟くように、クリスに向けて言葉を発している。

「俺は……クリスを悲しませる男を……消した……俺は……悪くない……よな……？」

かなり小さな声だが、クリスははっきりとロキの言葉が耳に届いた。

「クリス……笑ってくれよ……褒めてくれよ……」

ロキの目からはキラキラと光る液体が流れ落ちている。

「ロキ……なんて事を……」

クリスの予想外の反応にロキは混乱したように感情を爆発させる。

「なんで……なんでだよ！なんで褒めない！嬉しいがらない！

笑えよ！笑え！！……そんな……悲しい顔するなよ……」

「ロキ……人を傷つけて……クリスが喜ぶでも思っているのか……」

語りかけるようにクラウドも言葉を投げかけた。クラウドの言葉を聞いたロキは表情が一変した。



「お前さえ…お前さえ…いなければ…」

「ロキ……？」

「お前さえいなければ！クリスは俺だけの為に笑ってくれていたのに！！」

「なっ…なにを言って…」

「殺す…害になる邪魔者は滅する…クラウド…お前も…殺す！！」

ロキの魔力のオーラが開放される。昼間の授業でみた邪悪なオーラ。まるでその動きは蛇のように彼の周りを包み、とぐるを巻くような動きをしている。

ロキの重心が僅かに前に移動した瞬間。隙が出来たと判断した熟練のサンタがロキを捕らえた。

「大人しくしろ！ロキ！お前がやった事は重罪だ！掟違反だ！」

「離せ！離せえ！！！」

必死にもがくロキだが、魔力も体力も桁違いの熟練のサンタの力には及ばずすぐに拘束された。

「このまま、ロキは長老の元へ連行する」

「バルドルはそのまま診療所へ運べ！急ぐんだ！！」

バタバタと周りが動きだし、ロキは引きづられるように連行されていった。

その場で固まってしまったクリスとクラウドだったがすぐに我に返り、ずっと抱き合っている事に気が付いた。

「ちよっ…！そんなに慌てなくても…」

「じゅめん…」

「いつ…いや！謝らなくてもいいんだよ！ほら！クリス怯えてた

みたいだし……」

「うん…ありがとう…気が動転しちゃってて…」

「うんうん！今日はもう帰って休みな…おしゃべりはいつでもできるし…」

「ロキは…」

「クリス…彼はきつと元に戻るよ！一時的に混乱してただけだと思っ」

「そうかな？」

「ああ…！だって…ロキはクリスの友達だろ？」

「うん…そうだね…うん！ロキを信じる」

なんとか落ち着いたクリス。ホッと胸を撫で下ろしたクラウドだったが最後にロキが言った言葉がいつまでも彼の心から離れなかった。ぎこちない笑顔を作りながら、クラウドは無理やりクリスを笑わせようとつまらない冗談なども交えながら、彼女を家まで送ってあげた。

「んじゃ！僕はここで…」

「うん…クラウド…ありがとね…」

「ううん！全然こんなのお礼を言われるまでもないさ！」

「クラウド…気をつけて帰ってね？」

「ああ…！大丈夫だよ！僕はバルドルよりは…少しは強いからね！」

「知ってる…でも気をつけてね？」

「うん！心得た！んじゃ…おやすみ！今日は良い夢見れるといいね」

「うん…おやすみ…クラウド…」

いつもならば、クラウドはそのまま修練所の方へ歩いていくのだが、今日は別な方へ歩いていった。

(近道…かな?)

クリスは気に留める事なくいつも通りにクラウドの後ろ姿が見えなくなるまで彼を見つめていた。

すっかり日は落ち、辺りは明かりをつけなければなにも見えないほど暗くなっていた。今日は一日晴れで、空を見上げれば一面に星が輝き、月がよく見える。心が洗われるような美しい空だが今のクリスはそんな事を感じるような心の余裕はなく光り輝く星々もまるで、月が零した涙のように見える。

「ロキ…」

クリスは少々、心にわだかまりを感じていたが既に疲労がピークに達していた為、すぐに就寝した。

その頃、クラウドは真っ直ぐ自宅には向かわず、村長の家へ向かって歩いていった…

## 別れ

翌朝、クリスは快適に目を覚ました。変な夢など見る余裕もないほど疲れていたのだろうと思われる。大きなあくびをしながら、いつものように身支度を始める。

「あれ…？」

髪を梳かしながら、クリスはなにか違和感を感じる。

「…ない！」

いつも見慣れていた物が無い事に気が付いた。

「帽子がない！あれ！どこ！帽子がないよお！」

部屋の中を探し回るが、いくら探しても出てこない。それほど物は置いてないので、探す場所も少ないのだが…

「どこかで落としたのかな……………」

頭を抱え、昨日の自分の行動を振り返ってみる。

「あ…」

すぐに心当たりを見つけた。途端にクリスの顔が赤くなり始める。

「広場に行かなくちゃ……………」

「…と…その前にお風呂…なんか汗臭い……………」

少1時間ほど経ってからクリスは自宅を飛び出し、広場の方へ走って行った。途中の道でもしかしたら落としたのかもしれないとも考え、走りながらもあたりを探したが、やはり帽子が見つかる事はなかった。

「あ…！クリス！おはよう」

「あ…サタン！おはよー」

同級生のサタンとすれ違った。

「そんなに急いでどこにいくんだい？」

「ちよつと…探し物をしてるんだけど…」

「なにか落としたのかな？」

「うん…帽子を落としちゃって…」

「ああ…それで今日は帽子をつけてないのか…」

「サタン…ここらで私の帽子とか…見かけなかった？」

「ん…見てないなあ…ま！今日はなんか修練所は休校らしいからさ？」

「ゆつくり探しなよ」

「今日はお休みなんだ…知らなかった…」

「なんでも昨日…広場で事件があったらしくてね…それで今日は休みらしいんだ」

すっかり忘れかけていた昨日の出来事。サタンの言葉ですぐに思い出してしまった。クリスの表情が見る見るうちに曇っていく。

（そうだ…ロキが…）

今にも泣き出しそうな顔になり、サタンは慌てだした。

「なにがあつたのかは知らないけど…元気だしな！僕も一緒に探してあげるから」

「うん…助かる…」

探し物は人手があつたほうが見つかる確立も上がる。クリスは素直にサタンの助力を得られた事に歓喜した。

しばらく2人で広場を組まなく搜索していたがやはり帽子はどこにもなく、時間だけが過ぎていった。

「うん…広場じゃないのか…他に考えられないんだけど…」

「まあ…帽子ないほうが…僕的にはいいと思うけど…」

「どういう意味？」

「あつ…いや…こんなに探しても無いって事は…」

風で飛ばされたか、誰かが拾ってくれてるとしか思えないね」

「そーなるよね…」

「落し物なら全部村長さんの家に集まるから…行ってみるといいよ」

「うん！そうするよ」

「んじゃ…僕はちよつと用事があるから…」

「うん！わかった！一緒に探してくれてありがとね！サタン」

「どーいたしましたで、帽子…見つかるといいね！」

サタンに言われた通り、クリスは村長の家へ走っていった。

「ロキのやつ…余計な事を…」

一瞬にしてサタンの表情が変わり、なにか只ならぬ空気を醸し出した。

「エンボデイの後は必ず…コレクトを使って魔痕を消せと言ったのに…」

そんなサタンの表情の変化など、知る由も無いクリスは村長の家に到着し、勢いよくドアを開けた。

「おはよーございます！長」

「クリスか…まあ…ゆつくりしていきなさい…」

「あのお…落とし物届いてないかな？」

「ほお…クリス…なにかなくしたのかね？」

「うん…帽子をどこかに落としちゃって…」

「それは大変じゃのお…はて…帽子か…」

長は大きな箱を空け、ゴソゴソと中を漁っている。

「うゝむ…帽子は届いておらんのお…」

「ええ…じゃあ…私の帽子は一体どこに…」

「まあ…気を落とさんで良い…そのうち届くじゃろつて…」

「うん…」

「そうじゃ…帽子が見つかるまで、エンボデイで帽子を出したらどうじゃ？」

「あ…！」

自分がすっかりエンボデイを使える事も忘れていたクリス。村長の言う通りにさっそく、エンボデイを発動し始める。

途中まで発動していたクリスだがふと…なにか思い出したかのようにつに魔法を中断させた。

「そっ…いえば長…」

「ん…どうしたのかね…？」

「ロキは…どうなったの？」

「……………ふむ……………」

「教えて？」

「知らんでも良い事じゃ…エンボデイを続けなさい……………」

「長！ロキはどうなったの？教えてよ！」

クリスは必死に村長に食らいつくが、絶対にその後は教えてくれようとはしない。

「クリス…ロキはお……………」

4〜5分ほど、村長の体を揺らし続け、何度も教えてくれるように懇願した為すっかり村長も折れ、やっと話してくれる気になったようだ。

「残念ながら…邪悪な心に染まってしまいおった……………」

「邪悪な心…？」

「いかにも…悪しき心を持ってしまったサンタは…もう…元に戻る事はない……………」

「そんな……………」

「よって…ワシはこの集落から…ロキを追放した……………」

「……………」

「気持ちわかるが…これは仕方のない事なのじゃ…わかっておくれ…クリス……………」

「……………うん……………」

やるせない気持ちでいっぱいになってしまったクリス。今にも泣き出しそうな顔で、うつすらと目には涙を浮かべている。



「世の中には…奇跡というものがある…」

「それは…神様が与えてくれるプレゼントじゃ…」

「決して否定せず、純粹に信じる心があれば…神様からもらえるかもしれないぞ…?」

「…ほんと?」

「もちろんじゃ…ロキを友だと思っているのなら…いつまでも信じてあげなさい…」

「…うん」

「きつと、奇跡は起こる…また明るく…元気なロキが帰ってきてくれるはずじゃ…」

「うん」

「この集落は…ロキの故郷じゃ…もし…帰ってきたら『おかえり』と言ってあげなさい…」

「うん! そうだね! ロキは絶対に元に戻って帰ってくる! 私は信じてるよ!」

「ほっほっほっ…良き友を得て…ロキは幸せ者じゃのお…」

すっかり元気を取り戻したクリスの表情は明るい。

またエンボディを発動させ、クリスはすぐに帽子を具現化させた。

「ほお…筋が良いのお…」

「帽子は一番最初に作れたものだから…」

「ほっほっほっ…では一つ、アドバイスしてあげよう…みんなには内緒じゃぞ…」

お茶を飲みながら、昼過ぎまで村長宅で談笑していたクリス。

さすがに村長はサンタの中でも魔法の知識や歴史、まだクリスが知らない種族に関しての知識も豊富で話を聞いているだけで、まる

で修練所で授業を受けているような気分になった。クリスはアライムに関してや、使い方がまったくわからないリースを具現化させる方法など今まで考えてもわからなかった疑問をここぞとばかりにぶつけ、その都度わかりやすく、簡単に解決できるようなアドバイスをくれる村長を心から尊敬するようになった。

「長居しちゃってごめんね…長…また遊びにきてもいいかな？」

「ほっほっほ…いつでもおいで…」

「んじゃ…お邪魔しました…」

「お…そうじゃ…すっかり忘れておったわ…」

「え…？」

次の村長の一言は、クリスの体中に電撃が走ったかの如く、衝撃を与えた。

「クラウドスは…ロキに対して責任を感じ…集落を出ていった…」

「……………え？」

クリスは棒立ちになり、固まってしまった。

## 決意

ロキが追放されてしまった事に対して罪悪感を覚えたクラウドは晩方、長老に村を出ると挨拶にきたらしい。長老は引き止めたが、彼の意思は固く長老の説得でも止める事はできなかった。

クリスは未だにその現実を受けれる事ができず、長老宅を後にしてから自宅に引き籠もってしまっている。クラウドが集落を出た日から既に3日は経とうとしているのだが、彼女に再び笑顔が戻る事はなかった。そんな彼女を心配して同級生の何人かが様子を見にいったが、以前のように元気な姿でなかったという感想らしい。

クリスにとっては自分を救ってくれた恩人であり、良き友人であり、あるいはもつと特別な存在になろうとしていたクラウド。一度に2人も友人がいなくなるなんて、思いもしなかったであろう。長老宅で具現化した彼女の帽子もまるでクリスの精神状態を表しているかのように、酷く歪んでしまっている。だが、3日経った今でも原型を留め、まだ存在しているという点では彼女の魔力は衰えておらずまだ腐ってはいないという事がわかる。

(どんな形でもいい…実際に会えなくとも、クラウドともう一度楽しく話がしたい)

クリスの思いは募る一方であった。

「近くにいなくても…会話が出来れば…」

ぼおっつとしながら、ある一点を見つめ非現実的な事を考える。

(可能じゃよ…ほれ…ワシのトークが聞こえるじゃろ?)

「え？」

クリスは驚き、キヨロキヨロと自分の部屋を見渡すが、トークの主はどこにもいない。明らかに長老が自分にトークで語りかけてきたのはすぐにわかったのだが…

（相手の魔力を感じ…それを辿る…少々クリスには難しい事じゃが…

もう少し…せめて上等教育を卒業できるレベルになれば…可能かもしれない…）

「本当？」

遠くにいる長老に、その場で返事しても声は届く事はないが長老は嘘をつくはずはない。現にこうして遠くから自分に対してトークを使用している。

自分もこの技術を習得できれば、クラウドと話ができるかもしれない。長老のおかげでクリスは徐々に活力が湧いてきた。

（諦めちゃいかん…後ろ向きになっちゃいかん…

何事も前向きに考えるのじゃ…それがサンタとしての強さを育むのじゃ…）

「長の言う通りだ…家でこんな事してるんだったら…

修練所で少しでも魔力を磨いて…」

クリスの表情に少しずつ明るさが戻ってくる。クラウドと再び話をするという彼女にとっては大きな目標ができた。できれば直接会って言葉で会話したいのが本心だろうが、喋れないよりはマシと考えればかなり気が楽であるようだ。

「よおし！頑張るぞー！」

クリスの表情はやる気に満ち溢れている。単純というか純粹というか：まだ生まれて間もないからなのかもしれないが、彼女の思考回路はまるで一方通行のようである。

クリスは決意を固め、明日からは再び修練所に通う事に決めた。今日のもうじき日が暮れるため、自宅で自主練をする事にしたのだ。修練所で覚えた魔法を一つづつ、丁寧にさらっていく。発動するにあたり、先生から教わったように極力必要以上の魔力を放出し魔力を高める方法でこなしていく。

既にエンボディで帽子を具現化しているのにも関わらず、スムーズに覚えた魔法（トーク以外）を発動する事が出来た。以前は出来なかったクリスマスリースの具現化も長老のアドバイスを遵守する事で、なんとか出現させる事が可能になっている。アラームに関してはオーラの色は別に染めなくても良いと言われていたのが、自分では納得する事ができなかった為、発動するにあたりイメージを根本から変えることでオーラに色彩を持たせる事が可能になっていた。長老が言ったように、とりあえず上等教育を卒業できるまで今は修練所で頑張る。クラウスとお喋りできないのは寂しいが、それは今だけできつとつかまた会えるし、ロキも帰ってくると信じている。物事をプラスに考える事は生きる為には必要不可欠、言わば活動する為の動力源に該当するのではないかと感じた。

へとへとになるまで自主練を繰り返し、クリスは倒れるようにベッドにダイブした。3日ぶりに魔力を使い、まるでこの集落に初めて訪れた時のように疲労感が凄まじい。この3日間、碌に睡眠もとってなかったせいか一気に眠気が襲ってきた。

「明日に備えてもう寝よう…」

既に眠気は限界に達していた。灯りを消しゆっくりと目を瞑る。クリスはそのまま深い眠りについた。

翌朝、クリスは定刻よりも早く目が覚めた。カレンダーを見れば11月26日と表示されていた。クリスマスと呼ばれる食事の日まであと1ヶ月を切った。それまでにクリスは最低限のサンタの魔法を全て覚えなければならぬ。上等教育の途中で集落をから出て行ってしまったクラウスは大丈夫なのだろうか。と少々不安を感じたが、確かその前に「イブと呼ばれる決戦があると授業で習った。戦える者は全て強制で参加しなければならぬらしい。思い出さなくてもない先日の血の色や、匂いをその日に再び感じなければならぬかと思うだけで、クリスはクリスマスなんてこなければいいのに」と自分がサンタである事に対して自己嫌悪に陥ってしまう。

手早く身支度を済ませ、クリスは家を出る。今日はいつものように「おはよう」とクリスに挨拶を一日の始まりの挨拶をしてくれるクラウスはいないのはわかってはいるが、実はまだクラウスは集落にいないのではないかと自然に彼の姿を探してしまっている。

(いるわけないんだよね…)

少しでも期待してしまつた自分がバカだった。とすぐに気持ちを切り替え、クリスは修練所を目指す。

「お！クリスマス具合はもう平気なのかい？」

「おはようございます…クリスさん…」

後方からサタンの声ともう1人、あまり喋つた事はないが一緒に初等教育を卒業したシモンが話しかけてきた。

「おはようサタン！え〜っとそれから…」

「シモンです…」

「おはよーシモン！」

「もう平気だよ！今日からまた頑張るから！サタンはもう上等教育までいったんだっけ？」

「ああ…なんとかね…ロキもクリスもないから…かなり退屈だったけどな」

「まあまあ…すぐ追いつくから！むしろ追い越すから！」

「おー！張り切ってるなあ…シモン、お前もクリスに負けるなよ？」

「無茶言わないで下さいよ…中等の時点でかなりの差をつけられてましたし…」

「っと！定刻に間に合わないよ！早くいこ！」

3日ぶりに友人と会話したので、ついつい長話になってしまったが、クリス達はなんとか定刻ギリギリ間に合ったようだ。

中等教育の生徒は、ロキ、サタン、シモン、ヤコブ、バルドルがない他、話はした事はないが他数名が卒業したらしく、人数が減っている。だが、初等教育で一緒だった2人が新たに編入していた。

「クリス！もう具合は平気なんだね！」

「やつと男だらけのむさ苦しい授業ともお別れだ！」

「相変わらず美しいな…クリス…」

「みんな…心配かけてごめんね…」

まずは全員に余計な心配をかけてしまった事を詫びる。

「でも…私今日卒業するつもりだから！」

「ええ！」

「クリスならやりかねない…」

「そんな…病み上がりは無茶しちゃ…」

…と、今日の意気込みをアピールしてみた。定刻になり、先生が姿を現した。

「今日からクリスさんが再び授業に戻ってきましたが…」

皆さん！授業に集中してくださいね！では…今日も歴史の授業から…」

また、サンタの開祖となった4人に関する歴史の授業が始まった。クリスはこの歴史のテストは一度クリアし、内容も問題傾向もバツチリ覚えていたため、あっさりと一番最初にテストをクリアした。クリスに続き、クリスよりも先に中等教育にいる先輩達も歴史のテストをクリア。次にエンボデイの練習となる。

（先生、今日はなにを具現化させるんですか？）

（この前と変わりませんよ…このクリスマスリースです）

具現化させるものも中等教育にきたときと一緒だったのはクリスにとってはラッキーだった。他の生徒が魔力の上昇訓練をしている中、クリスは1人エンボデイを発動させ完璧なクリスマスリースを出現させた。案の定、病み上がりとは言え、完璧にエンボデイを習得し魔力の質の違いを見せつけたクリスに対して生徒一同から拍手が沸き起こった。

（既に、クリスさんは習得していましたね…おめでどう！

では次の魔法の説明をしますね…）

ここから先は未知の領域である、今日卒業する気だと宣言したのはいいが、中等教育で教わる魔法は一体いくつあるのかは知らない。段々と自信がなくなってきたクリスは（あんな事言わなきゃよかつ



た…）と少々後悔し始めたようだ…。

（安心してください。次に教える魔法はトークでしたが…

クリスさんはもう習得していますので…これも合格とします）

（ありがとう）

トークはクリスが集落にくる以前、生まれた瞬間に覚えたと言っても過言ではないほど早く覚えた魔法であり、今は日常会話も完璧に使いこなしているが、トークでの会話もはやベテランクラスの精度を誇るほどに進歩しているのだ。

（では…次の魔法の説明をします。この魔法を習得できれば…

中等教育は卒業となります）

（はい！頑張ります！）

（この魔法はリスニングといって…トークと同じ系統の魔法です。相手の心を感じ取り、思いや感情などを感じる事ができる魔法です

では…練習法の説明をしますね）

既にトークをマスターしているクリスは説明を聴いただけで発動方は大体把握できた。

トークは、自分の思いや言葉を魔力に変換し相手に送る魔法である。相手に送られた魔力は自動的に相手の心の中で元に戻る。一方リスニングは、相手を自分の魔力で包み心を探る。そして包んだ魔力を再び自分に戻す事で相手の感情や言葉を知る事ができる魔法である。心を探るといふ技術以外はほとんどトークと変わらない要領で発動できるのだ。

（では…先生がある言葉を思い浮かべますので…クリスさん  
リスニングを頑張って発動させ、その言葉を当てて下さい）

（はい！）

まずはトークと同じ原理で先生に魔力を送る。このとき大事なのは極力相手の魔力の質に限りなく近づける事。魔法を発動していなくてもうつすらとその魔力のオーラは目視できる。先生のオーラは薄い青色を帯びているのがわかった。ここでアラムを発動させるために、音のイメージを色に例え魔力の色を変化させるといった技術が必要になる。

村長からのアドバイスでクリスはその色彩変化もなんとか習得に成功している。しかし複雑な色を真似て同じ色に変化させるといった練習はした事が無い為、ここで苦戦を強いられる事になった。

## 中等教育卒業

少しでも色が異なれば相手を包んだところで心は探れない。自分の魔力と相手の魔力を同化させる事ができなければリスニングの発動には至らないのである。クリスは先生のオーラの色を完璧に記憶しようとするがここで一つの問題が発生した。なんと、先生のオーラは時間が経つに連れて青から緑へ、緑から黄色へ、黄色から赤へ…と時間によって色が変化していくのだ。色が変わるパターンもそうだが、変わるたびに見た事もない色へと変化し、先生の魔力の色に合わせるタイミングがすごく難しいのだ。

(先生：意地悪してない?)

(していませんよ…? 頑張ってください!)

的当てなんかよりも遥かに難しい事をやらせられているのではないか：クリスは何度も挑戦してみるが、やっとクリスの魔力のオーラが先生のオーラと同じ色になったところで、先生のオーラの色が変わってしまったのは、無駄になってしまふ。やはり、卒業がかかった最後の授業は一筋縄ではいかないと痛感した。だが、これほど難しい魔法でも、サタンやクラウスはクリアしている。絶対になにかコツがあるのではないかとクリスは考えを巡らせる。

(一体どうすれば…)

ふと…頭を悩ましているクリスは村長からもらったアドバイスを思い出した。

「行き詰まったら…発想を変えてみるのじゃ…意外なものか

役に立つ場合もある…魔法の世界は深い…何事もチャレンジジ

ゃー」

(発想を変える…か…)

ずっとクリスが試みているのは先生の魔力の色をまず自分で作ってから飛ばす方法である。これでは間に合わず、平行線のままだ。そもそもこの方法ではリスニングは発動できないという事なのではないか…なにか使える魔法はないものかと考えてみる。一つづつ、自分ができる魔法を思い出す。使えない魔法をここで要求するわけがないのはわかっている。今までの授業を思い出してみる。

ずっと試していたのはアラームの応用技術。変化させていたのは音ではなく色。これがリスニングに繋がるのではないかと思っていたが、おそらく違うと確信を持てた。

次はエンボディ…具現化する技術。先生のオーラを具現化させて飛ばしてみたらどうだろうか…ちよつと試してみたくなったのだが、そもそもオーラの形なんて不安定でありイメージすら固まらない。よってエンボディでもないとすぐに却下される。

次はトーク、これは問題外。言葉を使わなくても会話ができる技術がここでなんの役に立つのか検討もつかない…。

(あれ…もう思いつかない…)

やっぱりアラームの応用か…エンボディで頑張っつて具現化させろつて事なのだろうか…手詰まりの状態が続き、クリスは一向に先には進めない状態である。

周りを見れば、何人かはエンボディを習得し、トークの習得に向けて試行錯誤しているようだ。先生に自分のオーラを飛ばそうとしている生徒が多く、その事からよくわかる。クリスの近くに座っている生徒も今、まさにエンボディを習得したように眩い光を放ち机の上にクリスマスリースを出現させたところである。

「おめでとう!」

「あ…ありがとう…」

「リース出しっぱなしだと、魔力が足りないからさ…それ回収するといよいよ」

「回収?」

「うん…簡単だから…私が教えてあげる…こうやって手を翳して…」

(ん?)

一つ、使える魔法をすっかり忘れていたようだ。エンボディで作り出した物を再び自分の魔力として回収する魔法。コレクトである。

(そうか…わかった!)

クリスはなにかを掴んだらしく、雲が晴れたように表情が明るくなる。

「翳して…?ここからどうすればいいのかな?」

「ああ…ごめんごめん…そこから…」

リースは自分の魔力の一部だ…ってイメージを固めて

リースを魔力で覆うんだよ」

「わかった…やってみるよ…」

絶対に違うと思っていったエンボディ…だが今のクリスはエンボディが使えなければ、リスニングも使えないと確信していた。却下だと思っていたはずだが、クリスは先生のオーラを具現化させる為にイメージを固めていく…。イメージ力が強ければ強いほど、エンボディの成功率は上がり精度が高いものができる。クリスがイメージしているのはオーラではなく、もっと簡単なもの、一番最初にエンボ

デイで出現させた帽子である。

帽子のイメージが固まる、そこに少し別な考えで帽子の用途を改変させていく。

(この帽子は先生の魔力のオーラ…)

強く念じ、雑念を捨て、帽子を出現させるために魔力を一気に開放させた。

強い光を放ち、クリスが想像した帽子が出現する。その帽子は徐々に一定の周期で色を変え、歪んだり大きさが変わったり…一言で言うなら変な帽子である。

「クリス…なにそれ…」

近くの生徒がクリスが出現させた妙な帽子を見て突っ込みをいれるがクリスはニコッと微笑みかけ、せっかく作り出した帽子をすぐにコレクトで回収してしまったのだ。

(これで…先生のオーラはきつと記憶したはず…)

そこでクリスは再びアラムの技術を応用し、色彩変化を試みる。しかし、先ほどと違うのは先生のオーラを記憶したことで色彩のイメージがそのまま先生のオーラの情報を再現させたのだ。

(やはり…素晴らしい才能だ…この短時間で

具現化の技術を応用し、イメージの改変技術を習得し

回収する事で記憶する技術も習得したとは…)

心を探る技術はまだわからないが…やっと第一関門である先生のオーラと自分のオーラを同化させるまでには至った。ここからどうす

るのか：クリスは全然考えてなかったが、自力でここまでできた事に満足しているようだ。

一体どうすれば心を探れるのだろうか：ここでまた行き詰まりそうになるが、トークと同じ系統の魔法だと説明があった為、自分がトークを覚えたときの事を思い出してみた。

（確かあの時は…：どうにかして自分の気持ちを伝えたかったから…  
ってことはあの時の逆？知りたいうっていう気持ちを…）

（リスニング習得おめでとう！

それから…中等教育合格です！おめでとう！）

トークではない先生の心の声が伝わってきた。クリスはびっくりして魔力を飛散させてしまうが、確かに先生の心の声を感じた事を実感していた。

（先生…？今トーク使った？）

（いいえ…？なにも使っていませんよ？）

（今…リスニング習得おめでとう…って聞こえたんだけど）

（なんと…！もう習得したのですが…）

（ちよつとびっくりしちゃって…解いちゃったから…）

もう一回、別な言葉を思い浮かべてくれないかな？）

（ええ…いいですよ）

自分が本当にリスニングを習得したのか確かめるため、クリスは先生に言葉を変えるように催促し、再度同じ方法で先生の心を探り出した。

（上等教育からは、今のリスニングのような応用技術が要求される魔法が

多く、すごくハードルが上がります…)

サタンも言っていたような事が先生から伝わってきた。

(先生？ 上等教育からは……… って言った？)

(いいえ… トークは使っていません…)

クリスさん、リスニングを習得しましたね！

おめでとう！)

やはり、気のせいではなくクリスはしっかりとリスニングを習得していたのだった。

「みなさん！ ちょっと作業をやめて聞いてください！

たつた今、クリスさんが中等教育、最後の魔法を習得しました。  
中等教育卒業です」

「いつのまに…」

「おめでとう！ クリス！」

「本当に今日卒業しちゃった…」

(みんな… ありがとう！)

エンボディやアラームとは違い、リスニングは本当に習得したのかどうかはわかりづらい為、クリスはある程度その手前の課題であるト  
ークで生徒に感謝の意を伝えた。

「すげ… トークで…」

「クリス… もうちょっと一緒に…」

「僕らにも教えてくれよ…」



「うん…私もそのつもりだよ！みんなに付き合っよ」

「さすがクリス！」

「そこなくっちゃ！」

初等でもそうだったように、卒業したからといってすぐに上へは進まず、全員に自分なりのアドバイスを授け、できれば全員で同じ土台に上がろうとするクリスの優しさは、決して人に恨まれたりする事はなく、喜びを共感する嬉しさを全員で感じ良心的なサンタを産み出す。自然と友人が増え彼女の周りはいつも明るく楽しい空間が広がる。故に、彼女を絶対に悲しませる事はしたくない…と生徒全員が感じた。中には独占したいと考える者もいるが…笑ってる彼女の姿を見られるだけで満足しているようだ。

今日も授業が終わるまで、クリスは全員にエンボディやトーク、習得した者にはリスニングの魔法のコツを一生懸命教えていた。

今日、中等教育を卒業できた者は27名中3名。クリス・トマス（元々中等教育にいた）・マタイ（トマスと同様）である。卒業できた人数が少なく、クリスは少し残念な表情を見せていたが

「すぐに追いつくから！」

「先に中等教育でコツ掴んできてくれ！」

…と、前向きな発言が多くクリスも安心して明日からは中等教育へ編入する意思を固められた。

修練所の門から外へ出る。もう、誰かを待つ必要はないのだがクリスはなんとなくクラウドを待っていた定位置で、いつもの風景を見ながらぼくっとしていた。やはり、精神的にクラウドがいなのは少し堪えているようだ。

「クリス、なにしてるんだ？」

後ろから話かけてきたのはサタン。

「ん…今日は夕日見れるかな」と思っただけ…」

「夕日か…今日はこれから天気荒れそうだし…敵しそうだよ」

「そっか…」

「中等…どうだった？」

「ん…卒業しちゃったよ…明日から上等だよ」

「すげっ…よく一日でリスニング習得できたな…」

「気合」

「ははは…そういえば…クラウドは…」

「言わないで…！」

急に不機嫌になったクリスは、自宅に向かって走り出した。サタンはなにか聞いちゃいけない事を言ってしまったのかと、自分の言動に対して後悔をしているようだが…予想とは違い…全く別な事を考えているようだ…

「そうか…クラウドはいないのか…」

シモンももう少しで黒化する…

いずれ、クリスも…」

意味深な言葉を吐きながら、サタンも自宅へと帰っていった。クリスはすでにサタンの視界からは消えていて、今の言葉は聞こえなかったが、1人の生徒はしっかりとサタンの不吉な言動を聞いていた。

「黒化…？」

なにか嫌な予感がする…1人の生徒は長老宅へ走り出した。

自宅に帰ってきたクリスは灯りもつけないまま、そのまま崩れ落ちるようにベッドに沈んだ。サタンは心配して聞いてくれたのに、自分はなんであんなに動揺してしまったのだろう…。また、自分のせいで誰かが…と考えると修練所での明るさが嘘のように表情が暗くなっていく。

（早くトークを応用させる技術を見につけたい…）

それで…もし、クラウドと会話が出来たら集落を去ろう）

知らないうちにロキのような闇を抱えさせてしまったり、サタンの気遣いを無視してしまったり…自分がこの集落において、良い事なんてなにもないんじゃないかと思い始めていた。

一人で考える時間が増えた。元々深く考える事は嫌いではない性格だが、プラスに考えようとすると自然にそううまくいくはずはない…むしろ自分なんかになにができるんだろう…とマイナスに考えてしまう事が多い。前だけを見て進むのはすごく勇気がある。後ろを振り返らない勇気が欲しい。クリスは自分の弱さを痛感しながら、そのまま眠りに落ちていった。

## 戦闘用の魔法

場所は上等修練所。初等や中等教育の教室よりも、2〜3倍の広さである。生徒の数は少なく8名。予想以上リスニングの習得は難しいらしく、中々上等教育まで辿りつける生徒がいらないらしい。クリスは今日が上等教育の初日。昨日突然、不機嫌になってしまった事をサタンに謝り、なんとかいつも通り仲良く会話を楽しむ事ができている。

サタンも「気にするな。僕の方こそ変な事聞いちゃってごめん」と少し反省していたらしく、お互いが謝って昨日の事は水に流す事になったのだ。

定刻になり、先生が現れる。いつも通り今日から上等教育を受ける事になった3人の自己紹介から始まる。一時期、修練所にこなかったが異例のスピードで上等教育まで上がってこれたクリスの噂は、上等の生徒の耳まで届いてたらしい。

先輩にあたるサンタの中に修練所で初めて自分の同じ性別の女サンタが1人いた。クリスは自分は1人じゃなかったと胸を撫で下ろし、同じ性別のサンタと仲良くなりたいと心から思った。クリスと違う点は、彼女はクリスほど髪が長くなく、肩に掛かるか掛からないかくらいの長さで、特徴的なのは髪の色。ほぼ原色に近い鮮やかなピンク色である。いつのまにかリスニングが使われていたらしくその女サンタはトークで話かけてきた。

(クリスって言ったっけ？あたしはアテナ。よろしくね？)

(あ…よろしく〜アテナ！)

「新しく入ってきたヒヨっ子サンタもいる事だし…」

上等教育について説明しよう！

ここでは戦闘の基礎を学ぶ！

授業だからって甘く見てると本当に死んじゃまうから注意しろ！」

(死ぬ…?)

先生から脅しのような説明が入り、今日編入したばかりの3人は緊張感に包まれた。戦闘の基礎とは一体なんなのか…クリスはどんな魔法を教わるのか少し不安を感じていた。

「まずはいつも通り、攻撃魔法の基礎中の基礎！」

シユートからいくぞ！」

魔法：シユート 攻撃魔法の基本形。

自分の魔力を硬質化し、対象に向かって放つ魔法。魔力の質が高ければ高いほど、硬質化された魔力

は鋭さを増す。

熟練のサンタが扱うシユートは

巨大な岩石をも串刺しにするほど強力である。

「全員、わかっているとは思いますが

オーラに質量を持たせる事が大前提だ！」

あゝアテナ？なんの魔法を応用するか言ってみろ」

「はい！エンボディとアラムとトークです」

「馬鹿野郎！それはシユートじゃねえ！」

シユートだ！」

魔法：ショット 攻撃魔法の基本形。

エンボディで作り出した物を対象に向かって放つ魔法。

イメージ力が高ければ高いほど様々な物を放つ事ができる。

ある者は、剣を投げたり、

ある者は、毒ガスを放ったり…

万能のように見えるが大量の魔力を消費する為  
使い勝手は悪い。

「あれ…ショットって聞き間違えましたあ」

「ったく…お前は…俺の話を良く聞いてるよ！」

あ…んじゃヤコブ！言ってみろ」

「アラームとトークだけ…」

「ご名答！ショットはアラームとトークの応用技術を使う！」

ではこれから練習を始めよう」

先生はエンボディを発動させ、なにもない空間に大きな樽を出現させた。

「いいか？この樽を狙って打ってみろ！」

間違えても人に当てるんじゃねえぞ！

怪我どころの騒ぎじゃねえからな！」

つまり、謝って人に当ててしまった場合は…考えただけでクリスは身震いしてしまう。

ヤコブが言っていたように、シールドはアラムのオーラの変化技術を使つらしい。硬質化するイメージを固めれば、すぐにでも扱えそうな魔法である。さつそくクリスは魔力を溜めオーラの変化を試みた。まずイメージしたのは石。ものすごく硬く、丈夫な石。オーラを一箇所に集め、凝縮させるようなイメージで集中する。

「クリス！やめろ！それは違う！」

すかさず先生からやめろという声が掛かった。

「え…？」

「考え事態は間違つちやいないが…」

「そんなでかい魔力のオーラを凝縮させようとするな！」

「どうして…？私は石をイメージしてただけど…」

「馬鹿野郎！凝縮した魔力のオーラなんて投げてみる？  
どうなると思う？」

「ん…他の魔力に当たればぶつかって飛散して…」

「わかつてるじゃねえか！じゃあその凝縮されたものが  
急激に飛散した場合…どうなるか言ってみろ」

「ん…わかんないよ…」

「ドカーンだ！わかつたか！」

「二度とするなよ？あぶねーから！」

「わかつたよ…」

どうやらクリスはいきなり危険な事をしようとしていたらしい。確かにドカーンになったらこの教室にいる生徒は無事じゃ済まない。クリスは再びイメージの選択を決めるところからやり直した。

(どんまい！クリス！それ…あたしも一回やって怒られた)

(え…アテナも？やっぱ最初は普通そう思うよね…)

(せんせーはドツカーンって言ってたけど…)

やってみなきゃわかんないのにね…)

(ええ…私は先生を信じるよ…怖いもん…)

(クリス…可愛い…)

(いきなりなにを言って…)

「そのへんにしておけ女2人!」

(げ!ばれた!また後でね!)

気を取り直してクリスはもう一度オーラを溜め始めた。

魔法：コンプレスポム 一般的な攻撃魔法。

クリスが授業で間違つて発動させようとし

てた魔法。

圧縮した魔力を対象に放つ。

圧縮した魔力の量が多ければ多いほど

爆発時の威力は高くなる。

もちろん魔力の質によっても変わってくるが

集落の村長クラスになれば

小さな島は一つくらい消し飛ばせるほどの

威力になる。

先ほどイメージしたのは石。圧縮すれば硬くなると思っていたのだが、全く別な魔法になってしまつとの指摘を受け、イメージ選択を変える。他に硬いものを想像するしかないようだ。身近なものを想像するのが一番だと判断したクリスは、次に連想したのは氷だった。



水のイメージは冷たくて軽い、しかしその鋭さは侮れない。圧縮すると言う概念を捨てなければシュートは習得できないので、慎重にイメージを固めていく。

（まずは水を作ろう）

オーラを練り、水のような流れ、冷たさ、湿気。思いつく限りの水のイメージを固めていく。水状に変化するイメージが固まったらそれを急速に冷やし凍らせる。形は丸いよりも氷柱のような形のほうが鋭そうなイメージも沸くし、発射するスピードが速ければあの樽にも刺さりそうだ。全体像とその氷柱ができるまでの過程のイメージもできた。あとは放出して発射させるだけ。

クリスは一気に魔力を開放し、オーラを水状に変化させた。更に氷柱のイメージを固め、細長く、先端が尖るように急速に水が凍りつくイメージで水を固形化させた。あとはこれを樽目掛けて発射する。

発射するという技術は、トークで魔力を飛ばす事と一緒になのでクリスにとっては簡単だ。

（いつけー！）

クリスは樽を狙って氷柱を飛ばしてみた。

パキッと軽い音がしたような気がした。だが、確実に樽になにかが当たった気がした。

「だろっな…クリス、お前の考えは的を得ているが…」

四大元素を扱うにはまだまだ若すぎる！

氷柱を作り出したのは評価できるが…

それじゃ合格とは呼べん！やり直し！」

（また失敗：難しく考えすぎたのかな）

硬質化という言葉に捕らわれ過ぎて、逆に難しくしてしまったのではないかと考え、単純に自分の魔力のオーラを小さな玉に変化させできるだけ速い速度で投げればいいんじゃないかと考えた。

ぶつかっても壊れない程度の強度がある玉をイメージする。圧縮させる事や氷柱を作りだす事よりもごく単純で簡単なイメージだが、クリスが放出した魔力の玉は先生がエンボディで作り出した樽を見事に貫いていた。

「やるな…クリス！それがシュートだ！

今の感覚を忘れるな！合格！」

やっと先生に合格をもらい、次の魔法の練習の許可をされた。なんとかシュートの習得に成功したクリスだが、つくづく戦闘用の魔法は自分には向かない…と感じ始めていた。

> i 3 7 7 4 7 — 4 7 3 1 <

## シヨットの応用魔法

(相変わらずすげーな…)

サタンからトークが飛んできた。

(そんな事ないよ…こんな魔法覚えても…使う機会なんてないし…)

(まあ…護身用だと思えばいいよ。身を守る手段は多ければ多いほどいいし！)

イブは強制参加なんだろ？その時に嫌でも使う事になるだろうし…)

(だよね…なんか複雑だよ…人を傷つける技術って事には変わり無いし…)

(クリスは優しすぎるんだよ…もっと気楽に考えた方がいい…)  
(うん…)

シユートを習得したクリスは次に、その次の段階の魔法。シヨットの習得に移った。他の生徒も大体はシヨットで行き詰まっているらしく、エンボディを素早く発動させる技術を身につける事から始めているようだ。もう1人の女サンタ、アテナはシヨットは習得しているらしく違う魔法の練習をしている。

シユートとそう変わりはない魔法かと思われるシヨットだが、応用次第ではどんな高度な魔法よりも確実に殺傷能力が高いものとして完成する事もある。なにを具現化し、どんな効果のものを投げることが鍵となるようだ。

クリスは初めてシヨットの説明を聞いた時にある場面を思い出していた。先日みた悪夢での画面。黒いサンタの集団の先頭のサンタが使用してきた魔法である。具現化するもの一つで兵器と化す恐ろ

しい魔法であると感じていた。自分ならなにを具現化するか…まずはそこからイメージを固めようとしていた。

（人を傷つける為の魔法なんてうんざりだ）

自分ならその逆、人を元気にさせたり傷を治してあげたり…そんな人のためになる魔法を使いたい。クリスは自然とその考えに定着していた。

エンボディで具現化したものをトークの応用技術を使い飛ばすだけの簡単な魔法である事には変わりないが、例えば帽子を具現化し放ったところでももちろん合格はもらえない。あくまで上等教育は戦闘技術を身につける教育であるため実戦に役に立つものを具現化しなくてはならないからだ。

最低条件として、いくら弱いイメージでも具現化したものに効果を持たせる事ができれば合格はもらえるらしい。イメージ力と素早いエンボディの発動が絶対条件である。一体他のみんなはなにを具現化させようとしているのか、気になる点ではあるがクリスは集中力を欠くことなくショットの習得を目指す。

ショットの授業で最初に自分がイメージしたものを昇華させ、そのまま自分の魔法として利用するサンタは多い。いろんなものを具現化させ応用が利く魔法にしたいと考えるサンタは多いが、一つのもの放つだけで莫大な量の魔力を消費するためやむを得ず一つに絞らざるを得ないらしい。最初のイメージの選択が自分だけのショットを形作る為、中途半端なイメージはできない。極めてシビアな魔法である事がわかる。どうせならば、一撃必殺の必殺技にしたいと考えるサンタは多く凶悪な殺傷能力も持たせそうとする者が大半である。

（アテナはどんなショットにしたの…？）

（あゝ！びっくりしたあゝ！あたしはねえ）

アテナはクリスの突然のトークにびっくりしてしまったようだが、クリスの問いにしつかりと応えてくれた。

（鳥さんにしたよ）

（鳥？）

（うんうん！梟っていう種類の鳥さん！）

（生き物を具現化したって事？）

（ん）…まだ全然生き物ってレベルじゃないけど…それが目標かな）

（どんな能力を持たせたの？）

（えへへ…それは秘密だよ！でも完成したら見せてあげる）

（うん…楽しみにしてるね）

アテナのショットを参考にしてみようかと思ったクリスだったが、まさか生き物を想像したとは思ってはいなかったため、やはり自分で考えようと結論付けた。まずはイメージが沸かなくなってしまったクリス。一応サタンにも聞いてみようと思いついてトークを飛ばしてみる。

（サタンはどんなショットを考えてるの？）

（僕も全然イメージが沸かなくてね…今クリスに聞こうと思ってたところだったよ）

（そっか…全然イメージできないよね…）

（戦闘技術って言われてるから…一度に複数の人を巻き込めるよ  
うな

そんな能力にしようとは思ってるけどね…）

（複数か…なんか閃いてきたかも）

（よかったよ！一緒に頑張ろうな！）

サタンの考えから、一度に大勢の人に影響する能力にしようと考えを固定させることができた。あとは大勢の人にどんな影響を与えるか、それを行うために何を具現化させて放つか。具体的なイメージを固めることになった。人を傷つけたくないという考えのクリスだが…時には非情にならざるを得ない場合もあると想定し、殺傷能力を持つ能力を想像していった。

(どうせなら…苦しませずに…)

苦しませずに傷つける、もしくは殺害する。そんな方法など知る由も無いクリス。知らない情報をイメージすることは不可能なため更にイメージが固まらない。

ぼおっつと窓を見ながら外の景色を眺める。今日も天気は良いらしく、屋根に積もった雪が気温が高くなるにつれてピチャン…ピチャンと雫が零れ落ちている。次々に溶け出し、まるで雨が降っているかのように勢いを増していく。

(溶けちゃってるな…)

クリスはその光景を見つめながら、ある考えに達した。

(溶けるって…痛いのかな…)

少なくともクリスが知っている人を傷つける方法、殴る蹴る、刃物で斬りつける…硬い物を投げつける…よりは断然痛くなさそうだと思えた。一瞬で溶かす事ができれば、きっと苦しませる事はないのではないか、客観的に見れば非常に恐ろしい考えだがクリスはそのイメージを固めていった…

サンタを形作っているのは魔力。これが命である。魔力が枯渇してしまえばサンタは存在する事ができずに消滅する。故にサンタは

魔力を全て使ってしまったように魔法を発動させる際には無意識に魔力を温存する習性がある。クリスの考えは、その残った魔力すらも溶かしてしまおう…むしろ溶かすというよりも魔力を分解し飛散させてしまえば苦しませる事なく楽にさせる事ができるのでないか…という考えである。

先ほど、失敗と思われたシュートで偶然にも誕生させた水を使うと考えた。水ならばその範囲内に収めた人を全て対象にできる。後は魔力を分解させ溶かす。まるで雪が溶けていくかのように魔力を溶かすイメージで能力を固める。エンボディを発動する準備に入る。リスニングを習得したときと同じ要領でまずは水を想像する。次に水を想像したままイメージを改変し、水に魔力を溶かすという能力を加えていく。ゆっくりとクリスは魔力を集中させていく。

「おい！ちよつとまってクリス！ここでそんなショット使うなよ？」

「…え？」

また先生から制止が入った。また失敗なのだろうか…クリスはがっくりと頭を垂れまた1からイメージ選択のやり直しかと落胆した表情を見せるが

「クリス！なにを落ち込んだ顔をしている」

「だつて止めるって…」

「何を言っている！合格だ！」

「え？」

一瞬先生の言った言葉の意味がわからなかったが確かに、「合格」という言葉は聞こえた。

「先生…今なんて…？」  
「合格だ！クリスお前は今ショットを習得したのだ」  
「だって発動できてない…」  
「それは自主練で磨くのだ！ここでそんなショットを放てば  
一体どうなると思っている！」  
「あ…」

先生が言う通り、ここでクリスがイメージを固めたショットを発動し、イメージ通りの効果を持った水を発生させれば教室にいる生徒が巻き込まれる。もし先生が止めなければどうなっていた事か…クリスは考えただけで自分が愚かだったと痛感する。

(自力でイメージを固め…よくぞその考えに辿りついた…)

それはショットなどという生易しい魔法ではない…)

(どういう事?)

(その魔法はアシッドアナライズ…通称AAと呼ばれる高等魔法だ)

(ショットではないって事?)

(ショットには違いないが、ショットの応用版ってところだな)

(応用…か…)

(膨大な魔力を消費する…お前の魔力じゃまだ発動はできんだろうが…)

(そうなんだ…)

(少なくとも、そのエンボディで作った帽子を回収しないと無理だろうな)

(あ…忘れてた…)

(今日はショットまでだ！残りの時間は魔力を高める訓練でもしている)

(うん…)



一先ず、クリスはなんとかシヨットの習得にも成功した。先生に言われた通り残りの時間はエンボディとコレクトを使い、魔力を高める訓練に時間を費やした。

魔法：アシッドアナライズ

通称：A A。

シヨットを応用し発動させる事ができる高等魔法。

魔酸という物質を作り出す錬成魔法。

魔力を分解し消滅させる事ができる。

魔酸を浴びたサンタは文字通り消滅し存在できなくなる。

未熟な魔酸を浴びた場合は壮絶な苦しみを味わう事になる。

熟練のサンタであってもA Aを使いこなせる者は少ない。

サンタの開祖と言われる4人の内の

ルチアがもつとも得意としている魔法である事は広く知られている。

後は自主練で鍛えろとは言われたものの、クリスは使えるのかどうかもわからない。いくらイメージが固まったとは言え、それを発動できる確信は持てるはずがないのだ。先生が言った通りクリスの魔力では発動に至らないのかもしれないが、クリスは試してみたいという衝動に駆られている。もつと簡単なイメージでシヨットを覚えればよかったと後悔しているが、A Aを使えばいざという時に絶対に役に立つ。多くの悲しみや苦しみを生まずに解決する事ができるのではないかとクリスは絶対的な自信があった。

(クリス！ショット習得おめでとう！)

(ありがとーアテナ！)

(一緒に基礎練しよー？)

(あ…うん！)

一日で気軽にお喋りを楽しめるようになったアテナと一緒に、クリスは魔力を高める訓練を行っている。既に2人ともエンボディによる修練法ではなくそれよりももっと効果が期待される方法、基礎攻撃魔法シユートによる修練を行っていた。魔力も向上しシユートの精度もあがる一石二鳥の方法である。次々に先生がエンボディで作成した樽が破壊されるので先生は相当疲れている様子である。

「クリスはどんなショットに決めたの？」

「なんかよくわからないけど…ショットの応用だって先生が言っていた」

「え〜！もうショット応用しちゃったのか…」

「でも発動してないから…できるのかもわからないし…」

「あたしも先生に同じような事言われてさ…」

「え？アテナも？」

「うん…授業中は使うな！だって！」

「なんかすごそうだね…」

「えへへ…きつとすごいよ！発動できればの話だけどね…」

「できれば…ね…」

「次の休みの日に一緒にショットの練習しに行かない？」

「あ…行きたい！」

「じゃあ決まりだね！」

「うん！楽しみにしてるね！アテナ！」

共に修練に励む2人の表情は生き生きとしている。魔力の総量はや

やアテナの方が上だが、クリスはその有り余る魔力の才能を見せつけすぐに同格まで追いつく。アテナも負けじと自己を高め決してクリスに引けを取っていない。楽しそうにシュートを乱射しまくる2人の姿を見て先生は

（次のイブが楽しみだ…）

この集落での戦力になる事だろうな…）

2人の戦闘能力の高さを改めて評価していた。上等教育で習う攻撃魔法はこのシュートとショットのみ。残りはサンタの基礎魔法の2つ。サーチとスルーである。

上等教育を卒業できれば、やっと半人前と言えるのだ。そのレベルでもクリスマス当日、無事に食事を成功させる事ができるサンタは少ない。運という能力が大きく左右されるためいくら実力があっても生き残れる可能性は少ないのだ。今はそんな先の事は考えずに今できる事を1つづつこなすという前向きな姿勢が大事なのだ。

今最後の1人がショットを習得したらしく、これで上等教育の生徒8名が全員無事攻撃魔法の基礎を習得した。サーチとスルーの練習は後日行つらしい。全員で魔力の基礎を高める訓練に勤しんでいるのはクリス・アテナ・シモン・ツール（先輩）の4名。他の4名はまだエンボディとコレクトによる修練法である。

上等教育はほとんどがその基礎練に時間を費やすが、中等、初等よりも長い時間拘束される。その分魔力は桁違いに上がるのだが、疲労度は計り知れない。もう魔力のオーラが出なくなるほど疲れが溜まっている生徒もいるがそれでも先生は「練習を続ける！」と叱咤し、一切の妥協は許さない。

もしかしてクラウドはこの授業に耐え切れなくて村を出る決意を固めたのかな…とクリスは全く検討違いの考えが起きる。クラウド

の事は少なくとも尊敬していたはずだが、今はクラウドと同等の教育を受けているため、自分と同格かやや上という程度の認識に至る。

（早く帰ってこないと…追い抜いちゃうぞ！）

悲しみを見せていたクリスの表情は今では明るい。上等教育でアテナという新しい友人ができたからだ。しかも同じ性別という共通した悩みとも言えるものも一緒に分かち合える掛け替えのない友人と呼べる。女という生き物は、その生存本能により気持ちの切り替えが早い。すぐに口キヤクラウドの事も過去の人として認識してしまつのではないだろうか…と少々不安になるが、クリスはずっと去つてしまつた2人の事は忘れる事はないだろうと思われる。しかし、当初の目的であつたクラウドスにトークを飛ばしたいという気持ちはすっかり薄れていたのでつた。

## 死ぬと言つ事

授業が終わり、上等教育の生徒は次々に帰宅の準備を始める。一つの授業が終わるたび習得に成功した魔法の参考書のようなものが渡され、授業が終わっても忘れないように教材として配布されるのだ。クリスマスもあまり疲れていない日は寝る前に渡された教材を読み、より深い知識を身につけるように心掛けているらしく、新しく配布された教材は非常に大切に扱っている。

「クリスマスー！一緒に帰ろっ」

「うん！待つてアテナ」

すっかり仲が良くなったアテナと一緒に修練所を後にした。今日はいつもの定位置には目もくれず、まっすぐに自宅に向かって歩みを進める。

「クリスマスは誰か…好きな人とかできたの？」

「ん…？好きな人？」

「うんうん！大事だっと思える人の事だよ」

「あゝ…いるよ！」

「え！いるの！誰？」

「みんな大好きだよ」

「そうじゃなくて…」

「アテナの事も大好きだよ！」

「あつ…あたしもクリスマス大好きだよお〜！」

会話が噛み合っているようで噛み合っていない2人だが、傍から見ても仲が良いという事はわかる。アテナが言う「好きな人」とは何か…という事に関してクリスマスは頭を悩ませるが

「クリスは良い子だなあ……」

「え……?」

「そういう誰でも受け入れられる性格ってすごく羨ましいよ」

「アテナは……違うの?」

「あたしは結構人見知りとかしちゃうからなあ……」

「人見知りって?」

「ん……仲良くなれそうだなって思える人としか仲良くできない」

「なんか複雑だね……」

「ま……乙女だからねっ!」

「あはは……」

「じゃあ……大好きな人の中から……1人だけ特別って思える人はい  
る?」

「ん……難しいなあ……選べないよ……」

「一緒にいて安心したりとか、もつとこの人の事を知りたいって  
思える人だよ」

「ん……長……かな?」

「あはははは!長?確かに長だね!」

なぜ、アテナはこんなにも笑うのだろうか……と頭を傾げるクリス。  
一体この質問の意図はなんなのか、不思議でたまらないようだ。

「あたしはねえ……1人いたんだけど」

「いた……?今はいないの?」

「うん……数日前に集落を出て行っちゃってね……」

「男の人?」

「うん!この集落で女はたぶん……あたしとクリスだけだよ!」

「数日前に出て行った男の人……って……」

「数日って言っても……たぶんクリスがここに来る前だと思う」

「ええ……!?!?」

「あたしをこの集落に運んでくれた人でね…今でもすごく大事な人だと思えるんだ」

「どこかで聞いたような…」

「アレスっていう名前だね…今どこでなにしてるんだろ…」

「…アレス…ごめん…私その人知らない」

「だよね！クリスは知らない人だね！」

「私にもアテナと同じように思える人…いるよ？」

「長とか？」

「長じゃないよ！数日前って聞いてその人かな〜と思ったけど…違う人みたいだね」

「ん〜…最近集落を出て行った人が…あ！」

「クラウスって人でね…私にとっては恩人なんだ」

「あ〜…クラウスかあ〜！確かに彼…優しいもんね」

「知ってるの？」

「うんうん！クラウスとは初等から一緒だったよ」

「アテナはクラウスと同級生なんだね！」

「んでもあいつ！たま〜に授業サボるから！あたしすぐに上にいっつちやったよ」

「授業サボってたんだあ…」

「うんうん！長に断って、なんかたまに集落の外に行ってたみたい」

「そのおかげで私はここにこれた…」

「間違いないね！クラウスに感謝しなきゃ！」

「うん！感謝してるよ！今でも感謝してる！」

「あたしも感謝してる！クラウスのおかげでクリスと出会えたんだし！」

「アテナ…」

真っ直ぐに自分の気持ちをぶつけてきてくれるアテナ。クリスはアテナの言葉に感動を覚えた。同時に自分と同じようなシチュエーシ

ヨンで同じような人を大事だと思っているアテナの事を知り、まず親近感を覚え愛着を覚えた。

「いつか…会えるといいよね…」

「うん！あたしはもしかまた会えたら一発…殴ってやるんだ！」

「ええ！殴るの？」

「うんうん！だって…あたしに黙って出て行っちゃったし…寂しかったし！」

「アテナ…泣かないで…」

うるうると目に涙を浮かべ始めたアテナを優しく撫でてあげる事しかできないクリス。自分も数日前はこんな状態だったと思い出す。今でもアテナのように大事な人の事を考えればこんな顔になるんだろうか…自分が泣いてる姿なんて見た事はないが…泣く事で周りの人を心配させてしまう。戸惑わせてしまう…もっとお互いに精神的な部分で強くならなきゃいけない…とクリスは泣き出そうとしているアテナを自分に置き換えていた。

「私も…クラウドにまた会えたら…一発…シュートでも打ってやる！」

「クリス…」

「勝手に出て行って寂しい思いをさせた罰を与えてやるんだ！」

「クリス…それしたら…クラウド死んじゃう…」

「じゃ…じゃあ！蹴る！」

「うん！それなら安全…クリス…励ましてくれてありがとう…」

「どういたしまして…」

自分がありがとうと言う機会が多いが、こうして改めて相手からありがとうと言われると、不思議に心が温かくなるような気分に包まれる。アテナの表情がまた元の明るさを取り戻していく。やっぱり



人は泣いているよりも笑っている顔の方が安心する。できる事ならばみんなでいつまでも笑って過ごせれば、それは幸せと呼べる事なんじゃないだろうか…。しみじみと感じながらいつのまにかアテナの家の前まで来ていた。

「送ってくれてありがとう！また明日ね！クリス」

「うん！また明日！おやすみ」アテナ」

クリスは自宅へ向かって歩いていった。

すっかり日が暮れ、集落の街頭の灯りがなければ前方も見えないほどに外は暗い。気温も下がり始め吐息に含まれる水分も凍り始めるほど寒くなってきた。アテナの家からクリスの家まではいくら早くても数十分はかかるであろう距離だ。話に夢中になっていて気付かなかったが結構距離が離れていた事に気付いた。

せっかくなので、クリスはエンボデイを発動させ自走機能がついたソリを出そうと魔力を集め始めた。エンボデイを覚えたてのクラウスでも出す事ができたとクリスは記憶している為、自分にできないわけがないと確信し、魔力を一気に放出させる。イメージはクラウスが乗っていたソリ。あのままの姿で移動する速度も目と体で覚えていたため簡単にイメージが沸く。思った通りすぐにソリが出現した。「よし！」と小さく喜びクリスはソリに乗って自宅へ向かって移動を始めた。

乗り心地は快適だ。肌に刺さる風も実はそれほど苦になるレベルではなく、速度は出しているが体感としてはそよ風のように柔らかく感じる。おそらくソリの周囲を自分の魔力が包んでいるためそれが風から守ってくれているのではないかと思える。

一瞬、ガタン…とソリはなにかを踏んだような音と同時に激しく揺れた。クリスは何事かと思いいソリを止める。そして何かを踏んだ

あたりまで引き返す。暗くてよく見えないが地面になにかが落ちて  
いる事はすぐにわかった。ソリをコレクトで回収し、クリスはもつ  
とそれがなにか良く見えるようにアラームの技術を応用しオーラを  
光へ変化させた。

「誰か!!誰かきて!!」

クリスは叫び声を上げる。

クリスの目に映りこんだのは重症を負ったサンタだった。いや、  
重症どころではない既に事切れたかのようにそのサンタの目に光は  
映っていない。クリスが大きな声を出した事で周囲は騒ぎ出し、バ  
タバタと他のサンタが集まってきた。

「一体何事だ!」

「今何時だと思っっているんだ!」

罵声を上げながら近づいてくるが、クリスの目の前に倒れているサ  
ンタを見ると一同はすぐに気持ちを切り替えた。

「誰か!治療魔法を使える者はいないか!」

「いやまて!魔力の胎動が見えん…この者は既に…」

「君がやったのか!」

「いや…よくみる!この者にその子の魔痕はついてない!」

クリスは意外と冷静に淡々とこの者を発見した経緯を説明している。  
一度重症を負ったバルドルを見ているためその類には耐性がついた  
からだ。

「私…この人見た事ある…確か中等で…」

そう…クリスは確実にこのサンタの事は見た事があった。しかも一度会話もした事がある。このサンタは中等教育卒業の日にリスニング習得で悪戦苦闘していたときに、隣でエンボディを成功させたサンタでクリスが口頭でコレクトを教えてあげた生徒、フェーベだった。

フェーベの体から魔力の粒子がゆっくりと立ち上っていく。これがなにを意図するのかクリスは知らないが、周りのサンタは落胆しているように見える。

「なんとこの事だ…」

「この者は帰ろうとしている…」

「みなで…黙祷しよう…」

会話を聞いていたクリスは既にフェーベは絶命しているのだろうと悟った。

(これが死……)

死ぬと言う事を間近で見るとは思っていなかった。以前重症を負ってしまったバルドルはその後奇跡的に回復し今では体を回復させるために療養している。しかしフェーベは死亡し魔力の粒子が立ち上るたびに徐々にその体は薄くなっていく。まるでそこにはなにもなかったかのように薄く、徐々に存在その物が消えてなくなっていくかのように透過していく。

「いやあああああああ！」

クリスは突然発狂したかのように叫び声を上げ、混乱し始めた。周りのものがすぐに彼女を抑え落ち着くように言い聞かせるが彼女の

耳には届かない。

金切り声のように大きな声を出し続けるクリスはそのまま意識を失い、気絶してしまったようだ。初めてみたサンタの死は彼女にとっては刺激が強すぎたようだ…

「しかし…一体誰が…」

「先ほどから探っているが…魔痕は見つからない…」

「くそっ…魔痕をコレクトで回収するとは…なんと悪質な！」

「とりあえず！この子を村長の元へ！この事件を知らせるのだ！」

「それから集落の全員に知らせろ！何者かがこの集落に潜み

我らを殺そうとしているとな！」

バタバタとサンタ達は行動し、その場には静寂が訪れた。

フェーベがいた場所には始めからこの場所にはなにもなかったかのように、魔痕やフェーベの気配すらも消え、降り始めた雪が地面に積もり始めていた…

## 敵は身内にいる事が多い

翌朝、昨日の知らせが知れ渡った為、集落中大騒ぎであった。どこに敵が潜んでいていつ仕掛けてくるのかもわからないので集落のサンタは全員ピリピリしている。こんな状況では修練所で授業などしている場合ではなく案の定、騒動が収まるまで休校となった。

集落の会合所では長を始め最低限の攻撃魔法が使える上等教育の生徒はもちろん、修練所の教員、ベテランのサンタなどが集まっていた。戦えないものは修練所へ非難し、外と中には集落の中でも選りすぐりの護衛団が待機している。もちろん、集落のあちこちにも見回りの為に腕利きのサンタが点在している。

気絶していたとは言え、一晚村長宅でゆっくりと休んだクリスは回復し、会合所で話を聞いている。昨日の夜の事は思い出すだけで鳥肌が立ち精神が不安定になってはいるが、傍にはアテナやサタン、ヤコブやシモンがいるため非常に心強く、なんとか安定を保っていられるようだ。

「既に賊は集落を離れたのではないか？」

「まだ絶対にこの集落の中に潜み、我々を襲う機会を窺っているのではないか？」

「いずれにしろ、安全の確保が最優先であり現状維持が得策だ」

様々な意見が飛び交っていた中、現状維持が最良の案として全員が一致し、しばらくはこの状態が続くようである。極力1人での行動は避け、常に数人で行動する事。就寝は交代で行う事。怪しい人影を見かけたらすぐに近くのベテランサンタに知らせる事。以上の事を良く守り自分の身は自分で守れるように考慮せよ…と長老が結論付けた。

「修練どころの話じゃないね…」

「次の魔法…早く教わりたかったな…」

上等教育の生徒が何人が愚痴をこぼすが、状況が状況な為なんとか納得しているようだ。

「ねえ…クリス…あたしらでその犯人見つけに行かない？」

「え…なに言ってるのアテナ！無茶すぎるよ」

「もし行くのなら…僕も手伝うよ」

「僕も…手伝わせて下さい…」

クリスとアテナの会話を聞いていたらしく、サタンとシモンが話に混ざってきた。

「アテナ…本気で言ってるの？」

「うん！あたし達はもう充分戦える力があるんだよ？実践のいい機会じゃない！」

「アテナの意見には僕も同意だ…自分の力…試してみたい」

「僕は…みんなに任せますよ…ちよつと怖いですけど…」

アテナ、サタンは一步として引かずその意気込みに負けクリスも4人で賊を探しに行く事に賛成した。そんな4人を遠くで見つめていたヤコブもここぞとばかりに話に混ざってきた。

「もし邪魔じゃなかったら俺もその話乗っていいか？」

「え…え…つと…」

「ヤコブだ…」

「ヤコブも一緒に？」

「ああ…話は聞いていた…俺もアテナとサタンの意見と全く一緒だ」

「ヤコブもきてくれるのか…これは心強いな」

「上等教育の中で1〜3位を争ってる実力の3人がいれば…なんとかなると思いますよ！」

「これならなんとかなるかもしれないね…」

「あつたりまえじゃん！みんなが行かないって言ってもあたしは1人でも行くつもりだったし！」

「しっ！アテナ…声が大きいよ」

「おっとつと…ごめんクリス…」

「決まりだな…さっそく行動しようじゃないか」

「なんかわくわくしない？クリス…」

「嫌な予感しかしないよアテナ…」

（5人とともに…気をつけるんじゃないぞ…）

「！」

「！」

「！」

「！！」

「…！」

長からのトークが5人に響いた、長はバツチリ5人の会話を聞いていたらしい。だが、止めようとはせずに頑張ってみると言ってるかのように優しい言葉をかけてくれた。慌てて長の方を見た5人の目には、力強くVサインをしている長が微笑んでいた。

（長ってあんな性格だった…？）

(可愛いじゃん！それに優しいし！長最高ー！)

(なんだかやる気が削がれてしまうな…)

(同感だ…)

(でもよかつたじゃないですか…長もきつと僕らに期待してるんですよ…)

5人はトークで会話を済ませ、会合所を後にした。もちろん誰にも気付かれる事なく脱出に近いような形で外に出た。

「ふう〜…やっと外の空気が吸えた〜！」

「会合所…人多くつて…息苦しかったよねえ…」

「男だらけだしな…」

「女がいっぱいでも逆に俺は恐ろしいがな…」

「んで…どこに向かうんですか…？」

集落の地図を広げながら5人は固まって作戦会議を始めた。集落の全容が描かれた地図を見る機会は滅多になく、自分達が暮らす集落は意外なほど大きい事がわかった。ほとんど居住地である事には変わらないが、路地の数や木材などが収めてある倉庫等も多く敵はどこに潜んでいるのかもわからない。適当に散策して敵とばったり鉢合わせするのは避けたいのが心情だが…アテナとサタンはわざと敵が潜んでいそうな場所を選ぶ。

「そもそも賊つて…何人いるのでしょうか…？」

「え…？1人じゃないの？」

「アテナ…それはないと思うよ…？」

「うんうん！集落に攻め入る気できているのなら…かなりの数がいるんじゃないかな」

「さあな…俺には単独で攻め込んできた自意識過剰なやつだとは思えないが…」



「少なくとも…中等教育の生徒を簡単に殺せるだけの實力…」  
「フェーベ…か…あいつは魔力は低かったが…資質は悪くなかった…」

「やっぱ…私らじゃどうにもならない相手なんじゃ…」  
「クリス！弱気になっちゃだめだよ！あたしらには必殺技があるでしょ！」

「ひっ…必殺技ですか…？」

「そうだよ！あたしとクリスのシヨットはね！」

その恐ろしさから先生ですら止めてたじゃないか！」

「アテナ…その言い方…恥ずかしい…」

「でも発動できるのか…？」

「やっ…やってみなきゃわからないじゃない！」

「当てにしようとした僕が間違っていました…」

「シモン…気を落とすな…クリスとアテナのシユートの威力を忘れたか？」

「とーにかーく！こんなところで話してちゃ進まないでしょ！」

「アテナの言う通りだ！とりあえずフェーベが倒れていたというあたりを探してみるか」

「行きたくないなあ…」

「クリスさん…気をしっかり持つてください…」

「ここからそう遠くはないな…クリス…気持ちを切り替えるんだ」

最初の目的地が決まり、5人はやっと行動を始めた。

巡回しているサンタに見つかればせつかくの行動も全て無駄になってしまったため、5人は細心の注意を払いながら目的に向かっていく。ちょっとした冒険をしている気分である為、気乗りしなかったクリスもなぜか高揚感に包まれていた。アテナの表情は一変して緊

張感に包まれており凜とした美しさが際立っている。他の3人もそれぞれ緊張しているためか、移動中は口数が少なくまるで授業中のように真剣な表情である。

少1時間ほど経過し、5人は目的地に辿り着いた。

「とりあえず着きましたね……」

「そーいえば……なんでここにきたんだっけ？」

「確かヤコブが……」

「ふん……君達は本当に素人だな……」

「素人……？」

「知らないのか？犯人は必ず現場に戻ってくるという偉人の言葉があつてだな……」

「……こいつ……アホ？」

「アテナ……失礼な事いつちゃだめ……」

「失望しました……」

「また振り出しか……」

ヤコブはしてやったりといった表情から急変し、シヨンボリとした顔になる。アテナはすっかり呆れてやる気がなくなったかのような緩い表情に戻った。まあまあ……とクリスがフォローに入るが効果はないようだ。ヤコブの意見は聞かなかつた事にしてサタンとシモンは彼らなりに地図を見ながら次の目的地を決めている。

「ここ……この丘はどうだろう？」

「なるほど……ここなら集落が一望できるかもしれないね」

「少し集落から離れすぎじゃない？」

「いくらなんでも遠すぎると思う……」

「俺はもう……なにも言わん……」

しかし、他に良いと思われる案がでない為、サタンとシモンの言う通りに5人は少し集落から離れた場所にある丘を指す事になった。集落から離れているので居住エリアを抜ければ巡回しているサンタに見つかるといふ事はなく、5人の緊張も少しは和らぎそうである。朝一で行動を開始していた5人だが、丘に着く頃にはすっかり日が高く、昼過ぎになっていた。幸いにも今日も天気はよく、集落を一望できるほど晴れ渡っている。サタンとシモンの意見は功を成したと言えた。

さっそく集落を丘から見渡すクリスとアテナ。こうしてみると改めて集落の規模に度肝を抜かされるが今は不審な人物を探す事で頭がいっぱいになっているようだ。

「いないね…」

「クリス！諦めないで！絶対どこかにいるはずだから！」

「うん！頑張るよ！」

必死になって集落を見つめる2人。巡回しているサンタは数人見つけたのだが、やはり不審なサンタなどはどこを探しても見つからない。

突如、後方からなにか衝撃音が聞こえた。慌てて後ろを振り返った2人の目には信じられない物に移りこんだ。

先ほどまで一緒に集落を見つめていたヤコブが倒れてる。うつ伏せになっている為表情は確認できないが、背中が焼かれたように焦げている。まだ煙が上がっていて攻撃らしきものを受けてから時間は経っていない。おそらく先ほどの衝撃音が攻撃の正体である事はすぐにわかった。

「ヤコブ！」

「ヤコブ！しっかりして！なにがあったの！」

クリスとアテナはヤコブの上体を起こし、傷の状態を見る。

「にげ…にげる…俺らは…だまされ……」

「ヤコブ…しっかり!」

「クリス!ヤコブの傷はそんなに深くないよ!早く会合所に……」

前触れもなくアテナの言葉が止まる。ひどく動揺した顔で前方を凝視している。不自然に言葉を止めたアテナの目線の先を辿った。

「あゝあ…しくじっちゃいました……」

「だから俺がやると言っただろう……」

そこには、サタンとシモンの姿があった…

## 初めての实战

「サタン…？シモン…？」

シモンの掌から煙が上がっている。明らかに先ほどの衝撃音の発生源である事が一目瞭然である。ヤコブの傷口からシモンの魔痕も確認できる事から、ヤコブに攻撃を加えたのはシモンであると断定できる。

一体、なんでこんな真似をしたのか…クリスとアテナは必死に考えるがやはりわからない。喧嘩というレベルではなくこれは明らかに殺人を意識した加減のない攻撃であると、その魔痕が物語る。

「なんで…ヤコブを…」

「シモン！一体どういうつもりで！」

「本当にどこか抜けていますね…まだわかりませんか…？」

「面倒だ…俺が説明してやる…」

サタンの口調はいつもと違い刺々しいものになっている。声質も低く…まるで別人である。

「昨日の晩…フェーベを殺したのはこの俺だ…」

そして、あいつと同様にお前達もここで始末する…」

「そういう事です…私怨はありませんが…消えてもらいますよ」

「嘘でしょ…サタン！シモン！悪ふざけならいい加減に…」

クリスの言葉を遮断するように、シモンはクリスの足元にシュートを発射した。まるで…黙れ！と言わんばかりに大きな衝撃音が響いた。

「シモン…危ないじゃないか！冗談でしょ？冗談だって言いなさいよ！」

アテナもまだこの現実を受け入れる事ができず、混乱した様子だ。しかし、目の前のサタンとシモンは冷たい瞳で2人を見つめている。冗談や悪ふざけではなく本気である事がわかる。

「サタン…なんで…こんな…」

力無く…クリスはサタンに問うが、クリスが期待している返事など返って来るはずはなかった。

「もう一つ…教えておいてやる…ロキを黒化させ、バルドルを斬るように差し向けたのも俺だ…」

「え……………」

「俺は元々この集落のサンタでない…これを見ればわかるだろう…」

サタンの言葉と同時に、シモンとサタンの衣服の色が徐々に濁り始めた。どす黒くまるで濃い血液のように美しい赤は黒に侵食されていく。ゆっくりと色が変わり始め赤い衣装は全身が真っ黒になった。

「その姿は…」

「ああ…………夢なら覚めて！」

クリスの悪夢が今まさに、現実のものとなった…嫌な予感は的中したのだ。

衣装が変わった瞬間、サタンとシモンの魔力が急激に増加した。明らかにクリスやアテナ以上の魔力であり、とてもじゃないが勝ち目がないほどの差がある。

「これが本来の俺の姿だ…ま、シモンは俺が黒化させたから…半端者だな…」

「そんな言い方ってないですよ…少なくとも…赤いゴミどもよりはマシでしょう…?」

「サタン…今まで…ずっと騙してたって事…?」

「人聞きの悪い事を言うな…騙していたのではない…元々俺は貴様らの敵なのだ」

「クリス…これからは友達…ちゃんと選んだほうがいいよ…」

「そうする…なんか私も人見知りになりそう…」

「そろそろ殺してしましましょう…熟練のサンタがくると面倒なので…」

「クリス…お前の甘さには反吐が出る…」

だが、一緒に過ごした数日間…悪くは無かった…

名残惜しいが…お別れだ…」

「あんまり…」

「なんだ…? 遺言か?」

「あんまり…舐めてんじゃねえぞ!」

クリスは目を見開き、ありつただけの魔力を開放させた。無意識にエンボディで作り出した帽子も回収しており、クリス本来の魔力が開放されていく。アテナはもちろん、サタンもシモンも全力のクリスを見るのは始めてだ。まさか帽子をエンボディで代用していたなど知るわけもなく、いつも感じていたクリスの魔力はそれが彼女の最大値だと思っていたからだ。

負けじとアテナも魔力を開放させる。殺されてたまるか!と主張

するかのようにありつた。たけの魔力を絞り出す。

クリスもアテナも攻撃魔法の基礎は覚えているが、実戦はこれが始めてで戦い方など知らない。しかし悲しみを通り越し、怒りという感情を爆発させたクリスとアテナはサタンとシモンを睨み付け、明らかに殺意を抱いているようだ。決して勝てるとは思ってはいいが、これだけの魔力を放出すれば集落の誰かが気付くかもしれない。それまではなんとか持ちこたえる！と腹を括り、戦う決心をしたのだ。

アテナの魔力は想像通りだったが、クリスの魔力は更に上だったという事に対してサタンは驚きの表情を隠しきれていない。だが、すぐに冷静さを取り戻し再び余裕そうに腕を組み直した。

「ロキやシモンではなく…始めからクリスを黒化させるべきだったな…」

「サタン…僕がクリスを殺せばその発言は撤回してくださいね…」  
「ふん…やってみろ…」

クリスはすっかり情を捨て「人を傷つけない」という精神は忘却の彼方へ沈み、今は敵だとわかったサタンを許さない。ヤコブを傷つけたシモンに罰を与えるという考えで固定されている。

戦術なんて何一つない。だが唯一使える攻撃魔法、シユートを渾身の魔力で放った！アテナもクリスに続くようにシユートを2人に向かつて乱射し始めた。

予想外のスピードで射出されたシユートは、的確に2人を捉え命中したかのようにみえた。しかしサタンは自らを覆うように魔力のオーラを硬化化させシユートの弾丸をいとも簡単に受け止めた。シモンはいとも簡単に避け、仕返しとばかりにクリスとアテナにシユートを放った。

まともに被弾してしまえば、ヤコブのように身動き一つ取れないような傷を受けてしまう。アテナは無意識に体を動かし被弾寸前の



ところでなんとか避けた。一方クリスはまるで避けようとはせず棒立ちのままだ。怒りで考える頭も回っていないのだろうか、このままでは被弾してしまうのは目に見えている。

「クリス！！避けて！！」

アテナは必死に叫ぶが、クリスは不動である。

思わず目を覆ってしまうアテナ。「そんな…クリスまで…」と悲しみが押し寄せてくるが、シュートが当たったと思われる衝撃音はいつまで経っても聞こえてこない。そおつとアテナはクリスの方を見た。

クリスはシュートの弾丸を避けたのではなく、なんと両手で受け止めていた。必死で押さえつけ握りつぶそうと力を込めている。

(嘘：！)

アテナは驚き、事の成り行きを見守ろうとするが敵はそんな暇を与えてはくれない。今は身動きがとれない状態のクリスと隙だらけのアテナに再びシュートを乱射してきた。

シュートは直線の動きしかできない。起動を見切れば簡単に避けられる。アテナもそのシュートの短所を素早く理解し避けながら反撃のチャンスを探っている。クリスは…と彼女の事が気になったアテナは再びクリスの方へ目を向ける。そこには信じられない光景が移った。

先ほどアテナが見たのはクリスが弾丸を掴み、握りつぶそうとしていた光景。だがアテナの考えは丸つきり外れていたのだった。クリスは弾丸を握りつぶそうとしていたのではなく、弾丸を自分の魔力で覆い弾丸にリスニングを発動させていたのだった。アテナには理解できない事であったがクリスは一つの賭けに出たのだった。

シュートを簡単に受け止めたサタンをみたクリスは、魔力のオーラに硬さというイメージを持たせればサタンと同じような防御が可能になるだろうと瞬間的に思った。やはりクリスの考えは間違っ

はおらず、シユートの勢いに力負けしそうではあったがなんとか受け止める事に成功していたのだった。しかし自分のオーラではシモンのシユートの弾丸を相殺する事ができず、このままではオーラを突き破ってきてしまう。

クリスとはとんでもない事を思いついた。

(この魔力を記憶し、自分の魔力に書き換える事ができれば

コレクトで回収できるのではないか)

まさに命懸けの実験。成功するかどうかもわからない。授業でも教えてくれなかった事を今実践しようとしていた。

クリスはシユートの弾丸を両手で掴み、自分のオーラで覆う。おそらく最初にアテナが見たのはこの場面である。握りつぶそうとしているのではなく、質感や魔力の本質を記憶をしようとしていたのだった。極限まで研ぎ澄まされたクリスの集中力は、シモンの魔力をすぐに理解する事ができた。リスニングの練習の時の先生の魔力を記憶する時よりも、シモンの魔力は意外なほど簡単に記憶できた。

(あの時に比べたら…こんなの簡単だよ…)

うつすらと笑みを浮かべたクリスは、更にシユートの弾丸に自分の魔力を込める。なかなか自分の魔力に変わってくれないのでクリスは駄目押しのトークを応用させ、言葉や思いではなく弾丸の内部に直接自分の魔力を注ぎ込んだのだ。あつけないほどにシユートの弾丸は勢いが止まり、コレクトを発動した瞬間クリスに吸収されたのだった。

既にオーラの質は記憶してある。次、弾丸を飛ばしてきたら自分のオーラで覆ってからトークで魔力を内部に注ぎ込めれば簡単に回収できる。そんなことは知らないシモンはやはりシユートを乱射してきたのだった。

クリスは次々にシモンのシュートによる弾丸を吸収していく。それをみたアテナは驚き、一体なにが起きているのか理解できないでいた。そんなアテナを見たクリスは自分が行った事をそのままアテナにトークで伝えた。

（実戦でよくそんな無茶な事考えつくなあ…）

（あはは…もしかしたらできるんじゃないかな…って…）

（あたしもやってみるね！）

クリスは吸収できる事を悟られないように、わざとシュートを乱射しシモンのシュートを誘う。案の定、敵は誘いに応じた。もはや最大の防御術のきっかけを与えているなどは夢にも思っていないだろう。

アテナもクリス並みに魔法の才能があり、クリスに言われた通りに順序よくシモンのシュートを記憶、そして吸収する事ができた。これでクリスとアテナにはシュートは通用しなくなった。むしろ、シモンがシュートを打てば打つほど2人の魔力の絶対値が上がるだけで、敵にとっては不利になるだけである。得意気な顔になったアテナはシモンを挑発する。

「そんだけ打って一発も当てれないなんて…かつこ悪いと思うよシモン？」

「そんな大口を叩けるのも今のうちですよ！まぐれで避け続けられるものですか！」

まるで道化である。まんまとアテナの誘いに乗り、シモンはシュートを打ち続ける。もはや笑いを堪え切れないほどにニヤニヤしているアテナと、それを見ながら誘い笑いしてしまうクリスは余裕すら

感じられる。

「シモン！やめろ！」

サタンが異変に気付いたようで、シモンを制止させた。

「え〜…やめちゃうの〜？今危なかったのに…」

「わかりやすい演技が仇になったな…」

お前らの魔力の絶対値を見れば…」

サタンの言葉を遮るように轟音と共に、爆発が起きた。

油断していたサタンとシモンはまともに爆発に巻き込まれ吹き飛んだ。

なんと、アテナは2人に気付かれないように吸収したシモンの魔力を利用し密かに魔力を圧縮させていたのだった。授業では失敗と言われた魔法、コンプレクスボムを発動させ隙を突いて放ったのである。

「本当にドッカーンだったね…」

「なにもあのタイミングで投げなくても…」

少し、サタンに同情したクリスだったが、すぐに気持ちを切り替え戦闘に集中し始めた。

## サタンの実力

アテナの不意打ちをまともに受けてしまったサタンとシモンは予想以上にダメージが大きかったらしく、肩を大きく揺らしながら息が荒い。しかし怒りを露にさせ今にも飛び掛つてきそうな表情で2人を睨み付けている。

サタンは魔力を開放しエンボディを発動させる。サタンの目の前に大鎌が出現したのだ。かなりの重量感と斬られれば骨ごともっていかれそうなほどに鋭さが伝わってくる。

シモンも同じようにエンボディを発動させる。剣と呼ぶには細く、斬る事はできなさそうだがその形状は突く事に特化したかのように先端が尖っている。『エストック』と呼ばれる形状である。

シユートによる攻撃はもう2人には通用しないと判断したサタンとシモンは接近戦で確実に殺しにくる気だ。いくら魔力を記憶しコレクトで回収できるとは言え、斬られたり突かれれば傷を負う。瞬間的にコレクトを発動させる事ができれば回避できるが、まだ未熟な2人にはそんな高度な技術はない。

「回収できるものならしてみろ…」

「できればの話ですけどね…」

クリスとアテナは動揺している。確かに受け止めることができればコレクトで回収できるかもしれない。しかし無事に受け止められる保障はないし、武器を受け止めたところでシユートを打ってくるかもしれない。回収するには集中力が必要であり様々な判断が必要になる接近戦では、コレクトを発動できる暇などないとすぐに理解できたからだ。

なにか考えを思いつかせる前に、サタンとシモンは武器を構え襲い掛かってきた。クリスに時間を与えれば先ほどのシユートを吸収

すると言った突発的な考えで打開されてしまいかもしれないと判断したからだ。しかし、余裕がないと思われる2人の表情はすぐに二ヤけた顔に変わる。こんな状況で笑みを浮かべるなど…既に方法を考え付いてるとしか思えない。

「そこ…危ないよ…？」

アテナの言葉と同時にサタンとシモンの足元から轟音が響き渡り、爆発が巻き起こった。何事かと理解する間もなく再び2人は吹き飛ばされた。

「クリスもひどい事考えつくよね…」

「ええ…！だってまさか走ってくると思わなかったし…」

先ほど、アテナが放ったコンプレスポムでサタンとシモンの視界が奪われた瞬間にクリスも同様にコンプレスポムを発動させており、さらにコンプレスポムのイメージを改変し透過をさせたのだ。気付かれないように放ったのだがすでに吹き飛んでいた2人には当たらず、偶然にも進路方向にまるで地雷のように設置されていたのだ。

コンプレスポムは魔力に反応しぶつかると圧縮された魔力が飛散し爆発が巻き起こる性質がある。なんの魔力も持たないものに対しては爆発は起こらず、地面に放てば地雷のように使えるのだ。

2度目の不意打ちとも呼べる爆発でサタンとシモンのダメージは目に見えて大きい。もはや戦える状態では無い事が伺える。

コンプレスポムを2回も発動し、爆発させたのに救援にくるサンタはいない。これだけ派手な戦いをしているのに一体なにをしているのだらう。クリスはちらっと集落の方を見る。相変わらず歩いているサンタおらず集落は静けさを醸し出している。しかし、巡回しているサンタの姿は確認できないが…よく目を凝らすと集落のあち

こちらで戦闘による魔力の衝突が見られる。

一体今集落でなにが起きているのだろうか…

「アテナ…集落の様子がおかしいよ」

「あたしもさつきから気になってたんだよね…」

「ふふふ…」

2人の会話を聞いていたのだろうか、突如サタンは不適な笑みを浮かべる。

「今頃気付いたか…すでに集落は俺らの本当の仲間達が攻撃を仕掛けている事に…」

「サタンの本当の仲間…？」

「俺の本当の目的を教えてやる…貴様ら赤の派閥の集落に潜入し…攻撃する隙を作り出す事…」

「ついでに、俺らにとって今後…脅威となる若い才能の芽を刈り取る、または黒化させる事…」

「サタン…あんたって人は…！」

「姑息だとしても言いたいのかアテナ…？勘違いするな…これは俺らも生きる為の手段…」

「派閥を守る為の正義なのだ…」

「そんな事って…」

「解せぬかクリス…だが、世の中にはしたくなくてもしなくてはならない事もある…」

「貴様らも…姑息な手段を俺らに…」

「サタン…今のは罠とかじゃなくて…偶然…」

「コンプレスボムの事じゃないクリス！察せよ！俺が言いたい事察せよ！」

「なにがあつたの…サタンに…」

「そんな聞き方されたら…すっげー言い辛い！なんか同情してくれ！って言ってるみたいだし！」

「アテナ…なんかサタン…怒っちゃったみたい…」

「あのね…クリス…サタンが言いたいのはきつと…こんな感じでサタンの故郷も」

あたし達の派閥の誰かが襲ったって事だよ…」

「ええ！そんな事あつたの？」

「いや…あたしの勘だけどね…？」

「そういう事だ…だから俺のやってる事は……兎に角だ！

お前ら2人は脅威となると俺は判断した…よってこの場で刈り取る！」

「そんなボロボロな体で言われても…説得力もなにも…」

「コンプレスボムすらも応用し…そして、シュートを回収する防御術…」

脅威以外の何者でもない！もう手加減はしない…！」

「だから…あれは罠とかじゃなくて…偶然…」

「クリス…狙ったって事にしておいてあげよ…？サタン泣きそうだし…」

「もー！あつたまきた！お前ら2人生かしておけん！立てシモン！

俺ら黒の派閥だけが使える魔法を見せ付けて…シモン？」

シモンは2度目の爆発によりそれが致命傷となったらしく、立つ事もできぬほどにダメージを負っていた。

「ふふふ…本当に俺を怒らせてしまったようだな…覚悟しろよ…」



サタンが戦う意味を知った2人は同情にも似た感情を覚えるが、サタンの魔力は更に殺意が沸き起こり黒い魔力のオーラが充実している。邪悪な魔力の質は一瞬にして場の空気を緊張させた。

今までの手加減：その言葉は冗談ではなく紛れも無い真実。サタンの本当の実力をこれから身をもって味わう事になる。

「んでもさ…アテナ…？」

「ん…？なに？クリス…」

「今までの手加減って言うてたけど…サタンなにもしてない？」

「ばっ…バカクリス！そんな事言ったらサタン余計怒って…」

「殺す！！！！」

鬼のような形相に変わったサタンは、邪悪でどす黒いオーラを更に開放させた。魔力の差は歴然であり、2人の魔力ではあらゆる攻撃も通用するとは思えないほどの力を差を感じる。サタンの目の色は真っ赤に染まりそれはまるで悪魔のような姿であった。

背中からは羽根が生え、腰からは太い尻尾のようなものが生え、指先からはそこらの剣よりも鋭く、全てを切り裂けそうな鉤爪が生え、口元には鋭そうな牙が生えている。もうサンタである面影はどこにも残ってはいなかった。

「消し炭になっても許さん…貴様らが生きていた証拠など…何一つ残さん！」

圧倒的なスピードでサタンは襲い掛かってきた。すぐに気持ち切り替えた2人は魔力を開放し自分の周りを硬化させたオーラで覆う…が、まるで意味はなくサタンの鋭い鉤爪がまるで硬化させたオーラも紙くず同然に切り裂き、無意識にガードした腕を引き裂

きその強大な力は2人の体を吹き飛ばした。

幸いな事に急所は避けたものの、深い傷を負ってしまった2人の腕から鮮血が止まらない。痛いなどという感覚は通り越し、傷口からまるで体が凍りつくかのような寒気が襲い掛かってくる。2人に反撃などさせる暇を与えないと主張するかのように、サタンは目に留まったクリスに更に追撃をかける。

万事休す…あの強力な攻撃を防ぐ手段はなにもない。だが、クリスは瞬時に作り出したコンプレスボムをサタンに放つ。十分に圧縮する時間がなかったため、先ほどよりも小規模な爆発になったがなんとか命中しサタンの動きは止まった。

爆発による煙は徐々に晴れ、サタンの体が見えてくる…次の瞬間、クリスの表情は絶望的なもの変わった。十分な威力を持たせる事はできなかつたとは言え、コンプレスボムをともに食らったはずのサタンの体には傷一つついてはいない。クリスと同様にそれを見ていたアテナの表情も驚きと同時に恐怖に包まれた。

なんとかシモンに致命傷を与える事ができたコンプレスボムも通用しない…他に考え付く限り最善の攻撃手段が見つからない…本来ならばすぐに立ち上がり、次の攻撃の準備をしなければならいのだが…サタンの強さを痛感した2人はそんな事も忘れ呆然としている。

「潔いようだな…今楽にしてやる…」

サタンはゆっくりと腕を振り上げ、クリスの首筋を狙い勢いよく振り下ろした…

咄嗟に目を背けたアテナはあの状態がクリスが助かるはずがないと確信し、友の死を受け入れたかのように涙を流した。

だが、そんなアテナの耳に大きな金属音を響いた。何事かとアテナは再びクリスの方を見る。

「真のヒーローとは……ヒロインがピンチになったときに…  
現れるものだ…我ながら美しい登場だな…」

中二病のような言葉をつぶやき、サタンの鉤爪を、おそらくエンボ  
デイで作りに出した巨大な大剣『ツーハンデッドソード』で必死に受  
け止めている。光に照らされ、彼の鮮やかな金色の髪は、サタンの  
黒さと背反し美しさを強調するかのよう輝いている。

「誰かと思えば…」

「サタン…見ない間に…随分変わったな…イメチェンか…？」

必死にサタンの攻撃を受け止めるヤコブ。絶望感に打ちひしがれて  
いたクリスとアテナはすぐに立ち上がった。更に金属音が響き、ヤ  
コブはそのままの体制で後ろに飛ばされるがなんとか踏み留まった。  
すかさずクリスとアテナが駆け寄る。

「ヤコブ！」

「今の登場！キョンキョンした！」

「2人とも…無事でよかった…とりあえず…止血したほうがいい」

「ヤコブ…体は平気なの…？」

「俺よりもボロボロになってるクリスに言われたくないな…もう  
大丈夫だ…」

「あつ…あたしもボロボロなんですけどー！」

「アテナも平気か…？あのサタンの姿は一体…」

「後で説明するよ…ヤコブ…ありがとう…私もうだめかと…」

「それはサタンをなんとかしてから言ってくれ…くるぞ！」

ヤコブの言葉と同時にサタンは再び3人に向かって猛スピードで直  
進してきた。ヤコブは走りだし、大剣を構えて迎撃する態勢を作る。

その間にクリスとアテナは、アテナの帽子を引き裂きサタンに切られた腕の止血をする。気のせい程度だが流血が止まったように見える。2人もヤコブを見習いエンボディを発動させそれぞれの武器を具現化させた。

クリスはある強力な鉤爪を弾けるような強度と片手でも扱えるように軽く、扱いやすいイメージを固めた剣を具現化させた。振り抜く力がなくても肉を切り裂けるように刃を波打たせる事で、簡単に斬る事ができる『フランベルジェ』と呼ばれる形である。

アテナも同様に剣を具現化させた。イメージはサタンの鉤爪。あの形状ならば例え防御されてもかわして攻撃を行える。極端に湾曲させれば当たる可能性も高いと考えたのだった。『ショーテル』と呼ばれる形である。

コンプレクスボムが通用しないのに、今更具現化させた剣も通用するはずがないと思えたが、接近戦でなにもできないよりはマシだと考え、各々の武器を構えた2人はヤコブに続いて走りだす。もちろんヤコブとは違い、2人の剣は具現化させる間にイメージの改変をし、追加効果を持たせた剣である。イメージ力が強ければ強いほどその追加効果も真の効果が得られ、接近戦で魔法を使いながら戦うよりも効率は格段にあがるのだ。

サタンの攻撃を受け止めるだけで精一杯のヤコブ。しかし両手じやなければ扱えないほどの重さのツーハンドソードじゃなければ受け止める事も不可能とも思えるサタンの強力な一撃。何も考えていないようなヤコブだが、場に合わせて必要なものを作り出すというサタンの基礎はしっかりと身についているようだ。

鉤爪だけではなく尻尾や羽根を使いヤコブを翻弄するサタン。魔力も力もスピードも圧倒的な差がある為、掠ったりその風圧だけでヤコブの体に傷が重なっていく。だが、それに怯む事なく隙ができれば迷わず反撃に移る。見た目よりも重い剣である為その威力はサタンですら回避しなければならぬと思わせる。

まさかの善戦をしているヤコブに続いてクリスとアテナもサタンの死角から攻撃を開始した。だが2人の力は弱い為、羽根を大きく飛ばたかただけでその風圧で簡単に弾き飛ばされてしまう。だが3対1という状況を有利に働かせあらゆる方向からの攻撃を受けているサタンは表情を歪ませ、先ほどの余裕は感じられない。まさに袋叩きという状態である。

やはりサタンが一番警戒しているのはヤコブの一撃であり自分の攻撃を受け止め、たまに弾き返すほどの威力は意識をヤコブに集中させる。クリスとアテナの剣はそれほど問題はないという錯覚を産み出した。それがサタンの誤算であったのだ。

反応が遅れ、アテナのショーテルをかわしきれないと判断したサタンは止むを得ず腕で体を守るようにガードの姿勢を作りショーテルを受けた瞬間、アテナのショーテルは眩い光を放ったのだ。突如放たれた眩しい光まるでレーザーのようにサタンの目に直接飛び込んできた。視界が一時的に奪われたサタンは全ての反応を遅らせた。サタンの動きが光により中断させられ巨大な隙が生じた、その瞬間を3人が見逃すはずもなくサタンは3人の斬撃をまともに浴びてしまう事になった。

## 黒化

サタンはたまらず大きく羽根を羽ばたかせ上空へ舞った。思いの外3人の斬撃は深かったらしく、ポタポタと傷口から真つ黒な血液が滴り落ちていく。そんなサタンを見逃すはずもなく、3人は一斉にシユートを放った。しかし、傷を負ったとはいえ魔力が落ちたわけではないサタンは簡単に魔力のオーラを硬化化し、いとも容易くシユートを受け止める。何事もなかったかのようにサタンは傷口に魔力を集中させ回復を図っている。

目の前で余裕そうに傷を治すサタンを見る3人の表情は暗い。魔法による攻撃も効かない。物理攻撃もすぐに治療させてしまう。もはや成す術なしか…と絶望感が再び襲い始める。もはや悪魔としか呼べない姿になったサタンは、未熟な3人では倒す事は不可能だと思えるほどに実力の差が激しい。サタンの魔力は一向に減った気配がなく、魔力を消費させるほどの致命傷も与えられない事から勝ち目が無い事も見えている。すぐに状況を理解しヤコブはクリスとアテナに騒音のような声を浴びせる。

「これは勝ち目がない！サタンは俺が引き付ける！2人は救援を呼んできてくれ！」

「ばっ…馬鹿な事言わないで！3人でも精一杯なのに…ヤコブ1人じゃ…」

「アテナの言う通りだよ…1人じゃ…」

「ここで3人仲良く殺されるよりはマシだろう…？」

「そっ…そうだけど…」

「それでも！ヤコブを見殺しになんてできるわけない…」

「他に方法はないだろう…アテナ…クリス…任せたぞ…」

ヤコブは剣をコレクトで回収し、再びエンボディを発動させる。

ヤコブが具現化させたのはソリだった。強引に2人をソリに放り投げ集落へ向けて押し出した。自走と浮遊機能がついているらしく、ソリは集落へ向かって真っ直ぐに飛行しながら走り出した。中々の速さで走っている為、クリスとアテナの叫び声はヤコブに届く間もなく遠くなっていく…

「懸命な判断だな… 上出来と言ってあげたいところだが…」

観察していたサタンは不適な笑みを浮かべる。

「お前1人で俺の相手が務まるとでも思っているのか…」

既に傷が完全に治ったらしく、サタンは上空からヤコブに向かって急降下する。ヤコブは残った魔力を振り絞るようにエンボデイを発動し、ツーハンドデッドソードを具現化させ構える。

まるで巨大な槌のようにサタンの尻尾がヤコブに叩きつけられる。反射的にツーハンドデッドソードで受け止めたのだが…他にエンボデイでソリを具現化させ魔力を消耗してしまった為、その強度は思ったよりも脆い。まるで爪楊枝のように簡単に真っ二つに裂かれた。致命的な隙が生まれ武器を失ってしまったヤコブの胸部にサタンの鋭い鉤爪が深々と突き刺さった…… 忽ち辺りはヤコブの鮮血で赤く染められていく。力無く、ヤコブはそのまま前のめりに倒れた。

「ふん…残り少ない魔力で俺の一撃を受け止めるとは…」

敵ながら天晴れ…だがな？このどうしようもない力の差はどうだ…

お前如きが時間を稼ぐなど… 思い上がりも甚だしい…」

サタンの言葉が耳に届いているのかはわからない…しかし、ヤコブはまだ事切れたわけではなく体を大きく揺らして呼吸はしているよ

うだ。もはや喋れる体力や気力はなくなっているようだが…

「そこに倒れているシモンよりは…かなり使えるだろうな…

このままお前を殺すのは惜しい…お前の勇気に免じて

お前の策に乗ってやろう…これで時間稼ぎが出来てよかったな

…?」

サタンは何かの魔法の詠唱を始めている。

「ま…代償として…お前は俺らの仲間になるがな…

さあ…生まれ変われ!ブラックアウト!!」

魔法：ブラックアウト

黒の派閥のサンタだけが使える変異魔法。

対象のサンタの負の感情を支配し、増幅させ具現化する。

具現化された負の感情は対象の衣服を覆い、真っ黒な衣装へと変わる。

ブラックアウトを受けたサンタは理性を失い、発動者の奴隷へと変わるが

自我や元の魔力が大きかった場合、完全な奴隷にはならない。

サタンのブラックアウトを受けたヤコブは苦しみだした。まるで  
体中をなにかがた打ち回っているかのような激しい痛みと、自分



の感情ではない何かが脳を支配していくかのような不快感に包まれていく。ヤコブの体内から黒い霧のようなものが噴出し体を覆っていく。

「本来ならば…徐々に慣らしていく魔法なのだが…俺を傷つけた罰だ…苦しみながら黒化するがいい…」

サタンは更に魔力を増幅させ仕上げの段階へと入る。ヤコブの絶叫が辺りに響き渡る。戦闘からだいぶ時間が経った為、重症を負ったシモンもある程度回復しその場にゆっくりと近づいてきた。

「サタン…面目ないです…」

「お前にしてはよくやった…俺の期待以上だった…」

「ありがとうございます…この失態は必ずどこかで…」

「…が、お前はもう用済みだ…」

「え…?」

「消えろ…」

シモンに理解する暇など与える間もなく、サタンはシモンの顔に掌を押し当て直接シュートを放った。軽い爆発と煙が立ちこめシモンはそのまま仰向けに倒れる…が、シモンの顔は跡形も無く吹き飛んでいた。倒れると同時にシモンの体から魔力の粒子が漏れ始めた事から即死だったのがわかる。

サタンは何事もなかったかのように立ち上がったヤコブを見つめている。

「ようこそ！黒の派閥へ…」

「サタン…貴様…ゆるせ…」

「ほお…まだ自我が残っているとはな…ま…一時的なものだろう…お前の命に免じて、逃がした2人の命は今は見逃してやる…」

「き…さま……………」

「お前を黒化させる為に少々…魔力を使い、疲れた…」

「ここは一度引くぞ…あのソリを回収しておけ…いくぞ…」

「くっ…………くそ……………」

言葉とは裏腹にヤコブの体はサタンの言葉を遵守するように遠方に飛ばしたソリへ向けてコレクトを発動させている。黒化する事で魔力が桁違いに上昇した為、応用技術も造作もないほどに発動する事が可能になっているのだ。

「そうだ…このシモンの魔力も食っておけ…ないよりはマシだ…」

俺は共食いは好かん…お前は遠慮なく食えよ…？」

ソリを回収したヤコブは言われるがままに、シモンの遺体にコレクトを発動させる。一瞬にしてシモンの痕跡はなくなり、跡形も無くそこには何かが横たわっていたという跡だけが残った。サタンの言うようにヤコブはまだ自我が残っている為か、目からは涙が滴り落ちていく。敵だとわかる前は友として一緒に魔法の技術を学んだり、休日には一緒にお茶を飲んだりした記憶が沸き起こっているのだ。

「ベテランのサンタが来る前に引くぞ…ソリを出せ…」

まるでロボットのようにはヤコブの意思を無視し体はサタンの言う通りに動く、悔しさや悲しさや怒りの感情が今にも爆発しそうな表情になっているヤコブ。サタンはそんなヤコブの気持ちを知ってかあざ笑うような笑みを浮かべている。

強大な魔力を悟られないよう悪魔の姿から再び黒いサンタへと姿を変え、ヤコブが具現化したソリに乗り込んだ。ヤコブも同様にソリに乗り込みソリはゆっくりと浮遊し始める。

（今は見逃してやろう…だが…次…見たときはワシも容赦せんぞ…）

サタンにトークで誰かが話しかけてきた。

（本来は貴様の命も頂くはずだったのだがな…）

（ほっほっほ…お主の計画は初めからわかっておった…）

お主はずっとワシの掌の上で踊っていた事を忘れるな…）

（ふん…次はイブで会おう…村長さんよ…いや…ゲーラス老と呼ぶべきか…？）

（どっちでも構わんよ…イブまでオイタはするんじゃないぞ…小僧…）

（怖い怖い…ゲーラス老の怒りを買う前に退散させてもらおう…）

トークでの会話を早々と切り上げ、サタンとヤコブはそのまま猛スピードで雪原へと消えていった。同時に集落を襲っていた黒の集団もポツポツと退散を始め、集落から戦闘による魔力の衝突は完全に消えた。

一夜にして集落を混乱に貶めたサタンの計画は後に長老から集落の全員に伝えられ、二度と黒の派閥が偽装し、潜伏しないように細心の注意を払うように言い聞かされた。偽装したサンタを見抜く方法は非常に難しく、長老クラスになってやっとわかる程度である。しかし、サタンが黒の派閥だとわかっていながらもそのまま好き勝手に放って置いた長老の考えは誰にも理解できず一時、長老を別のサンタに指名しようなどと厳しい意見も飛び交ったのだが…結果としてこの事件は後々に、この集落にとっては大きな進歩とも呼べるほど重要な事柄だったと記憶される事になる。

以後、毎年11月28日はイブの決戦に備え、実戦を想定した訓練をする日に設定された。若い2名のサンタの命を奪ったサタンを

決して許さず、忘れないように』『サタンの日』と呼ばれるようにな  
ったのであった。

## 事件の副産物

場面は少し前に戻る…。

ヤコブが具現化したソリが突如消えた為、乗っていたクリスとアテナは地面に叩きつけられた。それほど高度はなかった為か強い衝撃にはならなかったのが救いであった。一刻も早く、救援を呼び丘へ向かわなければヤコブの死が高い確率で付きまとう為、落ちた衝撃も気にせず2人は叫びながらベテランのサンタを探している。しかし、集落ではあちこちで黒の集団による襲撃を受けている為か2人の呼びかけに応じれるほど余裕を持ったサンタはいないようである。

明らかにサタンやシモン以上に強い魔力を持つ戦闘に長けた敵が襲撃していると思われる。迂闊に大声を出せば自分らが標的になる可能性もあるのだが、それでも構わずに2人は手の空いているベテランのサンタを探す。

突如ソリが消えた事から、明らかにヤコブの身に何かがあった事は理解している。死亡してしまうとエンボデイで作り出した物体も消えてしまい、その者の魔力の欠片すらも消える。その事もなんとなくわかつているクリスは青ざめた表情になっているが…アテナは必死にクリスを励まし、前向きに考えるように諭しながら行動している。

徐々に周りから魔力の衝突の気配が薄れていく。優勢なのか劣勢なのかもわからない状況だが、黒の集団の魔力が遠ざかっていく事を感じ、おそらくは集落のサンタ達が押し返していると理解できた。やっと2人はベテランのサンタの1人を発見し、事情を説明しながら丘へ向かって一緒に走り出した。

「先ほどの丘での衝突は君達だったのか…」

「そんな事よりも急がないとヤコブが…」  
「ああ…これ以上若いサンタの犠牲は避けねばな！」

ベテランのサンタは瞬時にソリを作り出し2人を乗せて上空へ飛んだ。いつエンボディを発動させたかもわからないくらい速く、3人が乗ってもまだ余裕があるほど広く、かなりのスピードで丘へ走っても風が不快にならないほどの魔力で覆われている。明らかに自分達よりも魔力の質は格段に上。この人ならばサタンに勝てるかもしれないと感じ、クリスとアテナは表情を緩ませた。

徒歩ならば数時間かかるところを、ベテランのサンタのソリで数十秒で到着する事が出来た。クリスとアテナは戦っていたあたりへ走り出すのが既にサタンもヤコブもシモンも見つからない。うっすらとサタンとヤコブの魔痕は感じたのだが肝心な姿が見つからない。一体これはどういう事なのか…理解する事など出来るはずもなく呆然としている。

ベテランのサンタはソリを回収し魔痕を調べている。眉間に深いしわが刻まれている表情から察するに良くない事が起きたという事はわかる。

「あの…ヤコブはどこ…」  
「無事なんだよね…？ヤコブは生きてるよね…？」

自分自身に言い聞かせるようにベテランのサンタに各々の思いをぶつける。

「一体…ここで何と戦っていたんだ…？」

予想外の言葉に、クリスとアテナの目が点になる。

「何って…サタンと戦ってただけ…？」

「サタンだよ！あいつ…元々黒のサンタで…」

「この魔痕は…サンタなんてもんじゃない…これは…魔獣のものだ…」

「魔獣？」

「まじゆー??」

「知らないのも無理はない…魔獣ってのは…サンタがエンボディで作り出した生物だ…」

「え…？」

「残念ながら…ヤコブ君は…黒化してしまったようだな…」

「黒化…??って…まさか…」

「ヤコブが黒化…?嘘でしょ…」

「黒のサンタだけが使える魔法がある…私達を黒化させる魔法だ…おそらくはそれで…」

「嘘でしょ！そんな冗談…」

「クリス！落ち着いて…黒化って事は一応は無事って事だし…」

「ああ…死んではいけない…ヤコブ君は無事だよ…生きてる！」

「でも黒化したってことは…ロキとか…シモンとか…あんな感じで…」

「クリス…」

「素直に喜べないが…無理やり黒化させられたのならば…元に戻す方法はある」

「え…？」

「そんな方法が…？」

「純粋な正の心を食べさせれば…元に戻る場合もある」

「正の心…」

「それって…外界での食事って事だよな…？」

「その通り！正の心を一時的に保存する事が出来る箱もある…」

「長老ならば…持つてるかもしれない」

「長老が…？」

「私も見た事はないがな…さあ…いつまでもここに居る訳には行かないだろ？」

「会合所へ戻ろう」

「ヤコブ…あれ？なんでシモンの魔痕がないの…？」

「そういえば…！シモンの魔痕が…」

「シモン君は…おそらく…」

「死……？」

「そうとしか思えない…全く感じられない…おそらくはコレクトで回収されているな」

「回収って…」

「許されない事だ…死んだサンタを回収するなんて…」

知り合いが死んだという事実を突きつけられたアテナは会話が終わる前に泣き崩れだした。クリスもつられてもらい泣きしてしまう。2人の事情を察したベテランのサンタは優しくソリに乗せて会合所まで運んでいった。

目の周りを真っ赤にしたクリスとアテナは、会合所でこの事件の発端や結末を話した。なぜか長老も全てわかっていたらしく、言葉が詰まった2人の代わりに代弁してくれた。このような事件が起きる前に事前に防ぐ事も出来たのではないかと、ベテランのサンタは長老に罵声を浴びせクリスやアテナも長老を攻め立てた。しかし…

「ほっほっほ…ワシが全て悪いのならば…それはそれでよし…」

二度とこのような事が起きぬよう…みな気をつけるのじゃぞ…」

…と独特な長老の口調は、全員の怒りを吸い込むかのように場を瞬間にして朗らかな空気にさせた。

戦闘は授業で戦闘用の初期魔法を習うだけで実戦の経験が少ないサンタも多い為、今回の事件で黒の集団に襲撃された時も連携など



取れるはずもなく序盤は一方的に攻め込まれていたようである。幸いな事に死者はサタンが殺した2人だけに留まったのだが、もしかすればもっと多くの死者が出ていたかもしれない…それほど経験不足という問題は無視できない重大な事柄であると全員が感じていたのだ。そこで、毎年11月28日は集落で戦える者は全員強制参加で、実戦の演習を開始する事に決定したのだった。

戦闘に対して否定的なクリスも、この経験で時には戦わなければならぬ事も痛感しその案には賛成だったようだ。同時にもっと戦闘の技術を身に付け皆の役に立ちたい…1人でも多くの仲間を守りたい…という考えに至り、翌日からアテナと共にシヨットの練習をする事を決意した。

アテナも今回の事件で自分の非力さを痛感しクリスと共に精進する事を決意し、まずはシヨットを完璧に使いこなせるように練習する事を約束した。高等教育で特に仲が良いと呼べるサタン、シモン、ヤコブがいなくなり寂しさもあるが決してサタンを許さないという頑なな意志は、アテナの向上心を更に飛躍的に高めた。

「修練に勤しむのは結構だが…高等教育を卒業してからにしろ…」  
高等教育の先生が現れ2人に水を差す。クリスとアテナは苦笑しながら頷き今日そのまま家路へと向かった。

集落の家屋は激しい攻防戦によりところどころ崩壊していたが、よく見れば徐々に自動修復されている。サンタにしては珍しく、天然の木材や石材で作られていると思われた家屋だったのだが、やはり誰かのエンボディにより作られた家屋だったと理解できた。しかも、崩壊している全ての家屋が同じタイミングで同じ速さで修繕されている事から、同じ人物によるエンボディで具現化されたものだとわかる。これほどの数の家屋を具現化させる事が出来る人物…おそらくは長老だろうか…とクリスはぼあ…っとしながら思いに耽っている。

今日の疲れ方は今までの非にならず、まだ太陽が沈むには早い時間ではあるがクリスは自宅につくとそのままベッドへ倒れた。

「痛っ…」

クリスは思わぬ痛さに飛び起きる。つい先ほどサタンに斬られた腕の傷の事もすっかり忘れてしまっていたようだ。止血の為にアテナの帽子を引き裂き腕に巻いていた為、今では血はすっかり止まっているが、傷口はまだ開いたままのようである。よく傷口を見ると少し布団に擦れただけですぐに出血が始まってしまいそんなほど傷は深いらしい。クリスは困った顔をしていたが、すぐに自宅を後にし治療を受けるべく診療所へと歩き出した。

診療所では治療魔法を使えるサンタが次々と傷ついたサンタを治していく。症状によって様々な魔法を使い分けているようだが、基本的には自己治癒能力を活性化させる事で傷口や骨折などを治す魔法を多用しているようである。治療魔法の精度が高いほど治りも早く傷跡も残らないようである。しかし、病気や毒を浴びたとなるといくら治療魔法でも回復させる事が出来ず、川辺に生えている苔や蛙等の生物を材料にした治療薬を作るらしい。

この事件で案の定、診療所は行列を作り治療を受けるものが列を作っていた。さすがに一刻を争うほどの怪我をしたものはすぐに治療を受けたいらしいが、クリスもその列に並び順番待ちをしている。

（そういえばアテナも怪我してたような…）

サタンの鉤爪による斬撃を同時に受けた場面をすぐに思い出す。診療所とアテナの家の方角はやや異なり、先ほど一緒に帰路に着いたときアテナは真っ直ぐ自宅へ戻っていた事もすぐに思い出した。

（アテナも連れてこよう…）

クリスは列を抜け、人が空けた場所でエンボディを発動しソリを具現化させた。歩くよりも早いし、なによりもアテナの傷が心配で早く迎えに行きたいと思ったからだ。今回のソリは浮遊機能をつけたものであり上空から直線的にアテナの家へ向かえる為、町の中を滑るよりかは早く到着する。先ほどのベテランサンタのソリをちやっかり観察し、浮遊する感覚もイメージも固定する事が出来た為すんなり具現化できたのだ。

数秒でアテナの家の前に到着し、クリスは呼び鈴を鳴らすがアテナは出てこない。不在なのだろうかと思っただが、明らかに家の中からアテナの魔力を感じる事が出来る為、クリスはドアを開けてズカズカと中へ入っていった。

「アテナー…？診療所いこー？」  
「わっ！びつくりした！クリス…？」

突然のクリスの来訪にアテナはびつくりして椅子から転げ落ちた。

「あ…ごめん…びつくりさせちゃって…」  
「ううん…へーきへーき！」  
「腕…治療しにいこ…？」  
「うん！あたしもそー思っついこーと思っただけぞぞ…  
めっっちゃ並んでるじゃない？だから…これ！」

アテナは薄い本をクリスに見せた。本題には『治療魔法の基礎』と書かれている。

「アテナなんでそんな本持つてるの？」  
「えへへ…さっき会合所出るときにさ？拾った！」

「え〜！アテナずるいよ〜！私にも見せて〜！」

「ま〜バレちゃったから仕方ないな〜…」

ほんとは覚えてからクリスをびっくりさせてあげよーと思った  
んだけど〜」

「え…」

「あ…大丈夫大丈夫！さっきからこれ読んでるんだけど…」

チンプンカンプンでさ…無理っばいし…だからさ…？一緒に読  
もう！」

「うん…なんかごめん…」

「あはは！気にしないで！あたし独学とかそういうの苦手だし…」

一緒に覚えるに越した事ないじゃん？」

「うん！そうだね…！」

クリスはアテナの隣にエンボデイで作り出した椅子を置き、一緒に  
『治療魔法の基礎』を読み始めた。浮遊能力付きのソリを回収する  
事もすっかり忘れていたのだが、それでもエンボデイの精度は下が  
らず完璧な椅子を具現化できたのだ。先ほどの戦闘で格段に魔力の  
質を上げたという事がわかる。よくみればアテナが使っている椅子  
も机もアテナの魔力を感じる事から彼女がエンボデイで作り出した  
ものだとわかる。アテナもクリス同様に魔力が格段に上昇した事が  
わかった。

「…どう？難しくないこれ…」

「なんかリスニングを応用するって事はわかったけど…」

「あとトークもだよ…？傷口に魔力を注ぐって事でしょ？」

「うんうん…あ〜わかった！アテナ…ここの行見て」

「ん…？自己治療能力を高めさせ…ってところ？」

「うん！そういうイメージで魔力を注ぐんだよきつと！」

「エンボデイ使うのかな？」

「違うよ…シユートの要領で変化させるんだよ…」

「な・る・ほ・どー！変化させるのか！」

「自信ないけどね…とりあえずやってみよー？」

「そだね！あたしもクリスも怪我してるし…何回でもチャレンジできるね！」

それから数時間、外はすっかり日が暮れランプをつけなければ室内は真っ暗になるほど時間が経った。2人は何度も何度も挑戦し、なんとかコツを掴んだようだ。2人の傷口は完治とは言えないが明らかに塞がりかけている。書物からのヒントを独自に解釈した2人は間違っではいなかったようである。

「やっぱ難しいね…うまくいかないや…」

「でもアテナ？傷口よく見て？ちゃんと治ってるよ！」

「そうだけど…これじゃ治ったとは言えないよ…」

「うん…一日じゃ無理だと思うけど…何回も練習すれば…」

「そだね！この魔法…戦闘の時に使えばすっごい役に立つと思  
うし…！」

「うんうん！攻撃魔法なんかより絶対大事だつて！」

「ほんとそれ！つてか…クリス？もう外真っ暗だけど…」

「あ！ほんとだ！すっかりこんな時間になってる…帰らなきゃ…」

「泊まっつていったら？」

「え？いいの？」

「全然おっけえ〜だよ？クリスは女の子だし」

「え？女だと大丈夫なの？」

「ほっつんと…クリスつて初心なんだね…男は怖いんだよ？」

「なんだかよくわからないけど…じゃ〜甘えちゃおっかな〜？」

「おうよ！自分の家だと思っつて寛ぎたまえ〜」

すっかり遅い時間になってしまった為、クリスはアテナの家に泊まる事にした。それほど2人は心を許せるほど仲が良くなり、親友と

も呼べる関係になっっているのだ。一緒にお風呂に入ったり一緒の布団で寝るのはクリスにとってもアテナにとっても初めての事であり、2人が寝静まるまでアテナの家は2人の笑い声が絶えなかったようだ。

完璧とは言えないが、治療魔法の基礎をしつかりと習得する事が出来た。自己治療能力は活動しているときよりも就寝している時のほうが活発である。翌朝になるとすっかり2人の傷口は完治していたのだった。

## 魔法：リジエネーション

### 基本治療魔法。

対象の自己治療能力を活発化させ、患部を早く治療する事ができる。リスニング、トーク、アラムを応用する事で使用が可能。

あくまで対象の肉体的な強さ依存な為

治り方は人それぞれである。

しかし、リジエネーションを応用したり精度が上がれば

万人共通して安定した治療が可能になる。

## 他所の集落

(僕がない間…そんな事が…)

(残念な事じゃがの…ワシの不幸で犠牲者も出してしまった…)

(村長…クリスは無事なんですか?)

(クリスもアテナも元気でやっておる…その一件以来2人の進歩は凄まじい…)

もうお主が集落にいた頃よりも魔力も質も上じやよ…)

(ははは…やっぱりクリスの才能はすごいな…アテナも元氣そうで…)

(そろそろ戻ってきてはどうじゃ?誰もお主を攻める者はおらん…)

(いえ…まだ探し物も見つかってませんし…)

(あれはそう簡単に見つかるものではない…)

まだ未熟なお主には一生かかっても無理かもしれん…)

(でっ…ですが…僕はどうしてもあれを探し出さないと…)

(お主の言いたい事はわかっておる…それがお主の使命だという事も…)

(そこまでわかっているのですから…)

(ふむ…やはり気持ちは変わらんようじゃの…じゃが…無理はしちゃいかん…)

疲れたらいつでも帰っておいで…)

(はい…)

(お主と同じものをアレスも探しておるようじゃ…)

もし見かけたら共に行動するとい…)

(やはり…アレスさんも…)

(うむ…イブまでには帰るのじゃぞ…)

(はい…それはわかっています…イブまでには必ず帰ります…)

(それから…ブラックサンタには充分に気をつけるのじゃぞ…)

お主の戦闘技術はまだまだ未熟じゃからのお…)

(わかっていきます…なるべく戦闘は避けていきますので…)

(それならば良いのじゃがの…これ以上のトークはみなに悟られる…)

体には充分に気をつけるのじゃぞ…クラウドス)

(はい…気をつけます…お気遣いありがとうございます)

エンボディで作った簡易的な小屋の中でクラウドスは村長とトークで会話を終えた。集落を出るときにもってきたカレンダーの日付は12月1日と表示されている。まだイブまでは一ヶ月近く残っているのだが、いよいよ同じ月になったという事で彼も緊張を隠しきれていない様子である。

彼が集落を出た理由はロキに深い闇を抱え込ませた原因は自分にもあるという罪悪感からだと思われたのだが、実はクラウドスにはもう一つの理由があったのだ。村長とのトークでの会話でさらっと話題に出た『あれ』とは一体なんなのか…気になる点ではあるが、今月中には集落へ戻るらしい。

上等教育でクラウドスは一応サーチ以外は習得しており、あとはサーチを習得すれば卒業という段階までは進んでいたのだ。集落を出立するにあたり、村長は修練所で習得する予定の魔法の参考書と最低限習得しておかねばならない魔法、リジエネーション等の治癒魔法の参考書も渡していたのだった。

移動と休憩を繰り返しながらもクラウドスは一日も忘れる事なく、魔法の復習と参考書を見ながらの魔法の習得に励んでいたようである。すでに上等教育にいれば卒業をもらえるほどに魔力は向上し、サーチもスルーも完璧にマスターしているようだ。治癒魔法のリジエネーションに至っては、戦闘を避けるように行動している為かまだ使用したことはないらしく、発動する自信があっても治すべき怪我がない為、本人も習得できているかどうかはわからないようであ



る。

まだ集落を出てそれほど月日は経っていないのだが、既にあの頃の自分よりも魔力が進歩しているとの報告を受け、クラウスは改めてクリスの魔力の才能に感服しているようだ。同時に自分も負けてはいられないと意気込みを見せ、今日は一日魔法の修練に励むようである。クラウス自身まだ戦闘の経験はないがクラウスのシユートは当時の上等教育生の中では一番の破壊力を持っていた。どうやらクラウスは戦闘技術の才能に恵まれているらしいのだ。

引き止めはしたものの最終的にクラウスを集落から出る事を許可した村長もクラウスのその才能を評価していた為、無謀ではないと判断したのだった。

「しっかしすごいなあ…クリスはもう上等教育も卒業かあ…」

シヨットさえ習得できれば、サーチもスルーも基本的な魔法の応用技術な為、習得はそう難しくもない。参考書を読みながらとは言え、独学でも扱える代物なのである。

魔法：サーチ

住居などに侵入可能な出入口がない場合、壁や天井などをすり抜ける事ができる魔法。

自分の体の周りを物体を干渉させないオーラで覆う事ですり抜けが可能になる。

オーラの性質変化を素早く発動させる技術が必要となる。

但し、通り抜けられるものは魔力を持たない無機物に限る。

魔法：スルー

気配を殺し、限りなく目視不可能なレベルにまで体を透過させる事が出来る魔法。

サーチと同系統の魔法であり、応用する技術も一緒ではあるが透過の度合いは発動者の魔力の最大値に依存する為完全に透過できるレベルになるには苦勞を勞する。

透過はするが、実際には存在するため物をすり抜けたりする事は出来ない。

発動する際にはサーチと併用して使用するのが一般的である。

また、応用すればあらゆる魔法も透過する事が出来る為不意打ちが可能になる。

クリスはサタン達との戦闘でスルーを応用し

透明なコンプレスポムを偶発的に地雷のように扱った。

「アテナも元気そうでよかった…」

魔力を練りながら、少しは仲良かったアテナも無事との報告を受けクラウドは安心したように表情を緩ませる。クリスが集落に来る前は初等教育から一緒の同級生であり、共に魔法技術を競った事もある。クラウドはちよくちよく集落から外へ出て探し物をしていた為アテナとの魔力の差は一向に埋まらなかったが戦闘技術だけで見るとアテナとは比にならないほどの才能を秘めていたらしく、同じシユートでも威力は雲泥の差があったのだ。

本来ならばすぐにも集落へ帰りたいところではあるが、探し物

を見つける時間に一日の大半を費やす事が出来るため、少しでも手がかりを見つけないという気持ちのほうが強いらしく中々集落へ帰ろうとはしないのだ。トークで村長からアレスも自分と同様に同じものを探していると聞いた為、クラウドの目標が新しく一つ追加された。探し物をしながらアレスを見つけないという目標である。

クラウドはアレスとはあまり接点はないのだが、アテナを通じて何度か会話をした事があり顔も魔力も思い出せる範囲内である。アレスの特徴はまるで雪のように白い銀髪。集落の中でも銀髪のサンタはアレスしかいなかった為、他の集落でも同様に銀髪は珍しいのではないかと思えるのだ。

何度か村長と遠隔トークでの会話の中で、遠くにいるサンタの魔力を辿る術もうつすらと身に付け始めているのだ。その修練法も村長から伝授されているのでクラウドの毎日の日課となっている。遠隔トークを発動させる事ができれば、クラウドは真つ先にクリスに謝りたいと思っているようだ。やはり何も言わずに集落を出た事に対して罪悪感を覚え始めていたらしく、日々その思いは募る一方なのであった。

今日もまた、遠隔トークの習得に向けて修練を始める。まずは遠方にエンボディで作りに出した適当な物体を置きコレクトでそれを回収する。その距離を徐々に長くしていくという修練法である。これに慣れれば次に、シユートで放った自分の魔力をコレクトで回収するという修練に移行する。その2つの修練法をマスターすれば自分の魔力ならばどこからでもコレクトで回収できる。遠隔トークはその技術を応用し、相手の魔力を探って自分の魔力を飛ばすのだ。魔力を探るといふ技術さえ身につければ遠隔トークはそれほど難しい魔法ではない為、クラウドは丁寧に基礎錬をこなしていく。

いつも通りエンボディで作りに出した物体をコレクトで回収しようとしたクラウドは、その物体の近くに別の魔力が近づいている事を感じ取った。今まで感じた事のない魔力である。

「誰だ…」

魔力は感じてても姿は見えない。その魔力は悪意や殺意といった悪質なものを含んではいけないものの、クラウドはすぐにコレクトで物体を回収し身構える。おそらくはスルーを使つて自身を透過しているという事がわかる。殺気を殺しこちらの隙を窺っているのではないか…隙が生じた際に攻撃を仕掛けてくるのではないかと想定し、クラウドはいつ攻撃を受けてもいよいよに自分の周りを硬化化したオーラで覆う。

「そこにいるのはわかっていて…姿を見せたらどうだ…」

クラウドは語りかけるように言葉を投げかける。同時にスルーを使用していた者が姿を現した。

「ごっ…ごめんなさい…」

姿と声からその者は女のサンタである事がわかった。クラウドが今まで見た女サンタはこれで3人目となった。

「あ…いや！謝らなくてもいいんだ…敵かと思つて…その…」

「そうでしたか…見たところクロースの派閥のようですし…」

「お互い敵ではないみたいです…」

「そっ…そうだね…」

「こんなところで1人で何をしていたのですか…?」

「ちよつと訳ありで…遠隔トークの練習をしてたところだよ」

「見たところ…若いサンタさんですね…」

「ここらはブラックサンタも頻繁に出没しますので危険ですよ?」

「君は一体…」

「よければ…私の集落へ案内しましょうか？そこなら修練も安全にできますし…」

「それは助かるけど…」

「安心してください…定住はしてもしなくても良い集落ですから…そこを拠点にして探し物をするのもありだと思いますよ？」

「ははは…リスニングが早いね…じゃっ…じゃあ…お言葉に甘えて…」

少なくとも瞬時にリスニングを発動できる技術があり、スルーを常用しながら歩く癖を身につけている彼女は、自分よりも格が上だと判断したクラウスは素直に彼女の言葉に従う事にした。

「ソリは私が出しますので…どうぞ…乗ってください」

「ありがとうございます」

やはりエンボデイの発動も早く、瞬時にソリが出現している。ソリが走り出すと同時に彼女は素早くスルーを発動させ、ソリと自分達を透過させた。魔痕は残るものの探らなければ感じる事ができない範囲である為、敵からの不意打ちも多少は抑えることができる移動法である。

「へえ…スルーってこういう使い方もできるんだね…」

「え…？これは移動の基本ですよ…？雪景色での赤は目立ち過ぎますし…」

「ははは…言われてみればそうだね」

「ほんと…若いサンタさんですね…なんだか懐かしい気分になりますよ」

「君の集落には若いサンタはいないのかな？」

「そうですね…少ないです…」

なにせ私の集落はCランクのサンタで構成されていますから…」

「Cランク？」

「ええ…イブの決戦の結果で…集落を一度解散してからまた再編集する時に

戦力を分散させるんですよ…その時にサンタのランクが決まるんですよ」

「それは知らなかった…というか僕はイブの決戦すら未経験だしなあ…ははは」

「S～Eランクの6段階で分けられるんですよ…再編集の時に活躍したサンタは自然と

高ランク評価されます。生き残る可能性をあげる為の知恵なんですよ」

「じゃっ…じゃあ…戦力を平等に分ければいいんじゃない？」

「あえて戦力を均等に分けられないんです…クロースの方針は少しでも派閥が食事の機会を

得られる事を優先しますので…弱いサンタは切り捨てられるんですよ」

「はあ…なんだか殺伐としてるんだね…」

「昔からの方針ですからね…仕方がないんですよ…あ…でも村長に命じられたサンタは

Aランク以上のS評価を受けているサンタなのでよっぽどの事がない限り

倒されてしまう事はないんですよ」

「最高ランクって事か…村長つてなにげすごいんだね…」

「そうですね…私達よりも何百倍も生きてる方々ですからね…君は何回くらいイブを経験したのかな？」

「偉そうな事を言いましたが…5～6回程度ですよ」

「いやっ…それでもすごいと思うよ！尊敬するよ」

「慣れればイブも苦痛ではないですよ…死ななければ良いだけですし…」

「ははは…確かに…」

会話をしながらクラウドは彼女の集落に到着した。エヴァと名乗った彼女はクラウドを集落へ運んだ後、再び集落の外へ出立していった。クラウドはすぐにその集落の村長宅へ赴き、滞在する許可をもらった。村長は『目的を完遂するまでこの集落を自由に使って構わない』と歓迎とは呼べないが、快くクラウドを受け入れてくれた。軽い会話も済ませクラウドは村長宅を後にした。

集落のサンタとすれ違うたび、自分の集落のサンタとは魔力の質が桁外れに違う事に痛感した。一体自分の集落を構成しているサンタのランクはいくつなのだろうか…という疑問も沸き始めた。6段階評価でCは丁度中間あたりの評価だが、圧倒されるほどの魔力の違いにクラウドは困惑している。すれ違う全員が集落の修練所の教師以上、ベテランのサンタの精鋭よりも高い魔力だからだ。いかに自分が無謀な事をしていたのかが身に染みてわかった。

クラウドはしばらくこの集落に滞在する事を決め、少しでも自身の魔力を高めようと決意を固めた。簡素だが村長はエンボディで自分の家も用意してくれたのでクラウドは一旦探し物の事は置いておいて、この集落の修練所に通う事にしたのであった。

## ランクの違い

エヴァの集落の修練所もクラウスの集落の修練所とシステムはほぼ一緒のようである。初等、中等、上等教育の3段階で上等教育を卒業すればあとは自己鍛錬になるのだ。しかし、大きく違う部分を上げれば初等教育でいきなりクラウスの集落での修練所と言う上等教育相応の魔法を教わる点だ。この事からエヴァの集落のサンタの魔力のレベルが桁違いに高いという事がわかる。

アラムやリスニングといった基礎魔法はできて当たり前といった感じであり、クラウスは改めてサンタの世界は広いと実感していた。初めてこの集落に訪れたサンタはきつと初等教育で詰んでしまっているのではないかと思われるのだが、意外なほどに生徒は少なくほぼ先生とマンツーマンでの授業となる為なんとかなっているのではないかと思われる。

まずは初等教育に編入したクラウスは生徒は自分1人だけであった事に驚愕したが、逆に丁寧に魔法の復習やまだ覚えていない魔法を学べる事から不思議と寂しさは感じなかった。

かすかにクラウスの周囲からゲラス老（クラウスの集落の村長）の魔力を感じた為その集落出身のサンタだと初等教育の先生は逸早く気付いたようである。先生が言うにはクラウスの故郷は6段階中Eランクのサンタで構成された弱小集落である事も知れた。それでもクラウスの戦闘面での才能は充分Cランクのサンタ達に通用し、クラウスのシュートの威力に驚いていたようである。

初等教育では、シュート、ショット、サーチ、スルーを学び更にその4つの魔法を応用した使い方を習得すれば卒業となるらしい。ショットに至ってはやはり危険な魔法になる場合が多いので発動は許可されず、自主練をするように言われるらしいが…。攻撃魔法をスルーにより透過する事、エンボディで作り出した物体を透過させる事、透過した物体を更にサーチで包み無機物を通り抜けさせる事



などクラウドスの故郷では絶対に教えてくれない技術である。案の定、初等教育ですらこれほどハードルが高い為、さすがのクラウドスでもたった1日で卒業には至らなかった。

遠隔トークの練習をしたかったクラウドスだったが、初等ですら魔法の応用技術のハードルが高く一日修練所にいただけでかなりの疲労感が襲い余計な事を考える事なく授業に集中させられざるを得なかったようである。先生に聞いたところ遠隔で扱う魔法に関しては中等教育で学ぶらしいとの事である。遠隔トークだけではなく遠隔リスニングや遠隔コレクト、更には実戦で役に立つ剣術や体術などの技術も学ぶらしい。考えただけで身震いがしたクラウドスであった。

それから数日クラウドスは修練所に通い続けなんとか初等教育は卒業でき、次回から中等教育に編入する事を許可された。やはり中等教育も今の時点ではクラウドス1人だけのようである。しかし、上等教育には生徒が数名いるようでありたった一人で学ぶよりも生徒同士で教えあいながら学んだほうが確実に飲み込みも早い事は知っている為、早く共に学ぶ相手が欲しいと思うのも当然の事であった。

やはり自分を集落へ案内してくれたエヴァは修練所の生徒ではなく、とつくに卒業しており自主鍛錬の粹に達しているサンタだという事もわかった。

エヴァは修練所ではなく集落から少し離れた場所でイブに備えて他のサンタ達との戦闘演習を行っているという事を聞いた。実際に怪我や重傷を負う場合もあるようで、未熟なサンタは参加できない仕様になっているらしい。クラウドスの最終目標はそこ。なんとかこの集落で学べる技術は習得しイブでも活躍できるほど戦闘技術も向上させる事である。自分の探し物の事などすっかり忘れて余るほど沸き起こる向上心を抑えきれないようである。

ともに学ぶ生徒がおらず、友と呼べるサンタができにくいかと思われたのだが、クラウドスからかすかに感じる事ができるグレー

ス老の魔力を感じ取ったサンタ達が積極的に話しかけてくれたりした。どうやら元々ゲールス老の集落出身のサンタも多く喋る相手には困らないようである。やはりこの集落でも女サンタは少なく、数日暮らしているクラウスだが今のところ見たのはエヴァー1人のみであった。

ここ最近故郷がブラックサンタの襲撃にあつた事に対して、出身のサンタ達は怒りや悲しみの表情を見せたが

「毎年この時期はなあ…」

「ああ…仕方ないと言えばそうだが…」

と、妙に納得している部分もあるようだ。どうやらこの時期になると各地の集落でブラックサンタとの抗争が頻繁に起きるらしいのだ。この集落も例外ではなく今は警戒の体制を敷いているらしい。イブの決戦を経験した者の中から戦闘技術に長けた者は集落の外の見回りも任せられるようだ。どうやらエヴァはそれでクラウスと会う事ができたようなのである。

「まあ…クラウスは気にする事なく、修練に励めよ！」

「ブラックサンタなんて攻めてきても俺達が全力で追い返すからな！」

「ははは…心強いよ…」

決戦の前に集落を偵察し、少しでも勝機があれば攻め落とす。これで決戦時に自分の派閥が有利になる。よく考えれば理に適った事ではある。しかしそれでもクラウスは頭では納得していても不要な争いである事には違いないのではないかとやや疑問を感じていた。

「まあ…俺らCランクには任せられないが…」

Bランク以上になると同じようにブラックサンタの集落に攻め

入る」

「お互い様って事だな……」

「そりゃそうだけど……」

「それが嫌でわざと決戦の時にサボったりするやつもいるからなあ……」

「つたく…命が掛かってるって時に信じられないよな……」

「ははは……」

クラウドは今まで知らなかったサンタ事情も少しづつ知る事ができた。

「厄介なのは潜伏してるブラックサンタだ」

「見抜く方法が確立されてないからなあ……」

「そうなのか……」

「ま…どうせ偵察用の魔獣かなんかだろうからな…戦闘能力は低いぞ」

「見抜かれた瞬間一撃でやられるだろうからな」

「この集落は今のところ大丈夫なのか？」

「さあな？もしかしたら潜伏してるかもしれないが」

この集落は大丈夫だ！少なくとも2回は決戦を経験してるやつらばっかだしな」

「クラウドは気をつけて行動しなよ？未熟なサンタはいくら弱い魔獣でも」

「傷つける事もできずにやられてしまうからな？」

「…気をつけるよ」

ゲーラス老から襲撃の事は聞いていた。クリス達はサタンと戦いなんとか生き残る事ができたらしい。しかもサタンは魔獣と呼ばれる生物だったという事も聞いていた。この集落のサンタでさえ潜伏している魔獣には一応警戒はしている。そんな魔獣と戦ったクリスと

アテナは自分よりも一步先を進んでいると改めて実感できた。

「イブまでここで力を蓄えたらどうだ？」

「ああ…無理して故郷に帰る必要はないんだぞ？」

「いや…僕はイブまでには帰るよ…長老と約束したし…」

「まあ…事情はよく知らないが…一先ずは精進だな？」

「できるだけ多くの事を学び、俺らの故郷のエースになるのもありだろうしな」

「エースになれるかはわからないけど…ぼちぼち頑張ってみるさ」

「いい性格だなクラウド…頑張れよ！」

同郷のサンタと別れクラウドは家路に向かった。

（この集落にも魔獣が潜んでいるかもしれない…か…）

先ほどのやり取りでの事を思うと自然に体は緊張する。もし自分が魔獣に襲われたらおそらく命はないだろう…とうっすら恐怖すら覚えた。そこらを歩いているサンタでさえ、1人で行動しているときは自分の周りを硬質化したオーラで覆っている。中にはスルーを活用しながら歩いている者もいる。先ほどの2人が警戒態勢だと言った意味がよくわかった。クラウドも彼らを真似て一応硬質化したオーラで覆ってはいるものの、この防御術は一度も実践で使ったことがない為どれほどの強度なのかもわからない。

（プロに聞くのが一番だよな…）

クラウドは後日、修練所を休みエヴァの元を尋ねる事に決めた。

## 命懸け

翌朝、クラウドスは定刻よりも早く目覚めた。予め前日の夜に村長には修練所を休むという事は伝えていたのでいつもよりもゆつくりとした朝を迎える事が出来た。自動更新されるカレンダーを確認する。今日は12月4日。イブまでは残り3週間程度である。その前に13日に聖ルチア祭という祭りがあるようだ。イブに備えて魔力を高める儀式的なもので、ここ1年の修練の結果を見せ合う行事らしい。いくらコランクのサンタで構成された集落とは言え、クラウドスも少しは良い所を見せたいという感情も芽生えている為、意気込みは凄まじい。

今日は修練所を休み、エヴァに戦闘技術を教わる予定だが肝心なエヴァと連絡は取っていない為早朝から行動を開始した。道行く人にエヴァの家の場所を聞き、なんとかクラウドスはエヴァの自宅までたどり着いた。

(おはようございます…修練所へは…というか私に御用ですか?)  
エヴァも既に起きていたらしく、自宅の前についたクラウドスにトークが飛んできた。

(おはようエヴァ!今日はちょっとお願いがあつてきたんだけど…)  
(戦闘技術を習いたいのですか…私人に教えるほど上手ではないですよ…?)

(なんか先生に聞くよりは…気楽かな〜と思つてさ?)

(順序良く修練所で学べばいいと思いますけど…)

(やっぱりだめかなあ〜?)

(あ…いえ…今日は私も用事はないので…)

（そうか！よかった！だめって言われたらどうしようかと思っただよ！）

（だめじゃないですよ…私でよければ…あ…とりあえず中にあがってください…）

（ありがとう！お邪魔します）

クラウドはエヴァ宅へ上がりこんだ。内装は自宅とそう変わりなく質素ながらも数々の電飾やクリスマスマスの飾りが掛かっており洒落である。

「私…朝ご飯がまだですので…あの…クラウドさんは…？」

「そういえば僕もまだ…」

「今お茶を入れますね…」

「なんか気使ってくれてありがとう」

「いえいえ…」

朝ご飯と言ってもサンタは固形物を食さない為、水やお茶といった水分を摂取するのだ。エヴァはクラウドの分のコップとソファアームをエンボディで具現化させ用意してくれた。当たり前のようにエンボディを多用し使いこなしている。やはりエヴァはベテランのサンタで今日一日でかなり魔力が進歩するだろうと確信にも似た感情が沸いた。

「戦闘技術といっても…何を教えればいいのですか？」

「ん…基礎かな？僕…戦い方もわからないから…」

「それは中等教育で習うと思うんですけど…」

「予習は大事だろ？怪我しないようにさ？」

「予習ですか…意外と真面目な方ですね…」

くすりと微笑みを見せたエヴァは誰が見ても美人だと呼べる。初め

てあったときもまるで仏頂面のように感情を表に出さない種類のサ  
ンタだと思っていたのだが、こうした意外な一面を見る事ができた  
クラウドスは満足そうである。

「できれば実戦形式で教えて欲しいんだけど…いいかな？」

「危ないですよ？」

「実際にしながらじゃないと…僕…不器用だからさ？」

「わかりました…できる限り私も頑張りますね…」

「ああ…よろしく頼むよ！」

手っ取り早くお茶を飲み終えた2人は集落からそう遠くはない雪原  
へ移動した。今回は各々がソリを出しエヴァの後にクラウドスが続く  
ように移動したのだ。もちろんクラウドスはスルーを応用し自分の姿  
をなるべく透過させるように心掛けて移動していたのだが、まだま  
だ魔力が未熟な為完全な透過とは呼べなかったが、今日は少し天候  
が悪い為吹雪の中では目視は不可能だと呼べるレベルではある。

「ここらで始めましょう…ブラックサンタの心配もありませんし  
…」

「うん！じゃ…よろしくお願いします！エヴァ先生！」

「先生だなんて呼ばなくていいです…エヴァでいいですから…」

「教えてくれる人はみんな先生だと思ってるからさ？今日はエヴ  
ア先生なんだよ！」

「そっ…そうですか…」

エヴァはうつすらと顔を赤く染め、照れている様子である。実戦形  
式で戦闘技術を習得する為に、まずはお互いに魔力を開放し始めた。  
同時にエヴァの口調と表情が一変した！

「おら！ガンガン魔力あげろよ！そんなんじゃ使い物にならねえ

んだよ！」

「…え…？エヴァせんせ…？」

「無駄口叩いてんじゃねえぞ！俺がシユート打つからてめえはそれを受け止めるんだぞ！」

「一人称…俺…？え…え…え…！？」

「ボサつとしてんじゃねえぞ！打つからな！今打つからな！！」

豹変したエヴァはクラウドに容赦ないシユートの弾丸を浴びせる。クラウドはなんとか硬質化した魔力のオーラで身を守るが、凄まじい威力の前に忽ちオーラは破壊され全身にシユートを食らってしまった。とてつもない衝撃でクラウドの体は宙を舞い吹き飛んだ。

「おら！立てよ！まだ始まったばっかだぜ…？」

エヴァはリジエネーションを発動し、クラウドの傷を瞬時に治す。致命傷には至らなかったためすぐに回復したのだが、クラウドの頭は混乱している。

「ただ硬質化するイメージを固めるだけじゃねえんだよ馬鹿野郎！跳ね返したり弾力をもたせねえと意味をなさねえんだ！わかったか！」

「はっ…はい…」

エヴァの態度は豹変したが、言っている事は実戦で役に立つ事ばかりだ。おそらくエヴァは一定まで魔力を高めると感情が暴走しコントロールできなくなるタイプであると瞬時に理解できた。クラウドは気持ちを切り替え、この修練に集中し始めた。

「受け止められるまで何百回でもやるからな！おら！立てこの野郎！」



「おっ…押忍！」

言われた通り硬質化するイメージと衝撃を吸収できるような質感のイメージを固める。だが、エヴァのシユートを受け止める事などできず体はボロボロになる。そのたびにリジエネーションで治療され…の繰り返しである。気を抜けば殺される…クラウドの表情は真剣そのものだ。エヴァも表情が一変し、その表情からわかるように確実にクラウドを殺すつもりでシユートを放っている事がわかる。

「馬鹿野郎！反撃しねーと戦闘にならねーんだよ！」

俺の隙ついてシユートでも打ってみろ！」

「はい！姉御！」

言う通りに隙を伺おうとするが、シユートを受け止める事ができず何度も何度も深いダメージを負ってしまう。避けるという選択肢もあるのだが少しでも受け止められるオーラを身につけなければ、避け方を誤った場合確実に待っているのは死である。

かなりの苦行ではあるが徐々にクラウドの防御オーラはその力強さを増し、まだ受け止めるまでには至らないがシユートが当たった瞬間、一瞬だけ抵抗できているように見える。その為か徐々にクラウドのダメージも軽減されている。しかし、まだまだ反撃ができるような余裕はなく一方的にエヴァのシユートを全身に浴びているとそう変わりはないようである。

「さあて…少し休憩するぞ！魔力を解いていいですよ…？お茶にしましょう」

「え…？あ…はい…」

魔力を解いた瞬間また性格が一変するエヴァ。

「私：魔力を高めると…なんとというか…興奮しちゃって…」

「ははは…でも…すっごい勉強になるよ！」

「そうですか…よかった…」

束の間の休息だが、まるで天使と悪魔が同居しているようなエヴァに若干恐怖の感情が沸いていた。午前中の訓練では本当に死ぬところであったからだ。それでも手加減はしてくれているだろうとは思うのだが、何度も傷つき治される事で魔力は昨日までのクラウスとは倍近く上昇している事がわかる。それでも受け止めるに至らないエヴァのシユートは強力な武器であると実感していた。

「このペースだと…」

あと1時間もやればしっかりと受け止める事ができると思います

「本当かい！それは頑張らなくっちゃ！」

「但し…手加減した俺のカスシユートだけだな！おら！立て！

始めるぞ！」

「え…！」

「ボサツとしてんじゃねえぞ！時間は待つちゃくれねえんだよ！」

(めっ…めんどくさっ！)

エヴァの態度が豹変したと同時にクラウスはまた地獄の苦行を味わう事になったのであった。

辺りはすっかり日が暮れ、夕方ごろから降り出した雪が勢いを増し、吹雪となつて一面を極寒の世界へと変えている。クラウスとエヴァは訓練を切り上げ、今はエヴァの家でお茶を啜っている。クラウスの体中にはリジエネーションですら治せなかつた傷もちらほらとあり、化膿しないように包帯で巻かれている。凄まじい攻撃…いや、まるで爆撃にでもあつたかのような身なりに変わっていたのだ

った。

あれからクラウドはシュートはなんとか受け止める事に成功し、ちよくちよく反撃もできるほどに成長した。だが、いくら才能があるとは言え、まだまだ未熟なシュートを放ったクラウドにエヴァは激怒し次はシュートではなくコンプレスポムを放ってきたのであった。シュートの要領で連射されたコンプレスポムは一瞬クラウドの脳内で花畑を見させたが直撃してもギリギリで死なない程度に抑えられていた為、死には至らなかつたのだった。後半は訓練というよりもエヴァの一方的な破壊ショーと化していたのだがそれでもクラウドの魔力の絶対値はかなり上昇していた。

「今日はありがと…ございま…した？」

「いえいえ…私の方こそ役に立ててよかつたです…」

もはやエヴァに敬語を使うべきか気軽に話しかけるべきか、よくわからないほどにクラウドはエヴァの魔力の変化には過敏に反応してしまっている。

「あの…よかつたら…中等教育を卒業できたら…」

「ん…？」

「もう一度私と一緒に訓練しませんか？」

「えあ！？」

まるで死の宣告のようにエヴァの言葉はクラウドの心を貫いた。

「クラウドさんはすっごい才能あると思うんですよ…」

「ははは…そう…ですか…？」

「一緒に訓練すれば…私自身向上できると思いましたし…」

「も…充分なんじゃないかな…」

「いえ…私も…もっとももっと強くなりたいですし…お願いします」

…」

「あ…いや…あの…時間が合えばね…？是非！」

「よかった…」

帰り際に簡単にリジェネーションのコツなども教えてもらった。その日はエンボディを発動できるほどの魔力も残らずにふらふらになりながらもクラウドはなんとか無事に帰宅できた。

自宅に帰ってクラウドはそのまま崩れるようにベッドに横になった。

「エヴァ怖い…エヴァ怖い…」

まるで羊を数えるかのようにエヴァの恐怖を実感しながらクラウドはそのまま眠りに落ちた。

## 死亡フラグ

(クラウスさん…起きてください…クラウスさん…)

熟睡しているクラウスにトークが届いた。しかし、クラウスは気付かず寝返りをうつ。

(大変な事になりました…起きてください…)

必死にトークの主は起こそうとするが疲労困憊としているクラウスはなかなか起きない。

(さつさとおきろこの野郎！シユートぶち込むぞ！)

「へあっ!？」

まるで某宇宙人ヒーローのような声を出しながらクラウスは飛び起きた。今日の訓練中に身をもって味わった恐怖の化身の声は完璧に覚えていたらしく、額からは汗を流し覚醒した。

「あ…おはようございます…大変な事になりました…」

「え…エヴァ…?」

覚醒したものの、まだ頭が回るほど完璧に起きたわけではない。混乱している。部屋の中は暗いがランプの光に照らし出されている人影は確認できる。露出が高めの赤い衣装。その赤と背反するように自己主張が強い青く長い髪。クラウスが起きた事でうつすらと微笑んだその表情は愛着さえ沸くようなほどの童顔で、純粹無垢な少女に見える。しかし、一定まで魔力を高めるとその表情はまるで破壊神のように鋭い眼光へと変わる彼女。エヴァがそこに立っ

たのだった。

「急いで身支度をしてください…」

「ん…一体…なにが…？」

「つい先ほど集落の外から大量のブラックサンタの魔力を感じました。」

隙をついて襲撃してくると予想されますので…」

「そっ…それは大変だ！」

エヴァからただならぬ事態になっている事が聞かされ、クラウドは完全に頭も起きいそいそと身支度を終えた。訓練で傷ついた体はすっかり治っており、寝ている間リジェネーションの真の効果が発揮されたと思われる。

クラウドはエヴァに言われるがまま、集落中のサンタが集まっている会合所へと足を運んだ。

「ご苦労だったエヴァ…クラウド殿、今集落の外には…」

長老が簡単に今集落で起きている事を説明してくれた。エヴァが言ったように外にはブラックサンタの一軍が潜んでおり、今にも襲撃してきそうな気配を醸し出しているとの事だった。見つけたのは集落の外側を固めている警備を任されている屈強なサンタだ。

「では改めて…敵の規模はおそらく20〜30名程度だと思われるます…」

魔力の開放は確認できませんでしたが…一人一人の魔力を分析し戦闘能力を想定したところ

おそらくDランクほどのブラックサンタで構成された部隊だと思われるます」

「Dランク：僕の故郷のサンタよりも強いって事か…」  
「しっ！クラウドさん…お静かに…」

「しかし、ブラックサンタはみなさん知っての通り、  
我々クロースよりも強大な魔力を秘めておりますので  
ランクはもう一段階上だと判断して良いと思われませう」

「既に集落中に敵が放った斥候用の魔獣も確認しています  
我々の情報は既に把握済みだと仮定して良いと断言できます」  
「以上！我々の報告を終わります」

淡々と説明していった数名の護衛サンタ。説明を聞きながら恐怖  
を覚えたサンタもちらほら…逆に魔力を徐々に開放させ、いつでも  
迎撃できる準備を始めるサンタもちらほら…。

「ご苦労であった…ではこれから我々が取るべき行動を決めたい  
と思つ…」

誰か良い案がある者はおらぬか…？」

長老の言葉と同時にエヴァが立ち上がり案を提示した。

「戦闘経験が豊富なサンタを集め…少数で良いと思いますが…」

これを攻めの班にし、敵が動く前にこちらから先制攻撃を仕掛  
けます。

残りは魔力が低いサンタを守る守備班として配置。

敵の襲撃するタイミングを崩せば被害は最小に抑えられると思  
います…」

「さすがだな…エヴァ！」

「私もその案に賛成だ！」

「では…エヴァの案を可決しようと思う…異論はないな？」

イブの決戦を何度も経験しているエヴァだからこそ提示できる案であり、戦闘経験のないサンタにはどうあがいても出てこない案である。さっそくエヴァの言うように攻めと守りの班に分けられていった。

「エヴァは攻めの班でそのまま指揮を取ってくれ

ワシは守備班で指揮を取ろう…」

「わかりました…村長…」

今起きている事に対し瞬時に対応し、対策まですぐに考え付くエヴァをクラウスは改めて尊敬した。自分の魔力では戦力外だという事もわかっていて、クラウスは守備班というよりも守られる側だという事を痛感していたのだが

「クラウスさん…攻めの班にきませんか…？」

「え？僕は無理だよ…戦力外だし…」

「実戦の良い機会だと思いますけど…？」

「確かにそうだけど…」

「安心してください…私が必ずお守りしますので…」

「でも…」

「エヴァが推薦してるんだ…クラウス！自信を持って！」

「最初は誰でもひよっ子だ！なあに！俺達もお前を必ず守ってやるさ…」

エヴァと他の攻めの班のサンタが励まし、クラウスはしぶしぶ攻めの班に加わった。自分なんかが役に立つのだろうか…と期待と不安が同時にクラウスの胸を締め付けたが、確かにエヴァのいうように実戦の良い機会でありここで戦闘を経験するのは自分にとっては



プラスになる事だと感じていた。不思議と不安な気持ちは消えていきクラウスは程よい緊張で興奮していたのだった。

攻めの班に選ばれたのはエヴァ、クラウスを含め9名。クラウスの他はエヴァと同様にイブの決戦を何度も経験しているベテランのサンタである。その9名で固まり作戦を立て始めた。

「エヴァ…どう攻める？明らかに敵の人数は我々よりも多いが…」

「攻めといっても私達の目的は敵を全滅させる事ではありません…陽動がメインだと思ってください…」

「陽動…？」

「はい…守備班と連携して敵を全滅させます…」

「うまくいくかどうかはわかりませんが…」

「どういった方法で？」

「敵の背後から攻め入り、守備班の間合いまで敵を退かせるんです」

「なるほど！守備班と我々で挟み撃ちにするわけか！」

「集落に進入される前に倒せるかもしれない！」

「かなり危険な方法ですが…」

「いや！その案以外に被害を最小に食い止められそうな案はない！」

「同感だ…さっそく村長に守備班の配置の指示を出しにいきます」

「あ…それは私がいけます…みなさんは集落の北の門に向かってください」

「了解！クラウス！俺達についてきな！」

「あ…う…うん」

エヴァの作戦は敵の背後から攻撃を仕掛け、その勢いのまま守備班が集中している場所まで敵を退かせる。敵を挟み撃ちにして一気に全滅させるという方法である。かなりリスクは高いがうまくいけば敵が集落に侵入する前に全滅させる事ができる。しかし、敵の力

量が自分達以上ならば退かせる前に自分達が全滅してしまう虞がある諸刃の刃である。だが、攻めの班に立候補してきたサンタは自信に満ち溢れた表情を見せている。決して過信しているというわけではないようだが、それだけ彼らはエヴァを信頼しているのだ。なぜ、こんなにも彼らはエヴァの言う事を信じているのか？ クラウスは不思議でたまらなかつたのだが、今はエヴァを信じるしか術はなく余計な事を考えるのは止めた。

「気休め程度だが…」

移動しながら一人のサンタがクラウスに話かけてきた。同じ攻めの班のサンタ、カインである。

「少し俺の魔力を分けてやろう…エヴァが推薦したとはいえ…」

クラウスの魔力では危険すぎる…」

「でっ…でもそんな事したら…カインさんの魔力が…」

「大丈夫だ…気にするな」

カインの掌からうつすらと魔力の光があふれ出す。まるでリスニングの要領でそれはクラウスの全身を覆っていった。クラウスにはどういった原理で発動させているのかもわからなかったが、その魔力はまるで自分がコレクトを使って吸収しているかのように自然にクラウスの中に溶けていった。

魔法：ディストリビューション

己の魔力を対象に分け与える事ができる魔法。

使用者は魔力の最大値が減少する。分け与えられた魔力は対象者の魔力と同化する為、対象者は自分の魔力としてすぐに使用する事ができる。一般的にこの魔法は死期が近いサンタが自分の弟子や友人に贈るものである為、習得している者は少ない。応用すれば自分が死亡してしまった場合対象者に己の魔力の全てを取り込ませる事も可能。コレクトと同系列の魔法であるが効果は真逆である。

クラウドの魔力が増幅していく。かなりの量の魔力が分け与えられた事がわかる。カインの魔力は著しく減少していることもわかる。

「カインさん……」

「俺は……おそらく今日死ぬ……先日、今日の夢を見たんだ……」

「そんな……」

「外れればいいがな……」

「今の魔法……僕に教えてくれ！この魔力はやっぱり受け取れない！」

「甘ったれるな！お前が死んだら……エヴァが悲しむだろう……」

「え……？」

「お前がこの集落にきてから……エヴァが笑うようになった……俺はお前に感謝している……」

「これは俺からの礼だと思って使ってくれ……」

「カインさん……」

「そんな顔をするなクラウド……俺じゃあいつを笑わせる事ができなかった……」

「だが！俺は今日あいつを全力で守る……お前はなにがなんでも生き残れ！」

「そんな…縁起でもない事…言わなくれ！そんな丁寧にフラグを立てたら本当に…」

「あ……！」

「カインさんの魔力は絶対に無駄にはしない！カインさんがエヴァを守るなら…」

僕はカインさんを守る！絶対に守ってみせる！」

「お前なんかを守られるほど…俺は弱くないぞ！足を引っ張るなよクラウドス！」

「それはお互い様だよ！さつさとその死亡フラグ…ぶっ壊してくれよ！」

クラウドスはカインを励まし、互いに生き残る事を約束した。

攻めの班が全員北の門へ集まり今はエヴァの到着を待っている状態である。敵に悟られぬように攻めの班の一人がスルーを応用した魔法技術を発動し、集まったサンタ全員の姿を透過させ、更に魔力を探られないように魔力すらも透過させている。

「お待ちせしました…」

エヴァが到着し、エヴァも同様にスルーを応用した魔法技術を発動した。あとは守備班が配置に付くのを待つだけである。敵の位置は東であるため、守備班も東側に集中して配置されていく。集落の中には既に敵が放った魔獣が潜伏している為、攻めの班、守備班の他にその魔獣を殲滅する班も作られたようだ。エヴァの作戦が失敗した時の事も想定し、守備班を100とするならば東側には40、他は20づつ各所に配置された。作戦がうまくいきそうならばすぐに東側に集まれるような絶妙な配置である。守備班の配置が完了すれば村長からエヴァに合図が送られるようだ。

村長の合図を待つ間攻めの班は互いを叱咤し士気を高めている。同時に魔力を徐々に開放していきいつでも戦える準備も始めた。スルーで魔力の気配が消されているため、こちらは充分なほどに準備ができているのだ。

(エヴァよ…配置が終わったぞ…)

エヴァに村長からトークによる合図がきた。同時にエヴァは攻めの班全員にトークで合図を送った。後はエヴァの合図で突撃するのみである。

(みなさん…絶対に無理はしないでくださいね…)

(それはエヴァにそのまま返すぜ!)

(エヴァ!できれば敵だけを倒してくれよ!)

(ははは!違いねえ!)

(冗談はその辺にしておいて…敵の背後に回るぞ!俺の後に続け!)

エヴァの口調が変わり、彼女も準備が出来たことがはっきりとわかった。いよいよ攻めの班が行動を開始したのであった。

## 急成長

エヴァを先頭に攻めの班は各々、エンボディでソリを具現化し高速で移動を開始した。もちろんスルーを応用した技術で魔力を感じさせぬように細心の注意を払った移動法である。敵の魔力の乱れは感じないため、まだこちらの行動に気付いていない事がわかる。敵の背後を指しながらも確実に敵の間合い内に近づいていく。近くまでくると敵の魔力がビリビリと体に伝わってくる。敵の力量はおそらくD〜Cランクほどであるとの報告を受けていたのだが、伝わってくる魔力はそれ以上に陰湿で強大なものではないかと思われた。

先頭のエヴァが立ち止まり、静かにソリをコレクトで回収した。おそらくその場所から攻撃を開始するのであるうと思われる。他のサンタもエヴァ同様にソリを回収し、いよいよ戦闘の準備を始めた。少しでもスルーが乱れれば敵からバレてしまうであろう距離であるため全員が緊張感に包まれている。全員の視線の先には敵の一団、その奥には集落の東門が見えている。まだ日が昇るには早すぎる時間であり、辺り一帯は漆黒の闇で包まれている。ブラックサンタの衣装は黒である為、風景と同化し目視ではその姿を確認する事が困難である。しかし、敵の魔力は隠し切れないほどの悪意や殺気を含んでいるため、姿は見えなくても敵の位置はすぐに把握できた。

エヴァは先ほどから敵を凝視し、なにかを探しているようだ。おそらくは敵の司令塔となるリーダー的存在を探しているのだろうと思われる。目的は陽動しながら守備班の攻撃範囲内に誘い込むことだが、敵の中枢を倒せるのならば先に叩いておいたほうが良い。リーダーを失えば敵の指揮は麻痺し、士気が一気に低下する。勝負をかけるチャンスがおのずと現れるのだ。それはこちらも同様に、指揮を取っているエヴァを倒されてしまえば作戦は失敗し全滅もありえるのだ。

(見つけた…)

敵の一団の中心に、巨大なソリにのったリーダーだと思われるブラックサンタを発見した。周りのブラックサンタよりも高い魔力を秘めている事からその事が断定できる。まだ魔力を開放してはいないが、その力量はおそらくはBランクほどだと思われる。明らかに自分達よりも格上の敵だ。しかも人数差も3倍以上あり、とてもじゃないがこの人数ではリーダーを倒す事は不可能だと思われる。

(エヴァ…焦るな…東門まで誘い込めればいい…)

(わかってる…チャンスは敵が動いた瞬間だ…それまで待機!)

(ああ…全員それはわかってるさ…とりあえずリーダーは放置で我々は作戦を重視しよう)

(1人でも多く倒せれば越した事はない…絶対に油断はするな)  
(了解した!)

一同は敵の様子を窺い、仕掛けるチャンスを狙っているがなかなか敵は動き出そうとはしない。敵の作戦がわからない為なかなか動けないのだ。このまま沈黙が流れ時間が経てば日が昇り、敵にとつては不利になる状況なはずなのだが…

突如、敵の魔力の変化を感じた。明らかに攻め入る気満々といった魔力を開放し始めた。

(いよいよか…)

(俺が先陣を切る! 援護は任せたぞ!)

(いやまてエヴァ! 敵の様子がおかしい!)

(ん…?)

敵は動き出した。全力で戦えるようソリなどは既にコレクトで回

収されており、手には各々の武器を携え真つ直ぐに集落へではなく、潜んでいるエヴァ達の方へ向かってきていたのだった。

「バレてる！全員！スルーを解け！戦闘開始だ！」

言葉と同時に彼女は巨大な筒のようなものをエンボディで具現化させ、敵の一団へ向かって走り出した。他のサンタもスルーを解きいつのまにか具現化させていた武器を構えエヴァに続いて走り出した。

クラウドも遅れを取らぬようにすぐにエンボディを発動し、自分の武器を作り出す。自分の戦闘での魔法はおそらく使い物にならない。しかし、接近戦ならば弱い魔力でも役に立てるかもしれないと判断し剣を具現化した。片手で使うには少々重く両手で扱って初めて真の威力が期待される大剣だ。一般的な大剣よりも尺は短く小ぶりだが、両手剣ならではの破壊力と片手剣のスピードを併せ持つ『クレイモア』と呼ばれる形状である。更に具現化する際若干イメーシの改変をし、追加効果を持たせた魔法剣である。

走りながらエヴァは巨大な筒からまるで大砲のように弾丸を射出している。しかも、ただのシュートではなく弾丸の一つ一つがコンプレスボムである。敵の中心を正確に狙い、騒音とともに爆発が巻き起こっている。爆発を確認できたという事は、魔力に反応し飛散した事がわかる。おそらくは敵のバリアか数名のブラックサンタに命中したと思われる。まるで派手な戦闘開始の合図の狼煙のように蒸発した雪が煙っている。

エヴァの武器はシュート系の攻撃魔法を生かす為に特化した物で、手動でシュートを射出するよりも速く正確に対象に命中させる事ができる筒『バズーカ』と呼ばれる射出装置だ。クラウドと一緒に訓練したときのコンプレスボムなどは比較にならないほどの威力で、たった一撃でもあれを食らえばクラウドの未熟な魔力では即死は確実である。



他のサンタも一斉に強力なシュートを放ち、敵の進路を妨害するように弾幕を貼っている。中にはコンプレスボムを透過させ地雷のように地面に設置したり、浮遊させたりと数々の応用技術も見受けられる。更にはまるで生き物のように蠢く物体を作り出し、敵に向かって放っている者もいる。明らかにショットだと言う事がわかる。

初めての戦闘…いや、戦場にクラウドスは圧倒され、自分がなにをしたらよいのかもわからないほどに混乱している。自分がいなくてもこの8名がいれば勝てるのではないかと思えるほど、次々にブラックサンタを倒しながら圧倒しているからだ。だが、凄まじい弾幕にも動じず確実に近づいてきているブラックサンタも数名確認したため、確実に接近戦は避けられないだろうと予想される。クラウドスは頭を切り替え迎撃する為に息を整え集中力を高めている。

「全員！真横に飛べ！早く！」

エヴァの叫び声を聞いた全員は素早く真横に飛んだ。一瞬反応が遅れたクラウドだったが、エヴァはしっかりとクラウドを押しように突き飛ばした。同時に全員が今までいた場所には巨大な氷塊が上空からドシン！と降ってきたのだ。エヴァが気付かなければ今の氷塊に押しつぶされ命はなかったと思われる。

「チッ！グラビテーションを使えるやつがいるとは…」

「クラウドス！ぼけっとするな！俺が突き飛ばさなかったらお前死んでたぞ！」

「ごっごめん…」

魔法：グラビテーション

攻撃魔法。

圧縮した魔力を核とし、

大気に含まれる水素や酸素や質素を取り込む。

水素と酸素を取り込めば巨大な氷塊や、膨大な量の水を発生させ

酸素単体を取り込めば沸騰した酸素の雨を降らせ

指定せずに大気自体を取り込めば、辺り一帯を真空の状態にさせる事が可能。

様々な用途で応用が可能なため優秀な攻撃魔法である。

シュート系の魔法、コンプレスポムを応用した上位魔法である。

「いつ打ってくるかわからないが…グラビテーションの発動には詠唱が必要だ！」

連射はしてこない！動揺するな！」

「そつ…そうだな！弾幕を張れ！押されるぞ！」

「クラウドもなんでもいいからシュート系の魔法を頼む！」

「わつ…わかった！」

先ほどのグラビテーションを警戒し、一同は一箇所に集まらないように散開し、四方から取り囲むように弾幕を浴びせ続ける。しかし、戦闘員の数が少ないため散開すれば弾幕の数もまばらになりそれほど威力を持たせる事が出来ない。このままの状態が続けば各個撃破されてしまうのは目に見えている。

クラウドも弾幕張りに参加し、必死にシュートを放ち続けている。彼の未熟なシュートではそれほど威力は期待できないと思われたのだが、カインから大量の魔力を分け与えてもらったため、クラウドのシュートは驚くほど精度を上げ同じ攻めの班のサンタのシュートに引けを取らないほどの威力になっていた。クラウド自身、これほどまでに魔力が上昇していたとは思わなかったため驚いた表情をしている。だが指示がなければ動けず、避けると言われても反応が鈍すぎて追いつかない。この戦場では確実にお荷物以外の何者でもないという事を痛感していた。

（このままでは…やられる…）

（作戦変更だ！全員良く聞け！このまま徐々に東門まで後退するぞ！）

（了解！）

敵の一団を押しながら東門まで追いやるといふ作戦は無理だと判断したエヴァは全員にトークで作戦の変更を伝えた。挟み撃ちにする事は無理だが、東門まで引き付ける事ができれば守備班の増援に期待ができ、現状よりは確実にマシだと思えたからだ。

各々が攻撃を続けたためかなりの魔力を消費している事がわかる。このまま無事に東門まで後退できるのかもわからない状況である。敵もただ攻撃を受けているわけではなく、弾幕のタイミングを見計らい一撃で戦局を打破できそうな強力な魔法で反撃してきているため、常に死と隣り合わせな殺伐とした戦いである。

弾幕を突破し、接近戦を繰り返している者も増え始めた。敵のリーダー的存在以外はほぼ自分らと実力は五分。接近戦になれば互いの戦闘での経験が最大限に生かされるが、それはあくまで1：1の話である。敵は複数いるため接近戦を許してしまえば他の敵が簡単に援護にまわり確実に撃破されてしまうのだ。1：複数を想定した戦いを心掛けねばならないのだ。

敵も馬鹿ではない。確実にこちらの数を減らそうと必死に展開している。明らかにこちらの戦力を探り弱いものから確実に撃破していこうという魂胆であった。カインから魔力を分け与えてもらい魔力の最大値は他のサンタと引けを取らないほどまで上昇したクラウドだが、彼の戦い振りを見れば素人丸出しであり明らかに他のサンタよりも劣っていると判断されてしまった。案の定、敵はクラウドに集中し始める。

敵の動きの変化に逸早く気付いたのはカインだった。クラウドに集中して攻撃を浴びせているとすぐに判断し、彼の援護に向かおうとするがそう簡単にはいかない。カインはまだ魔力が低下した事に慣れておらず、本来の自分の魔力ならば可能な応用魔法の数々で攻撃や防御を行ってしまったため、かなりの疲労感と予想外の魔力の消耗具合で己の身を守る事で精一杯であるようだ。しかし、このままでは確実にクラウドは殺される。むしろ、戦闘未経験でまだ生き残っている事自体が奇跡なのだ。クラウドを意識しながら徐々にカインはクラウドの元へ距離を詰め始めた。

攻撃は未熟だが、防御はほぼ完璧に近いクラウド。敵のシールドやコンプレスボムなどを次々に硬質化したオーラで受け止めている。むしろたまに同じ速度で跳ね返してさえいる。確実にエヴァとの特訓の成果が現れていたのであった。カインが魔力を分け与えた事もあるが、クラウドは確実に戦闘の中で急成長を遂げている。攻撃と防御を繰り返せば魔力を大量に消費してしまい動けなくなるほど疲労困憊してしまうのだが、クラウドの魔力は一向に衰えを見せない。むしろ徐々に増え始めている。それは彼が作り出した剣の効果であった。クラウドが剣に持たせた追加効果は、飛散した魔力を剣に引き寄せそのまま自分の魔力として変換するという複雑な能力だったのだ。コレクトとリスニングの応用技術ではあるが、実戦でこの能力を使えるサンタは少ない。クラウドの戦闘の才能と実戦により研ぎ澄まされた集中力が生んだ奇跡の能力だと言えよう。

周囲から飛散した魔力を吸収し、魔力の絶対値が伸びていく。未熟だった攻撃もその威力は絶大なものとなっていく。目に見えてわかったのはクラウスの防御オーラの変化だった。シユートを受け止め相殺する事から始まり、次にそれを同じ速度で跳ね返す反射バリアのようなオーラに変化し、今では受けたシユートを倍以上の威力を持たせて跳ね返すまでに至っている。敵もその変化に気付き始め、標的を変えた。クラウスの戦闘技術は素人丸出したが明らかに強くなってきている事に戸惑いを隠せなかった。止むを得ず弱いものから殲滅する作戦は変更され、こちらの士気を奪う作戦になったようだ。敵は陣形を変え、明らかにエヴァを狙っている。攻撃の頻度がエヴァがいるあたりに集中し始めたことからその事がわかった。

休む事なくコンプレスポムをバズーカで射出しまくっているエヴァだが、その表情から確実に疲労が溜まってきている事が感じ取れる。エヴァに集中攻撃が始まってから彼女は目に見えて魔力が低下してきている事もわかる。簡単に扱えるように思えるコンプレスポムだが、大量の魔力を圧縮させなければ十分な殺傷能力を持たせる事ができないため、シユートの弾幕を張るよりも魔力の消耗は激しい。コンプレスポムによる弾幕が徐々に薄くなってきた事から魔力の大半を消費してしまった事もわかる。勝機と感じた敵はさすが高速で移動しエヴァに接近戦を仕掛け始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6068z/>

---

Battle Santa

2012年1月11日06時53分発行